進撃世界に人類最強として生まれたけどエレンがうるさい

ちゃっぱ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地下街にいる子供な俺はケニーと離れたある日、前世で読んでいた漫画「進撃の巨人」の知識を思い出したから死んじまう人全員救うために動きたい。そう思っていたらなんか未来からエレンが来た。記憶を消すために来たとかブチギレた様子で襲い掛かってくるんだけど、未来の俺なにしたの？

○●ｐｉｘｉｖにも投稿します。よろしくお願いいたします。

目　次

幼少期　地下街でのエレンと攻防戦（苦戦しているようだ）
プロローグ ―― 1
第一話、鬼ごっこ ―― 6
第二話、幽霊 ―― 12
第三話、噂 ―― 16
第四話、物置 ―― 20
第五話、風呂 ―― 24
第六話、追手 ―― 29
夢の瞬き、記憶無しの彼と ―― 37
第七話、傲慢 ―― 44
第八話、逃走 ―― 52
第九話、暴挙 ―― 59
思春期　地下街から地上への反抗期と攻防戦（少しは勝てるかもしれない）
第十話、食事 ―― 64
第十一話、邂逅 ―― 70
それは記憶を消される前日譚 ―― 79
第十二話、手紙 ―― 84
第十三話、人間賭博場　前編 ―― 92
ここまでやらかすの兵長ぐらいなものですよ ―― 97
第十四話、人間賭博場　中編 ―― 101
第十五話、人間賭博場　後編 ―― 111
第十六話、娯楽 ―― 120
第十七話、調査兵団より、地下街のゴロツキへ ―― 130

第十八話、試行 ―――― 137
第十九話、厳命 ―――― 144
訓練兵　暗躍するエレンとリヴァイの攻防（疲弊気味）
第二十話、訓練兵の憂鬱 ―――― 150
イルゼの観察手帳 ―――― 153
第二十一話、不穏 ―――― 161
第二十二話、エレンはかなり怒ってる ―――― 167

幼少期　地下街でのエレンと攻防戦（苦戦しているようだ）

プロローグ

前世の記憶を持っていることが良いとは限らない。
知識を持っているということは、つまり幸せだった頃の記憶を持っていると言うに等しい。

「汚ねえな、クソが」

転生したらゴミだらけの地下街にいた。
周囲の話を聞いて、ここが漫画で見たことのある「進撃の巨人」であり、その中で人類最強と名高い人気キャラクターだったリヴァイ兵長に生まれ変わったのだと気づいた。
でも、ちゃんと記憶を思い出したのは幼少期。
ケニーから生きるための術を教わった後だった。
そのおかげで子供の身でも戦う術を習い、汚い大人と交流するにはどうすればいいのかも理解している。前世では抵抗感があった暴力すら、必要であれば使うようになった。
それら全てはケニーのおかげだった。餓死しかけていた俺を救ったのだってあいつが母さんに会いに来てくれたから。
まあ、これから先一人で生きてかなきゃならないし、ケニーに会うのは原作が始まった後。俺が大人になって兵長として活動するようになったらだと思うが……。

（いやでも、俺は朧気ながらもちゃんと知識を持っている。記憶もある、原作の流れも……大体だけど、覚えている）

マーレと言う名の壁外の国。
そしてパラディ島の真実。始祖ユミルがどういう存在なのか。
これから先、何が起きてどうやって巨人が滅んでいくのかも分かる。
ただ細かい時系列までは覚えていない。それだけが唯一の気がかりだろうか。
ただこれから先の絶望的な未来にいろいろ思うことはあるけれど、とりあえず今やるべきことは体を鍛えることだろうかと思った。

筋肉は全てを凌駕する。たぶん、きっと。
人類最強と呼ばれるなら、俺はもっと強くならないといけない。
地下街にいる人よりも強く。巨人に立ち向かえるほど逞しく。
そして、俺自身重傷を負って足手まといなんかにならないために。
きっと俺の記憶はエレンほど苦しいものじゃないはずだ。
あいつは全部を知って、これから先の未来を見て苦しんでいく。だから仕方がなかったことをした。
でも俺は、未来のために誰かが死ぬ必要があるとは思えない。
人はいつか死ぬけれど、エレンが見た未来のために――――その通りに動きたいとは思わない。
生まれた時から記憶があったなら、きっと俺は母さんを生かすために必死に動いたはずだ。自分が死ぬような目に遭うことも、あの離れていくケニーの背中を追いかけることだってしたはず。
手遅れになったのは、記憶を思い出すのが遅かったせいだろう。

――――もしも叶うなら。

（エルヴィン、ハンジ。これから先、死ぬであろう仲間たちを生かしたい）

彼らに対する感情はまだない。
だってアニメや漫画で見ただけのキャラクターに思えるのは、死ん

でほしくないと言うだけのただの自己欲求。
直接会って交流して、そうしてようやくその人に対する生かしたいという感情が強くなるだけだと思うから。
――――対して、ケニーに対する思いは強い。
だって俺の血の繋がりのある叔父だ。彼は何も言わなかったけれど、俺は前世の記憶でそれを知った。だから絶対に生かすと決めた。生かしてどっかの酒場で飲み下してろ。そうしていい未来を築いて、いつかこうだったって友人の墓場まで行って話でもすりゃあいい。

だから俺は、エレンが突き進む未来を止める。
斜め上に俺が覚えている限り全員を生かして救ってみせると決めたから。
そのために体を鍛えよう。
いやまずは部屋の掃除からだろうか。ケニーがいなくなった室内は奴が置いていった酒瓶やらなんやらとたくさんのゴミが存在している。
貰ったナイフだけは綺麗にして使おう。それ以外は……必要ないものは全部処分してちゃんと自室として綺麗にして使おう。
そう思って俺は濡らした布の欠片を手に動く。
この一歩こそ、これから先の未来の――――良い未来に繋げるために。

「駄目ですよ、リヴァイ兵長……いや、今は兵長じゃないか……」
「はっ？」

気が付けば髪を伸ばした男がいた。
――――何処からやってきたのか。部屋に鍵はかけていたはずなのに。
無表情で重たい感情を目に宿す男。
何を考えているのか分からない。いや待て。こいつ今俺の事を「リヴァイ兵長」って言ったか？

そうだ。こいつは俺の知る未来のエレンだ。
つまりこいつは俺が何の知識を持っているのかを知っているのだ。
未来で何かをしたのだろうか。だからまだ幼少期である俺を狙い、始末しようとしているのか。
ってか始祖の力ってそう言うのあったっけ？
いや話してないだけか？　それとも王家たるジークと接触している時間軸か？
グリシャは確か未来から来たエレンが見えていたはずだったよな。
いやでもそれは進撃の巨人の力を保有しているから未来のエレンが見えていただけのはず。なら今の俺に未来のエレンを見る力はない筈なのに……。

（……未来で俺の何かが変わって、ただそれだけで未来のエレンが見える？）

よくわからない状況に俺は首を傾ける。
エレンはそんな俺を捕まえようと動くが、俺はすぐさま避けて部屋の隅へ逃げた。もちろん追い込まれたわけじゃない。子供の身体だから身軽だしエレンに接触しなくても動けるってだけ。人類最強のスペックは伊達じゃない。

「もうわかっているかもしれませんが……未来を変えようとするあなたを止めるために、俺は来ました」

そう言って俺の頭へと手を伸ばしたエレンに、俺は反射的に避ける。
記憶を消そうとしたのだろうか。それぐらいこいつなら容易そうなのに……。

「記憶を消すだけのために、わざわざ俺の元まで来たのか？」
「……」

彼は何も言わない。ただ俺を見つめているだけだ。
そうしてしばらく睨み合っていると、彼はただ小さく溜息を吐いた。

「……リヴァイさん。そんな記憶必要ないでしょう。未来の知識を持っていても意味がない」
「意味がないわけないだろ」
「リヴァイさん」

まるで子供に言い聞かせるように、奴は俺を睨み続ける。
それでも俺は記憶を失いたくはない。だから逃げることにした。

第一話、鬼ごっこ

最近、妙に地下街が騒がしい。
血生臭い騒動とはわけが違う。上にいるクソな兵士共が誰かを探して地下街を荒らしているわけじゃない。ゴロツキが何か悪だくみをして動いているわけでもない。
その中心にいる人物は、意外にも小さな子供だった。
女かと思えるぐらい幼く、小柄なくせに一匹狼を気取ったガキだった。
しかしいざ突っかかって喧嘩を売ると容赦なく歯を折るぐらいには狂暴なのだ。
彼は一人でよく地下街を駆けまわっていた。
以前はケニーとかいう男に連れられて様々な場所へ来ていたようだが今はその男はいない。捨てられて一人になり自暴自棄になって暴れでもしているのか。
しかしいつかはくたばると思っていたガキは意外にもこの地下街で根を張りいろんな場所に顔を出すようになった。
地下街で唯一酒場となっている場所。犯罪者が集まる厄介なアジト。商人たちが護衛兵を連れつつも動いている市場。そうしてそこらで彼は自分の顔を売り、金を稼ぐようになったのだ。
親も連れていない一匹のガキのくせに。
まだ十代にもなっていない幼い年齢のガキが一人で地下街を生きていけるわけがないのに、そいつは逞しく日々を過ごしていた。
ゴロツキ達に囲まれようとも全てぶっ飛ばし、犯罪者共に襲われ殺されそうになっても反撃し、その強さに皆が彼を認めるようになった。
この地下街は実力がすべて。
強いだけ生きるための選択肢も増えるだろう。何故こんなガキが地下街にいるのかと思う奴もいた。兵団などに入隊すれば、きっとい

い実力者になれるだろうと。
そう言ってきた男は外から来る新人の商人の一人だった。まあどこぞのゴロツキに襲われここへ来ることはなくなったが。
この地下街で生きていくためにはある程度ネジが外れていないといけない。
強さだけではない。他人に容赦しないその冷徹な精神。時には仲間を切り捨てるために自分を優先する自己中心的な行動力。太陽の光を浴びれない俺たちはいつか身体がいかれて死んでしまうだろう。それまでのつかの間の楽園を自分たちで築くのだ。
だからあのガキもイカれていた。
たまに誰もいない壁に向かってブツブツと呟いているのだ。まるで誰かと会話しているかのように。
そうしてたまに誰かから逃げるかのように地下街を駆け回っていることもあった。
――――誰かに追いかけられているわけじゃないのに。

「……今日もまたやってるよ」
「ああ、そうだな」

地下街は今日もまた騒がしい。
一匹のガキが妙にうるさく駆けまわり、誰かに向かって怒鳴っているからだ。
ガキの方を見たが、そこには誰も追いかけてきていなかった。
ただ駆け回っているのだ。
誰もいない方を見て、何もない場所へ向けて怒鳴っているだけで。
――――本当に、頭が狂った変なガキだ。

・・・

いつものように地下街でちょっとした金稼ぎをしている間。

俺の背中へ背後霊のごとく付け回すエレンがまた何かを決意したのか、突然襲い掛かってきたので狭い道やら屋根上やら逃げ回っていた。
普通の人間だったら気づかなかったかもしれない。
だって襲い掛かってきたのだってすごい静かだったし、鳥肌とか立ってなかったら避けようともしなかっただろう。
なんか俺、あいつが普通に記憶を消そうとしたときは本能でわかるようだ。
危機察知とも言うべきか。流石は人類最強のスペックと言うべきか。

「だから言っているだろエレン！　俺はこの記憶を消したいわけじゃない！」
「大丈夫ですよリヴァイさん俺が消したいのは貴方の余分な記憶であって、それ以外はそのままにします！　じゃないとこんな地下街でリヴァイさん死んじゃうでしょ！」
「うるせえ人類最強舐めるな！　ってかやっぱり俺の前世の記憶見たなお前!!」
「始祖の巨人や諸々の力舐めないでください！　あと俺が主人公の漫画ってちょっと気持ち悪いですね」
「照れんじゃねえ安心しろよお前は結構人気だったぞ！」
「気持ち悪い！」
「ぶちギレながら俺の記憶飛ばそうとするな!!」

俺と接触しないと記憶が消せないのだろうか。
駆け回りつつも俺に向かって手を伸ばしてくるエレンから避ける。
しかしながら――――。

「ハッ、やっぱりまだ子供なんだな。あのリヴァイ兵長が俺にあっけなく捕まるとか……」
「……エレン」

いつの間にか誘導されていたのか。
壁際に追いやられ、俺の頭を触ってくるエレンに派手な舌打ちを零した。
鳥肌が立つ。
危機感が身体中に巡ってくる。
しかし目に光がない――――未来に絶望しきったこの男は本気で記憶を消したいようだった。
俺が抵抗してもすぐに壁へ押さえつける。
未来のため、自由を手にしたいから必要な物を切り捨てるのか。
それで俺をただのリヴァイにするのか。ようやく思い出したのに。

「いっ……」
「えっ？」

バチリと、エレンと俺の頭の間で何かの火花が飛び散った。
エレンの指先が負傷している。それに彼は眉を顰めてものすごい顔で俺を見ていた。

「そっか、アンタの記憶は始祖ユミルのものとは別の存在。前世の記憶は、別世界のものだからか……」
「はっ？」

ぼそぼそと呟く男に俺は顔を見上げて首を傾けた。
身長差が激しい。今の俺の身長はこいつの股下に届くかどうかってぐらいなのに、こいつ容赦なく壁に引っ張って俺を持ち上げてくるからな。今の俺って他の奴から見たら宙に浮いているように見えるんじゃねえだろうか。
そう呆然としながらも現実逃避していた。
なんか危機感が急になくなったせいだろうか。エレンの雰囲気は怖いままだけれど、殺しにかかるような冷たいものじゃないから大丈

夫かなと思うんだ。
　そうして奇妙なことをぶつぶつ呟いたエレンが俺を見て言うのだ。
「リヴァイさん、記憶を消したいと願ってください」
「嫌に決まってんだろうがクソが」
「いいから早く！　俺の言うことに従ってくれよ!!」
「嫌に決まってんだろうがクソが!!」
「何度も言う台詞か!?」
「それはこっちの台詞だよ!!　お前記憶消せだの消してと願ってだのふざけたこと言ってんじゃねえよ！　これは俺の記憶だ。俺の人生全てだ！　記憶を消すってことは今の『俺』を殺すようなものだ！覚えとけクソガキ!!」
「いやどっちかって言うとリヴァイさんの方がクソガキじゃ……」
「うるせえ精神年齢考えろクソガキ」

　無理やり身体を捩じって奴の手から逃れる。
　ようやく地面に足がついて、少しだけ安堵した。それをエレンに気づかれないようニヤッと笑う。
「つまりあれだな。俺が了承しないとお前はちゃんと記憶を消せねえってことか」
「……」
「否定もねえか」

　そうして笑った俺に、エレンは真面目な顔をして睨みつけてきた。
「リヴァイさん、世の中には知らなきゃよかったってことがあるんですよ。アンタのせいで未来が変に捻じれるんだ」
　エレンの考えていることとは違う未来に行けるなら、それでいいような気がするんだけどな。

「未来は嫌な方向に行ったか？」
「リヴァイさんに教えるわけないだろ」
「そうか」

肯定はなかった。
だからつまりは――――俺が想像するよりはマシな方にいってるかもしれない。
そう思いたいな、俺は。

第二話、幽霊

俺の部屋は元々母さんが使っていた場所を綺麗にして、ケニーが両隣にいた男どもを追い出し空き家にしてから壁ごと吹き飛ばして一つの大きな部屋にしたものだった。

なんというかケニーが適当に家具などを見繕い、適当にぶっ飛ばしたせいで三つ余った扉を一つにして修繕し一軒家を俺に与えてきたのだ。

曰く「俺にはここは狭すぎんだよ。ドチビには広すぎるかもだけどな」と自分のためだけに住めるようにしたと思わせてきたのには今更ながら苦笑する。

だって家具とか服とか、普通に俺が使えるモノばかりだ。

あと地下街でも違和感なく周囲に変だと思われない程度の中古のものを選んだのには笑った。どれだけ俺を気にしてくれたのか。素直じゃないのもほどほどにしろ。

でもほんと、ケニーには頭が上がらない。

いや、実際にちゃんと再会したら「何で俺から離れた」って足蹴にしてぶっ飛ばす気満々だけどな。そこはまあいいんだ。どうでも。

最近ここらの近所でホラー現象が出ているらしい。

そのせいで俺は気楽に紅茶も飲めやしない。

「最近この辺で幽霊が出るって噂になってるぞ」

「それリヴァイさんのせいですよね。俺が見えてるの貴方だけですし」

「俺のせいかよ……」

呆れたような顔で俺を見てくるエレンに足蹴りを飛ばす。しかし彼もいろいろと修羅場を潜り抜けたからか未来の俺から学んだのか、

すぐさま避けてきた。
それに苛立ち交じりに舌打ちを鳴らす。
「俺は記憶を消すつもりはない。だからもう来なくてもいいんじゃないか？」
「いいえ、諦めるつもりはありませんよ」
「……というか、記憶を消すかどうか巨人の能力でわからねえのか？」
俺の言葉にエレンは一瞬視線をうろつかせる。
その意味することは何なのか分からず、じっと奴を観察していた。
そうするとエレンは仕方がないと観念したかのように俺を見て乾いた笑みを浮かべてくるのだ。
「……前世と言う名の、俺の人生全てが漫画になった未知の記憶だからでしょうかね。始祖ユミルとはまた別の知識だからか……リヴァイさんだけ、ちょっと斜め上にぶっ飛んでるんですよね」
「はぁ？」
つまり、俺の前世の記憶のせいで始祖ユミルの力は使えないということか。
いやそれは以前俺を壁まで追い詰めたあの悔しい事件から思い知ったことだ。でもそれが未来で大きく影響を与えている可能性が出てきた。
つまりエレンは、俺の動きが未知数なんだ。
他の人たちは未来を読める。無垢の巨人すら動かす力がある。
でも俺という存在は前世の知識があるせいか動かせないと……。
それに何故か恐怖を覚えるが――――エレンが俺を冷めた目で見てくるのですぐに殺意へ切り替わった。
「人類最強とか名乗ったせいでユミルの民からどっかへ飛んだんですか兵長。人類じゃなくなっちゃったんですか？　もうちょっとちゃ

んとした人間として……人として生きてくださいよ」
「いや俺を巨人以上の化け物として扱うんじゃねえよ馬鹿野郎」

ふざけたことを言うエレンを容赦なく足蹴りにした。
今度は避けることなくちゃんと当たり、盛大な音を立ててエレンが寝転がった。

……もしかしてこういう音も幽霊騒動の原因になっているのか？
いやでもエレンの出す音は全部俺しか聞こえないかもしれない。
というかエレンって俺以外は触れるのか？
食事をした姿を見たことはないし、気が付いたら俺の背後にいるけれど俺以外に影響を与える者はあるのだろうか。
そこらへんもちょっと調べた方が良いかもしれないな。
まあ今日の分の掃除が終わってないからそれをしてからだけど。

「エレン、掃除をするから手伝え」
「いや俺実体じゃないんで手伝えませんよ。一人でやってください」
「あぁ？　チッ、使えねえな……」

まあいいかと俺は思考を切り替えた。
とにかく掃除だ。地下街が汚いから病気にでもなるんだろう。清潔第一。衛生管理をきちんとすれば病気にはならないはずだ。
エレンはともかく、今は俺一人で生きなきゃいけないのだから。

「ところでリヴァイさん、そろそろ記憶を消したいとか思いません？」
「思わねえよクソが。掃除中に俺の真横に立つんじゃねえ埃が舞うだろうが!!!」
「いやだから俺、実体ねえって言ってるだろ！　俺は埃を舞うような体してません!!」

「存在が埃みたいに鬱陶しいんだよ外出てろ!!」
「存在が埃!?」

第三話、噂

地下街で妙に喧しいガキがある商人に気に入られたのか、週に何度か市場で顔を見かけるようになった。
あのガキは大人に負けず劣らず強い。その証拠に、いつも大事そうに懐にしまい込んでいるナイフを使わず素手で大人をぶっ飛ばしている様子がよく見えた。
だから護衛の仕事かと思いきや、どうやら物置の整理を任されたらしい。
ただのガキに、商人が大事に保管している品がたくさんある物置にだぞ。本当に気に入られたのか分かりはしないが、何かきな臭いとは思った。
地下街に住むただのガキに任せるような仕事じゃないと。
そう思いはしたが、それを止めようとは思わなかった。
あのガキはいろいろと地下街で騒がしくし過ぎたからな。
もしかしたらこれで見納めになるかもしれない。そう思うと少しばかり寂しいが……。

まあそれも、弱けりゃすぐ死んじまう地下街では仕方のないことだ。
あいつは目立ちすぎたんだ。だから目を付けられたんだろうよ。

・・・

朝からエレンがうるさい。
今日からやる仕事に何か引っかかっているのか。
まあ俺としても今回の仕事の意図に思うことはあるが……。

「……本当にやるんですか、リヴァイさん」

「うるせえエレン。今は外なんだから話しかけるんじゃねえよ」

俺以外にも全員、エレンのことが見えていると思って地下街の何処を歩いていても普通に話しかけていたのが致命的だったのか。なんか俺について「頭が狂った妙に強いガキがいる」と噂になってしまっていたのだ。

だからちょっとした仕事を任されるときに「今日は独り言少ないのね」とか「ぼそぼそ変なこと言うガキ」とか……あと「薬やるんじゃねえぞガキのくせに！　そんな金あるなら俺に寄越せ！」と襲い掛かってくる輩もいるぐらいだ。

それにキレてエレンに暴力をふるったがすぐに避けられた。クソっ、やっぱりガキの足じゃ小さすぎてすぐ避けられるか。

絶対にいつか仕返ししてやるから覚えてろよ。

「リヴァイさん？　なんか変なこと考えてません？」
「あぁ？　知りてえなら俺の頭の中でも見たらどうだ」
「見ていいんですか？」
「見るなよ気色悪い。プライバシーゼロかよぶっ飛ばすぞ」
「兵長ほんとそういうところですよ！」
「あぁ？　ってか前世の記憶見たお前に言われたくねえよ。プライバシーとかそういう外界的な単語覚えてくる程度には俺の記憶を何度も見てきたんだろうが」
「……」
「……おい、おいこっちみろエレン。おいこら」

いやいや待て。その反応一度見たって程度じゃねえな。そんなに俺の記憶何度も見てきたのか？

本当にプライバシーのプの字もねえぐらい見たんだなこいつ？

そっぽを向いたエレンに苛立ってついそこらにあった瓦礫をぶん投げた――――ら、エレンにではなくその奥にいた厳つい男の顔面に直撃しぶっ飛ばしてしまったようだ。

「兄貴ぃぃ!!!」
「てめえこのチビガキ!!　アニキに何しやがるんだ!!」
「あー。……ぶん投げた先にいたてめえが悪い」

頬をポリポリと掻いてエレンを睨んだ。
エレンは俺が喧嘩をしてもどうでもいいのか、ただ呆れたような目で壁際へ移動してくる。こいつのせいだっていうのになんだよその立ち姿。格好良いとでも思ってんのか。壁に背を付けて俺をじっと見つめるのやめろ。後方彼氏面かよ。
エレンを睨んでいると不意にピリッと空気が揺れるのを感じて身体を右斜めに移動した。そうして見えたのは男がこぶしを握り俺にぶん殴りかかってきた姿だった。

「やんのかゴラァ!!」
「避けんじゃねえよ殴らせろ!!」

面倒くさいな。これから仕事だって言うのに汚れちまうだろうが。
そう思いつつ男どもを見ると、何故かそのうちの一人がハッと俺の顔を見てきた。

「おい待てこいつゴロツキのリヴァイだ!!」
「はっ、まさか……頭がおかしいって噂のガキか!?」
「ひぃ!?　こいつに関わると俺達まで頭おかしくなるかもしれねえ!」
「変なものが見えるようになるのか!?」
「頭がおかしい病に感染するかもしれない！」
「やべえ逃げるぞ!!」

「いや待ておいゴラ!!」

ちょっと待ってなんか噂が変に捻じれてるような気がする。
エレンが「ぶふっ」と笑って口を手で押さえて笑いをこらえているが、つまりそういうことだよな。
「エレンお前やっぱりぶん殴らせろ!!」
そうやって怒鳴ったら、通行人がヒィと悲鳴を上げて俺から逃げていく。
それを呆然と見送ってしまい、エレンへ向ける殺意が強まったのを感じた。
「エレン！」
「いや今のはリヴァイさんの顔が凶悪すぎたからですよ！　その顔ほんと悪人どころじゃないですから止めた方が良いですよ幼児のくせに!!」
「誰が幼児だゴラァ！」
とりあえず一発はお見舞いできたから良しとしよう。巨人の力を持つこいつにとっては怪我なんてすぐ治っちまうけれど……。
さて、仕事でもしようか。
「待ってくださいよリヴァイさん。本当にあの仕事やるんですか？」
「二度目の会話止めろ。引き受けたもんはやるに決まってるだろ……たとえそれがどんなものであってもだ」
まあ何かしら罠が仕掛けられていても、それを潜り抜けるのが人類最強ってもんだろ。
そう思う俺にエレンは何を考えているのか、ただ無表情で俺を見下ろしてきたのだった。

第四話、物置

物置の整理を任された。
地下街に住む身分の証明も何も出来ないただのガキに対して、地上でも立派に商売をやっている男どもがだ。

（まあどうせ、俺を潰しに来たのか何かだろうが……）

ケニーと一緒にいた頃。
目立った行動をした結果どうなるのかを見たことがある。それはもう言葉にしたくないほど酷いありさまだった。その悲惨な末路を辿るまいと誓ったはずだった。
今の俺を見たらケニーは何と思うだろうか。
……まあ嗤うよな。心底馬鹿にしたように笑って、そんで「そんな風に育てた覚えはねえぞドチビ。頭まで小さすぎて分からなかったか？」とか、また馬鹿にしてくるんだろう分かるぞ。
とりあえずうまく罠から逃げて、金だけでも貰っておこう。そうじゃないとやってられない。
それに今回の仕事は報酬が大きいし、うまくいけば俺がずっと欲しいと思っていたあの掃除セットが手に入るかもだし。

（ってか、連中が流してるあの噂もそうだけど、あれ絶対に俺のせいじゃないだろクソが）

俺としてはエレンと遭遇した結果目立ったせいでもあるので不本意なんだが……。
まあ噂と言っても俺以上に変な奴は地下街にたくさん存在する。手足が動かず飢えて死んでいく奴もいるし、頭がおかしくなって突然暴れる奴もいる。

地下街はイカれた奴らが集う場所だ。だから俺の噂はいつか流れて消えていくだろう。
ケニーがいた頃も、あいつの噂でいっぱいだったけれど、それを気にした様子はなかった。
いつの間にか消えていった噂に、ケニーが何かやったのかと質問したことがあるが、それを一蹴してきた。
だから俺は分かっている。噂を気にしなくてもいいと。
他の頭の狂った奴らによって消えることを。

「さて、と……」

与えられた仕事は物置の整理だが、俺の部屋よりは少しだけ広い室内。壁に汚れが付いており、天井には蜘蛛の巣があった。
それと同じく地面をよく見れば埃が舞っている。俺が歩くだけで足跡が埃ではっきり見えそうだ。
とりあえず窓を開けて換気だけしておこう。

「チッ」

クソ汚ねえ場所で荷物整理とかやってられねえな。樽やら何やら、荷物が雑に積み上げられてるし、ガキに任せる仕事じゃないのは確かだ。
つまりあれだろう。俺が満足に仕事を出来ないようにして、それに文句を言ってなにかを要求するのか。それともただの嫌がらせか。

「リヴァイさん……」
「うるせえエレン」

真面目な顔で俺を見下ろすエレン。
先ほどの騒動のせいか髪を解いて長髪を肩へ伸ばした状態のままだ。

だから少しだけ不気味に見える。影が大きく、顔の表情があまり見えないせいだろうか。
じっと見つめてくるエレンに少しだけ寒気がした。
危機察知とはまたわけが違う。なんか嫌な感じがする。
「何でお前は今の俺の事を心配するんだ。どうせお前にとっては俺は過去の存在だろ？」
過去の出来事だったら、そこまで心配しなくてもいいはずだ。
むしろこれからどうやって俺から記憶を奪うのかに専念しなきゃいけないはず。それなのにエレンは無駄に俺を心配する。それが気がかりだった。
「……言ったはずだろ。リヴァイさん」
「あぁ？」
「アンタは俺の力から完全に外れてる。未来もリヴァイ兵長だけは正しく読むことは出来なかった。俺の行動で兵長の動きが変わるんだ」
「……ああ、バタフライエフェクトか」
「そうだよ。前世の記憶で見たアンタの知識通りだ。確定している未来とは違う。俺がこうやって過去に来たから、リヴァイさんが今ここで死ぬ可能性だって残されてる」
未来は常に変化する。
ユミルの民。あの『道』が辿る未来とは違って、俺は大きく外れた存在だからとエレンは言う。
心配しているのは、そういう未来を辿る俺を見たのか。
俺のせいで未来が複数に分かれたということは、それ相応に悲惨な未来も残されているかもしれない。今の段階でも俺はこいつのいる未来を変えているのか。
それに俺は理解した。エレンが俺の記憶を早く消したいのも分かった。

でもそれとこれとはわけが違う。最悪の結果なんてクソくらえだ。俺は記憶を消したくない。だからこいつの意思には従わない。

「まあつまり、お前は俺が死ぬかもしれないから離れないのか。……なら、エレン。お前ちょっと外に出てろ」

「はい？」

「ここで俺が死なないためには、俺に協力するしかないはずだろ？」

姿が見えない幽霊的なエレンは、俺にとっての大切な目と耳になる。人が誰もいないと思ってつい嘲笑って話す内容を俺が知ることも可能だ。盗聴器的な役割だな。

掃除しつつ笑った俺に、エレンが何故か己の両腕を擦って変な目で見てきた。そんなに変な顔してただろうか。心外だ。

「俺はリヴァイさんに使われるために来たんじゃないんですけど……」

「俺を目立たせた噂を作ったお前の落ち度だ。てめえが立てた失敗はてめえでなんとかしろ」

「はぁ……今日だけですよリヴァイさん。俺はアンタの記憶を消すためにここにいるんだ」

「知ってる」

「あークソっ。なんで話しちまったんだろ……」

「お前が俺の記憶全部見たんだからな。お互い様だ」

綺麗に掃除できたし、荷物整理だけ。

普通の子供だったら持てないはずの荷物も、アッカーマンとしての血のおかげか、余裕で持つことが出来た。エレンが注意してくれたおかげで荷物が壊れることもなかったし、盗難騒ぎも起きなかった。

商人が俺の事を苛立った目で見てきたのでいつか痛い目に遭わせようと誓うことにした。

第五話、風呂

俺を罠にかけようとしていたあの商人のお偉いさんたちに何かあったのか、地下街のどっかで襲われ無残な死体で見つかったらしい。

復讐する相手が消えたことに舌打ちを零す。

しかし、いくら憎くともつい最近まで俺と会話していた人が亡くなるというのはなんだか寂しいものがある。

この世界は本当に厳しい。残酷で人がいつ死んでもおかしくない。

地下街だからその状況がより酷いだけであって、まだ巨人が攻めてきていない地上の世界はマシかもしれないが……。

（……ん？）

考え事をしつつ水場の掃除をしていた俺に誰かが接近する。

視線だけそちらへ向ければ頭に向かって手を伸ばすエレンがいた。

何を考えているのか。静かに影を落とすエレンに触られても変に鳥肌が立つわけじゃないのでそのまま放置することにした。

そうしたら彼がバチリと指に火花を散らして火傷を負ったような傷が出来たので――――たぶん俺の記憶を消そうとしたんだと思う。

最近はよく同じことを繰り返していた。

俺が了承しないと無理だと伝えてきたのはエレンのくせに、勝手に何度も俺の記憶消去を行っては失敗しているのだ。

そういう諦めない頑固なところは流石だと思う。俺も見習うべきか。

これから先……というか、現段階でエレンと対立気味の俺にとって未来で死ぬ予定の人を生き残らせるためには、これぐらいの執念は必要かもしれないな。

そう思いつつも、俺は掃除を続けていた。家の外。庭として使って

いる場所には井戸が設置してある。それを知るのは俺とケニーぐらいだろう。これもケニーが去る前に作っていたものだ。いつの間にか自室に近い場所に水汲み場を作ったのにはビビった。地下街でわざわざそういう面倒な工事するか？

結構金かけてるくせにそういうの顔にも出さねえのほんとふざけるなって怒鳴ってやりたい。お前は絶対に生かす。絶対だからな。

（……あー。ケニーの事を考えてると苛立つし、止めよう）

思考を切り替え、目的のために動く。

エレンはそんな俺の行動をじっと見ていた。無表情で髪も降ろしているせいか幽霊のように見える。

彼を横目に少しだけスペースが開いているところに大きめの石を並べ、地面に軽く穴を開けて設置場所を決める。

次は別の場所で作業開始だ。庭が汚れるのも嫌だしな。

綺麗にしておいた木材を持ってきて作っていく。人類最強のスペックと言えど結構大変な作業なので一日で出来るとは思わない。雑に終わらせても嫌だし、ゆっくり作業して丁寧にやろう。

本格的に作業を開始した俺に我慢が出来なくなったのか、エレンが近づいてきた。

「リヴァイさん、何してるんですか」

「見て分からねえかエレン。風呂を作ってるんだ」

「また変なものを……」

呆れたような目で見つめてくるエレンに俺は鼻で笑う。

お前、風呂の良さを分かってないな？

あの熱い湯に肩まで浸かっていく感覚が良いんだろうが。清潔になれるし身体も温まって気持ちいいんだぞ。

それに頑張れば果物ぐらいは手に入りそうだし、中身は食べて皮だけ消毒し湯に入れてその香りを味わう。食べるだけじゃなく二度楽

しめるというものだ。
ヒノキ風な木材の風呂だからちゃんと掃除はこまめにしなきゃだが、それぐらいなら俺でも出来るしな。むしろ得意分野だ。
というか何でエレンは変なものと言ったのだろうか。未来から来ている彼はこの風呂については何も知らないのか？

「兵長になった俺は兵団に風呂を広めなかったのか？」
「未来の情報を話すわけにはいかないって何度も言ってるでしょう」

ツンとそっぽを向いたエレンに俺は肩をすくめる。
……そういえばエレンっていつ風呂とか入ってるんだろうか。食事中とか仕事をしているときは気が付いたらいなくなっていることがあるし、幽霊みたいに神出鬼没なんだよな。
彼が何かを食べている姿を見たことがない。
実体がないせいか、それとも彼にとってここが過去になるからか。

「リヴァイさん」
「あぁ？」
「リヴァイさんの家に風呂ならあるでしょう？　それ使わないんですか？」
「馬鹿言え。あれは風呂とは言わねえ。シャワーもどきなだけだ。しかも庭にある井戸で水を汲みに行かなきゃならねえし、湯も出ねえし水も濁ってやがるし、滝行より酷え代物だろ。それよりは風呂の方が良い」
「意味わからないこと言わないでくださいよ。それにこんな地下街で水場が完備されてるだけでも豪華ってもんでしょ」
「意味わかってるくせに変な目で俺を見るな。……まあ確かにシャワーもどきがあるだけマシかもしれない。地下街だと家も持てねえ路上暮らしな奴が多いからな」

だから病気になって死んでいくのだろう。

ああ全く、ケニーが俺のために用意してくれた全てにここまで感謝しなきゃならないとは思わなかった。なんであいつ素直じゃないんだ。風呂とかも……まあちょっとシャワー室というかシャワーもどきなのは嫌だが、我儘なんて言ってられない。
この世界じゃ仕方がないことだ。
外で水を汲みにいくのも、お湯を作るために木材が必要なのも。
細かい部分で忘れちまった漫画の知識でもケニーの台詞だけは覚えているぞ。
人の親になれねえなんかじゃねえよ。こんなにいろいろやっておいて、親になれないわけないだろうが。
そう考えていてふとエレンの方を見た。
見なきゃよかった。

「……エレン。その目止めろ」
「はぁ」

俺の思考でも読んでいるのだろうか。エレンの能力がどこまで出来るのか分からないので何とも言えない。
しかしこれだけは分かる。
――――こいつ、俺がケニーについていろいろ考えてるって察してるだろ。
生暖かい目で俺を見てくるの止めろクソが。
浮浪者みたいなやばい雰囲気出してるくせに。

「……エレンよ」
「はい？」
「喜べ、風呂が出来たらお前にも入らせてやる」
「いや俺実体じゃないんで無理です」
「何言ってるんだ俺が触れるんだから半分は実体みたいなもんだろうが」
「無茶なこと言わないでくれません？　ああ、でも……」

いつものように呆れた目で俺を見てきたエレンが、ちょっとだけ思いついたかのように考え込む。
急に何だろうかと警戒していると、エレンが俺の頭を触ってきた。
本当に突然だったから躱すことすら出来なかった。
殺意とか攻撃的な感情はなかったから反射で避けられなかっただけだけど……。
何かをするわけでもない、ただじっと俺の頭をボールのように掴んでいるエレンに眉を顰めた。

「……エレン？」
「風呂に入らせたいならリヴァイさんの余分な記憶をくれませんか？
それならいいですよ」
「いいわけねえだろうがふざけんなクソが！」

手を叩いて彼から離れると、エレンは予想していたというような顔で溜息を吐いたのだった。
溜息を吐きたいのはこっちの方だぞ。油断も隙もないなまったく。

第六話、追手

地下街は常に騒がしい。
喧嘩によって響く悲鳴と怒声。酒を飲んで喚く男たちの声。それ以外にもいろいろと、時間が朝でも夜でも構わず喧騒が響き渡っていた。
もちろん地下街には静寂な空気に包まれた区域も存在する。
しかしそこはより殺伐としているか絶望に満ちた場所しかない。
人が路上のどこかで倒れ、死んでいる。
地下街の表通りとも言うべき賑やかな場所は分かりにくいが、目立たない路地裏、通路の奥の狭まった広場などは死体が朽ち果てていた。
それらを大雑把に捨てる業者がいれば、丁寧に土に埋めようとする愚かで優しい人たちがいる。

「はぁ、はぁ……」

そんな静かで死に溢れた地下街区域にて、珍しく一人の少年が駆けまわっていた。
路地の隅っこで力なく座る一人がその騒がしさに気づき、その方向へ視線を向けた。
いつものあの頭のおかしいゴロツキのリヴァイとは違うと分かり、また顔を俯かせる。そうして目を閉じて静かに死を待つ彼とは違い、少年は必死に生きるため走っていた。

「はぁ……はっ……」

必死に前へ、出口が見えない先へと駆けていく。
背後から聞こえてくる物騒な音。「ガキでも容赦するな殺せ！」という嫌な声。石が投げられ頭に当たり、視界がふらつくが足を止めよ

うとはしなかった。
逃げ回る最中地面に転んで擦り傷が出来ようとも、服が泥まみれになろうとも構わずに。
懐にしまい込んだパンを一つ抱えて。
そうして必死に逃げた通路で行き止まりとなっているのに気づき、絶望する。

「こんなところで諦められるか……!!」

捕まればきっと酷い目に遭うだろう。
いや、もしかしたら殺されるかもしれない。地下街とはそういうところだ。小さなパン一つ盗んだだけでも生死に関わるのだから。
後方から足音が聞こえる。
曲がり角が多い通路だからか、「こっちに行ったか!?」「いやいない」「向こう側を探せ!」と怒声が響く。近づいているのだろう。ここは行き止まりだから引き返そうにも奴らに見つかってしまう危険性があった。

「何かないか、なにか……」

打開策を探す少年がふと壁が欠けていることに気づく。
狭い穴が開いているのだ。
それは子供だと通れるけれど、大人には難しいもの。
しかも小さくて見つけにくい場所にある。ここから逃げればきっと奴らは自分を見失う。完全に撒くことが出来るはずだ。
でも、と。少年はその狭い穴に入るのを戸惑った。
その先にやばい大人がいる可能性もあった。殺人を好む者。変態。そして頭が狂ったやばい奴。
そういう奴に対抗できるかと考えて、子供たる彼は遭遇したら逃げるのは不可能だと判断する。
これは賭けでもあった。

引き返して奴らと鉢合わせになる危険性か、穴の先に危険人物がいる可能性のどちらを選ぶか。

「クソっ！　どこ行きやがったあのクソガキ！」

「ッ――――!!」

そうして立ち止まっていると先ほどより近くから声が響くのが分かった。

もう戸惑ってはいられない。生きるためには前へ進まなきゃならない。危険性を取るなら壁の向こう側だと少年は足を動かした。

穴の中は少し狭くて暗い。向こう側に何か布でもかけられているのか、それを軽くどかして中へ入るとそこに広がっていたのは不思議な空間だった。

木材が綺麗に組み立てられて、丸い形をしていた。その中には地下街では珍しい透明な液体が入っていた。

それは広い空間のど真ん中に設置され、細長いレンガ上のブロックの上に置かれている。レンガブロックの間にも小さな空間が出来ていた。その中で細かく切られた木材が燃えているのだ。

それが水を温かくさせているのか、ほのかに湯気が立っている。

「なんだ、ここ……」

少年が想像していたのはより酷いもの。

血に濡れた地面。死体が転がっていて、包丁を手にこちらへ近づく気色悪い大人の男が自分を発見して捕まえようとする最悪のもの。それしかないと思っていたのだ。

それなのに、そんな考えとは真逆の空間に感嘆の息を零した。

ここは何だろう。

何故か分からないけれど、いい匂いがする。風呂に何かが浮いているのが見えた。果物の皮か？

その匂いに耐え切れずクゥっと腹が減り思わず懐にしまったパンを一口食べた。流石に一気に食べたらもったいないので一口だけ。

もぐもぐと口を動かして、ふと気づく。

そういえば、と。

ちょっとした違和感を感じた少年は地面を見た。よく見ればその空間は一部分だけ綺麗に土が撒かれており、それらはちゃんと整えられている。木材で囲われているその部分から穴が通じており、少年は偶然にも硬い石で覆われた場所とは違い、その一部囲まれた所から出てきてしまったようだった。

土の感触が気持ちいい。その違和感に気づき愕然としたのだ。

整備されていない場所、泥水などで濡れた硬い土は触った記憶がある。しかしそれとはわけが違う。柔らかくてとても気持ちがいい。ずっと触っていられる。

――――これがあの硬い土と同じものだと気づくのに時間はかかったが、それは仕方がなかった。なんせ地下街では珍しいものだったから。

地下街の端っこ。より遠くへ行けば確かに柔らかめの土や草などがあるのは分かっている。

草木を覆う土に柔らかいものが存在していることも、少年は知っている。

だって彼は、踏み固まったものしか知らなかったのだ。尖った石、ごみが散乱し素足が傷つくような地面の感触しか理解していなかったから。

もしかしたら地下街の端っこ。少年が知るあの階段とはまた別の地上に最も近い場所まで行けばこの感触に似た土を触れるかもしれない。しかしそこまで行く体力はパン一個盗むだけでも命がけな彼にはなかった。

――――それは少年にとって生まれて初めての感触。柔らかく栄養分を含んだ土を踏んだ瞬間だったのだ。

裸足でも痛くはない。

靴がない少年はその不思議な感触に首を傾けつつ土を踏み続けた。

地面だけじゃない。周りもそうだ。珍しいものだらけで好奇心が擽られる。普通だったら未知な空間に恐怖を抱くというのに、ここは本当に綺麗だった。
ピッカピカなのだ。地下街にしては不気味なぐらい。

「おい」
「……えっ？」

聞こえてきた声はアルトの音域に近いもの。
警戒し振り返った先にいたのは細長い棒を抱えた自分と同じ年頃かそれより年下の子供だった。髪が長く、少女かと一瞬誤認したがその目つきの鋭さや殺気にも似た強烈な威圧感にすぐ男だと察する。
自分より背が小さいその子供がずんずんと自分の方へやってきて、急に胸ぐらを掴んできた。

「おいお前今どこを踏んでいるのか分かっててやってんのか？」
「えっ」
「畑にするはずの場所で何やってんだって聞いてんだよクソ野郎。猫が足踏みするみてえに無駄に踏み荒らしやがって」
「……っ！　そ、それは悪い。悪かった。ごめん」

冷や汗をかきつつも両手を広げて抵抗はしないと姿勢で示す。
自分が想像していた危険性よりはまだマシな方だろう。こいつが殺しにかかったとしても、自分より背が小さいから逃げ切れるはずだ。たぶん。
こんな広い空間を独り占めしているわけはないはずだ。彼を保護しているか身内として扱う大人が出てくる可能性もあるので、まだ警戒は解けない。
そう思っていると、その小さな子供は舌打ちを鳴らしつつも手を離し、少し離れた場所で少年を睨みつけてきた。

「……それで、何処から入ってきた？」
「ええと、この先に小さな穴が開いてあったから。……俺ぐらいが入れるサイズだよ。それに仕方がなかったんだ」
「ほう？　仕方がなかったで畑予定の土を踏み荒らすか？」
「それは本当に悪かった。ハタケってものが何なのかわからないけど……踏み荒らしたのは謝るよ」

勝手に穴の中に入った自分も悪い。そう少年は心の底から反省する。
もしも住処にしている場所に勝手に誰かが入ってこられて、しかも大切な持ち物を荒らされたらキレるのは当然だ。
壁の向こう側から怒鳴り声が聞こえてくる。まだ探しているのか。しつこいな。
それにビクリと肩を震わせると、小さな子供は溜息を吐いた。

「なるほど。あいつらから逃げるためにその小さな穴に入ったってわけか。何やらかしたんだ」
「俺がここにいるってこと、ばらさない？」
「状況によるな」
「はぁ、まあいいけど……パン一個だ」
「あぁ？」

首を傾けたので少年は懐から一口だけ齧ったパンを見せた。
それを奪われないように注意しつつ、自嘲気味に笑う。

「小さなパン一個であいつらが追いかけてきたんだ。だから俺は必死に逃げてきたってわけ」
「……そうか」
「そんなに驚くこと？　身寄りのない子供が生きるには盗むのが当然だし……これぐらい当たり前だろ」

そう言いつつも理解する。
彼は誰かに育てられているのだろう。そうじゃなければこんな綺麗な空間に居られるわけがない。地下街で暮らすには身綺麗だし、自分とは違って怪我も何もない。それぐらい大切にされているんだろう。
自分の境遇と彼と比べて惨めに思う。
いつかこんな生活から抜け出して……どうせならギャングにでもなって生きていきたい。地下街で信頼できる仲間を集めて、共に暮らしていくんだ。そうしていつか地上へ出る。それだけの夢を叶えるには、現状パンすら買えない自分に、少年は情けなく感じていた。

「勝手に入って悪かったよ。もう二度とここには来ないから……」
「待て」
「なに？」

帰さないつもりだろうか。この小さな子供を保護している大人に引き渡すつもりか。
警戒し距離を取る少年に対し、その子供は何かを考えるようにじっとこちらを見つめてきた。
そうして彼は戸惑い気味に口を開く。

「……俺の家、その土を踏み荒らしたんだ。このまま帰すことはできねえ。だから名前を教えろ」
「えっ、名前だけ？　聞いてどうするんだ」
「いいや、少し……気になっただけだ」

どうせもう二度と会わないんだし、でたらめなことを言おうかと悩むが子供はそれを察したのかジト目でこちらを見つめてきた。

「偽名なんてクソな真似すんじゃねえぞ」
「あーハイハイ。分かったよ」

しょうがない。……でもまあ、いいか。
何度も言うように、この子供とはこれでお別れなのだから。

「ファーランだよ。ファーラン・チャーチ」
「ファーラン……？」
「そう。それが俺の名前」

そうやって笑って離れようとしたファーランに、何故か子供はその腕を離そうとしなかった。
急にファーランとは違う何もない空間を睨みつけてくる。何を見ているのだろうか。ぼそぼそと「うるせえクソが」や「エレン。そう何度も言うな喧しい」やら、「これは俺のせいじゃないだろ」とか独り言を呟いている。
エレンって誰だ。頭がおかしいのか。こいつ大丈夫なのか？
腕を離してもらおうと動くが、思いのほか子供の力が強く引き剥がせない。

「チッ……おいファーラン」
「な、なんだよ」
「腹が空いてんだろ。俺の家に来い」
「はぁ？」
「地下街で生き抜く方法を教えてやるよ」

そう言って不敵に笑った子供に、俺は抵抗なんて出来やしなかった。

夢の瞬き、記憶無しの彼と

彼が目を覚ますまで、まだ時間はあった。
静かにベッド脇の椅子に座り、腕を組んでその時を待つ。
ただじっと待っているだけではない。こうしている間も目を閉じて、彼にとっての未来を垣間見る。
それはまるで鏡を映し出すかのように。自分が見た記憶。その経験、知識。そして彼が動いた結果が頭に直接叩きこまれていく。
一瞬で流れるその情報量の多さにエレンは頭痛に襲われた。額に手をおいて深く溜息を吐く。それは珍しく弱り切った姿を表情に出して見せていた光景だった。
もしもここにリヴァイが起きて彼を見ていたなら、エレンは当然弱った姿など見せようとしなかっただろう。
幼いリヴァイが眠りにつくときはいつもこうやって静かに現在時点までの未来から過去までの変異を隅々まで調べ上げ、それを記憶していた。

しかし今回は少なかったように感じた。
――その分、殺伐度は増していたが。

「……ん、あれ。ここは？」

薄っぺらい布が敷かれたベッドから起き上がる音が響く。
戸惑う声が聞こえ、即座に意識を声がする方へ集中させる。
そこにいた彼は、いつもの表情とは違いとても儚く見えた。

「誰だ？」
「……目が覚めたか」

いつもならもう少しだけ愛想よくしているが、今は違う。
わざと敬語を使わず、初っ端から威圧していくために。
無表情で取り繕いつつ、彼を見下ろすため椅子から立ち上がった。
彼は現状を理解できず落ち着かない様子で視線を巡らせていた。
エレンを直視した瞬間、その目は見開かれ呆然と口を開いて固まってしまったが。

「説明はいるか？」
「……いや、待て。少し待ってくれ……ここは一体……」
「パラディ島の地下街区域。そこにお前を閉じ込めた」
「はっ？」

部屋に鍵をかけていること。
ここからお前は出られない。監禁状態であることを伝えていく。

「いやちょっと待ってくれ。なんで俺が監禁なんか……それにパラディ島って聞いた記憶が……俺は、死んだはずじゃ？」
「そうだ。死んで転生して、今ここに生まれ変わって生きているだけだ」
「生まれ変わって……俺の名前は？」
「それは知らなくてもいい。俺はただお前に一つの選択を迫っているだけだ」

何が起きているのか分からないようで、彼は困惑しきった様子だった。
まあ彼の気持ちを考えるなら当然といえた。なんせ目が覚めたら転生していたと理解する男が目の前にいて、よくわからない地下に監禁されているのだ。
そんな中、急に選択を迫っているとか言われても「ちょっと待ってくれ」と思うのは当然。
恐怖を感じているように見えた。彼の心は疑問でいっぱいだった

が、パラディ島という単語とエレン自身の違和感に気づいたのだろう。じっと顔を見つめてくる彼は、首を傾けて問いかける。

「お前は……エレン、だよな？　エレン・イエーガー。えっ、漫画の世界かここ？　それとも夢？」

「夢じゃねえよ。ここは現実。お前が前世で見た漫画と似た世界だ」

「何で俺を……ってか何で漫画のことを知ってるんだ――――」

警戒しつつ俺に問いかけようとした声を遮る。

「お前のその記憶が邪魔なんだ」

彼の小さな腕を強く握ると、痛みが走ったのか抵抗しようともがいていく。

しかし彼は今、ただの子供だった。

何の力も持たない、非力で哀れな被害者だった。

「死にたくないならその前世の記憶を全て渡せ。俺が全部、うまく使ってやる」

「ッ――――嫌だ」

思いっきり頬をぶん殴ると彼はベッドから吹き飛び床へ転げ落ちる。

そんな情けない姿見たいわけじゃなかったが……。

「もう一度言うぞ、記憶を渡せ」

「……い、いやだ」

「はぁ」

地面に転がったその小さな体を蹴り飛ばす。

血反吐を吐いた彼は壁にぶつかりまた動かなくなる。

「これ以上拒否をするなら拷問も辞さない。……ああそうだ、指の爪でも剥がしてやろうか。確かお前の前世の記憶の中にあったよな？　じっくりゆっくり剥がしてやろうか？」

至近距離でそう言い放つ。

息が当たるぐらい近い場所で見た彼は、顔を青ざめさせていた。

爪を剥がされる様子を想像してしまったのか。

暴力に慣れていない平穏な記憶しかない精神力では、小さな体は恐怖に溺れる。

「その記憶を渡せ」

「……」

「痛い思いをしたいのか？」

「……渡せるわけ、ないだろ」

何を思ったのかは分からない。

ただその時、彼が心の底から抵抗しようと思い始めたことだけは理解できた。俺のことを睨んできたのだ。

躾けに必要なのは痛みだという言葉を痛感させるため、頬を殴る。胸倉を掴んで持ち上げて、ベッドへと叩きつけながらも。

彼は痛みにもがき苦しんでいたが、泣きはしなかった。

逃げようともせず、俺を真っ直ぐ見つめてきた。

いつものような威圧感たっぷりの凶悪な顔ではない。睨みつけているわけでもない。

無垢な瞳で、ただじっと俺を観察するように見つめてくるのだ。

その瞳、その強い視線に歯ぎしりを鳴らした。

記憶がないくせに、無意識に奪われては駄目だと思っているのか。それとも本気で奪われたくないのか。

いやきっと後者だろう。それは分かっている。

でもなら何で、未来であんなに邪魔をするんだ――――。

「なんでアンタは俺に記憶を渡してくれないんだ！」

「ゲホッ……前世の記憶を渡すってことは、俺自身を殺すことになるからだよ。今の俺が誰なのかわからない。どういう存在なのかも知らない。ここが夢なのかって思いたいぐらいだよ、クソが……」

「記憶がなくても死ぬわけじゃない。だからいい加減――――」

「そんなことしてなんになるんだよ。……それに俺の記憶より大事なことがあるんじゃないのか？　俺なんかを監禁してなんになるって言うんだ」

「はぁ？」

アンタがそれを言うのか。

いつもいつも、俺の邪魔ばかりしてきたアンタが。

苛立ち交じりに彼の首を絞めたが、本気で殺されると思ったのか必死に抵抗してくる。

「ゲホッ、ぐっ……」

「記憶がなくても生きていられればそれでいいでしょう。俺の思う通りに動いてくれたら、邪魔なんてしなかったらその先で、ちゃんとした自由を手に入れられるのに!!」

「そ、んな……ことのために、俺の記憶、俺の全てを消そうって言うのか、お前は」

無理だと拒否をする彼に歯ぎしりをして、苛立ち交じりに舌打ちを鳴らす。

もう彼は恐怖を抱いていなかった。

この時点で本当に拷問をしていても喋らないと理解できた。

未来は今も過去を通して変化する。

それなのに、俺の行動ひとつで彼の意志を捻じ曲げるのはまだ不可能のようだ。

（そういうところは、人類最強とかでなくても良かったんですよ。兵長）

「……エレン？」
「もういいです、眠ってください」
「待っ――――」

力を行使し、強制的に眠らせる。
再び目を閉じた彼に本来の記憶を戻していく。そのせいか、過去の彼――――リヴァイからすれば未来となるが、そこで彼が行動するであろう情報がエレンの頭へ殴りかかるように襲いかかる。
リヴァイが動けば、いくつかの未来が変わる。それは現段階での未来であるため、実体がマーレにあるエレンからすれば過去というべき状況か。
自分が過去へ、幼少のリヴァイに会いに来たせいで引き返せないところまで堕ちてきた。
それでも、己にとっての最低限のラインは越えたくない。今回だってギリギリ線を越えかけていた。いや一瞬超えたかもしれない。
だからリヴァイの記憶を消しても、眠りについているうちに戻すのだ。夢の瞬きと思わせるように。
そうして、今回も失敗したと理解する。

「……やっぱり、すぐ死んじまうか」

前世の記憶とかいうやばいものより、ユミルの民として生きている今のリヴァイとしての記憶を消すのは容易だ。しかしそのせいで彼はあっけなく死んでしまう。それも地下街で暴漢に襲われ何も抵抗できずに殺される未来が見えた。
リヴァイはアッカーマンとしての目覚めるべき力がなければただの子供。記憶がなければ一般人レベルへ落ちるようだ。

度胸はあっても、地下街での生き方すら忘れてしまうとなるとすぐ死ぬのは当然。
彼が死んだ結果、その未来は最悪のものへ変わる。
それだけ彼という切り札は捨てることが出来ない。だからもどかしいのだ。
彼が一言「前世の記憶を捨ててエレンの思う通りに生きるよ！」とか言ってくれれば、過去に来ていろいろ余計なことをやらなくてもよかったというのに。

「あー、リヴァイ兵長の怪我……」

ケニー・アッカーマンとの記憶。リヴァイとして生まれ変わった彼の記憶であれば力を行使して記憶喪失状態にはできた。前世の記憶があるままのリヴァイはある意味喧嘩をあまりしたことのない弱い少年に成り下がる。アッカーマンとしての血に目覚めていない状況にもなるため、身体を投げ出した時に受け身すらとれなかったのか青痣が背中に広がっていた。頬にも殴られた痕が残り、首には絞められた両手の痣がある。
リヴァイとしての記憶がない頃の出来事は全て消している。
だからどう説明しようかと悩むが――――。

「……まあ、いいか」

エレンもまた未来から過去へ様々な暗躍をしまくっているせいで疲弊していた。
それはもういろんな意味で疲れていたのだ。
言い訳を考えることすら面倒くさい。
寝相で身体を打ったとかでも言って、誤魔化そう。たぶんリヴァイさんはそれで誤魔化されきれなくて俺をぶん殴ってくるかもだけど。
そうエレンは苦笑して、もう一度力を使ったのだった。

第七話、傲慢

以前俺の家に侵入してきた子供。
ボロボロの布を身にまとい、たった一人で生き延びてきたと思わせる哀れな姿をした彼を救おうと思った。
それはもちろん、打算も含まれてはいたが……。

「リヴァイさん」
「あぁ？」
「あの子供がリヴァイさんの前世で知る人じゃなかったら、助けようとは思わなかったんですか？」
「いいや、救っただろうよ」

エレンは訝しげな顔で俺を見てきた。
それの意味がよく分からないので、とりあえず無視していつものように掃除を始める。
あの子供――――ファーラン・チャーチという男を、エレンの言う通り俺は前世の知識で知ってる。
あの漫画で見たキャラクター。本編とはまた別の、番外編のような形で出てきた青年だ。漫画では当然のごとく巨人によって食われてしまったが……。
淡い髪色が特徴の、社交的な一面を持つなかなかに癖のある性格をしていた。リヴァイのストッパーになり得る程度には信頼されていたみたいだし、結構良いやつではあると思う。漫画としてではない。俺が実際に会って感じた印象だ。
俺が出会ったファーランはまだ幼く十歳程度の年齢で、まだ純粋なのか素直に表情を表に出していた。そういう甘い部分が地下街で生きるには少しだけきつかったのかもしれない。
だからいろいろと教えることにした。
地下街での生き方。どうやって金を稼ぐのか、安全に寝るためにど

うするか。喧嘩の仕方。それ以外にも危険かどうか見分けるためには。

まあそういうケニーからの受け売りをそっくりそのままファーランに教えてみた。

ちょっときつい部分もあったし、泣き言を言われたこともあったが着実に出来るようになっていったのだ。やっぱり手際が良いのか。掃除とかも教えたら凄いテキパキやるようになったし。風呂とか教えたら風呂に浮かべる果物の入手を優先するようになった。

毎日のように来ていたファーランは――――今日だけは俺の家に来ないと分かった。

何故なら彼は俺が紹介した酒場でスタッフとして働いているからだ。

最初に出会った頃のみずぼらしい子供はいない。

もう一人で立派に生きることが出来る程度には成長したはずだ。数か月程度時間はかかったけれど……。

（……そういえば、その頃のエレンは何もしてこなかったな）

いつもだったら俺にちょっかいをかけてくるし、たまに喧嘩売ってくるし、鬼ごっこみたいなことだって何度かやっていた。

それら全部が殺し合いのようなもの。俺という存在を消されないために、エレンは自由ある未来のために。物理的に動く場合は家が崩壊する可能性もあったので外で喧嘩しまくっていた。

子供と大人の体格。

力はきっと――――エレンの方が上。

でも避ける、逃げるにおいては俺の方が圧倒的に有利だった。

そういった争いごとはファーランが来てからやることがなくなったように思う。

ファーランと話しているときのエレンは俺の後ろからじっとこちらを見つめているだけで何も言わないのだ。

いつもは誰かがいても構わず話しかけてくるというのに。
俺の考えていることを勝手に読んだのか、それとも察したのかエレンが口を開く。
「リヴァイさんって結構傲慢ですよね」
「はぁ？」
急に何言いやがるんだろうかと掃除の手を止めてエレンの方を見た。
彼はいつものように瞳にハイライトがない無表情の顔で、こちらに近づいて俺を見下ろしてくる。
「ファーランっていう男以外にも……ちょっとした仕事で見かけた子供がいたはずでしょう。路地で倒れている人、飢えで死にかけた子供。病に倒れた女性。足を無くして生きる気力を失った男ども。そういう人たちをリヴァイさんは救おうと思わないんですね」
「当たり前だ。地下街は毎日のように死人が出る。いちいち死にかけた奴まで救ってたら俺の身が持たねえ。今は無理だって分かってるからな」
「ハハッ、それってただの偽善ですよね？」
「あぁ？」
馬鹿にしたように笑うエレンについ苛立ったが、彼は真剣に俺に向かって何かを訴えたいようだった。
しゃがみ込んで至近距離で、俺の目をじっと見て威圧をかけてくる。
「だってそうでしょう？　あの子供と関わってた時から見てましたけど、自分にとって興味のない人は救おうと思わないで……アンタの前世で見た漫画に出てくるキャラクター。自分が救いたいって思う人しか救わないんだろ」

ギリギリと歯を鳴らして。下げた拳に血が滲み出るほど握りしめて。
苛立ったように俺を睨むエレンは、何故俺を今この時点で殺さないのかと思うぐらい殺意に満ちていた。
「自分勝手な考え。その自己満足で未来を変えられたらたまったもんじゃない」
深い溜息を吐いたエレンが、俺を見下ろす。
失望しきった目でこちらを見てくるのだ。
勝手に思い違いをしているくせに。
「……つまりあれか。俺が漫画のキャラクターしか救わねえクソ野郎だと思ってるからそんなクソなら自分の邪魔ばっかしてねえでさっさと前世の記憶消して都合のいい人形になれって言いたいんだな」
「っ……当然だろ。だって俺は――――」
「ふざけるなよクソが！」
「いっだっ!?」
エレンがしゃがんでいたおかげで手が届きやすい位置にあいつの顔面があったため容赦なくぶん殴る。
勢いが強かったのか横に倒れていったが、彼はすぐに体勢を整え俺を睨みつけてきた。
「何するんですか急に！」
「お前が俺の事を誤解しているからに決まってんだろうがクソ野郎」
「はぁ？　クソ野郎はリヴァイ兵長の方じゃ――――」
「誰がクソ野郎だクソが！」
「勢いに任せて脛に蹴りはやめてください地味に痛い！」

容赦なく攻撃したからか、殺意が少し薄れて戸惑いの混じった目で俺を見てきた。
それに小さく息を吐きつつも口を開く。
「俺が救いたいのは自分の手で救えると思った人間だけだ」
「……」
「やっぱりとか思ってんじゃねえだろうな。俺が言いたいのはそうじゃねえよ」
「じゃあ何ですか。その葉っぱのような小さな手で何ができると？」
「あぁ？　チビって馬鹿にしたなてめえ。これでも早寝早起きして今から身長伸ばすために頑張ってんだぞ。いつかエレンよりでっかくなってやるからな」
「安心してください兵長、貴方はずっと小さいままです！」
「ふざけるなよクソが！　……って、そんな話じゃねえ。俺が今話したいのは別だ」

エレンが見た未来の中で、俺は自分の手で救えなかった人がいたかもしれない。それ以外にも何か、エレンが苛立つような行動をしてきたかもしれないな。
なんせ定められた未来に抗って、その先に何があるのか分からないまま未知の先を突き進もうとしているのだから。

「俺は必ず人類最強と呼ばれる男になる」

地下街で死んでいく人、これから先俺が知らない場所で死んでいく人がいる。
全てを救い出せない俺を許せ。地下街にいる彼らを選択して切り捨てるのは弱く死んでいった彼らだけにするから。
そういう部分こそ、自分勝手な感情。自己満足に過ぎないけれど。
それでもエレンのように、一人を悪にして多くの人を犠牲にするよりは――――。

「俺は強くなる。自分の手の届く範囲を大きくしてやる。それで救い出すんだ。お前も含めて全部を生かす。それだけの力を持つって決めた」
「……そんなことをしても、未来で絶望が待っているだけですよ。リヴァイさんが見えない範囲で死ぬ人だっているでしょうに」
「だから作るんだよ。仲間を」

ファーランのように。
エレンともいつか、心強い仲間になれるように。

「俺の力が及ばなくても、俺が仲間を育てればいい。強くなって生かすって決めたから。俺の原作知識、その知恵を役立てる誰かに授けてもいいかもな」
「やめてください今アルミンのゲス顔が頭に浮かんだんですけど!?」
「そうか。それは良い事を聞いた」
「リヴァイさん!!」

少しだけ焦った顔のエレンに笑う。
いつもの静かなエレンとは違う。不気味で背後霊のような雰囲気は何もない。それが未来でも続いていけたらいいんだ。

「エレン、俺は全部救ってやる。お前が手のひらから零したものも全て……お前の事も含めてな」
「えっ」
「切り捨てるのは今だけだ。いつか必ず全部救ってやるからな。ちゃんと見とけ」

そうして人差し指を向けた瞬間――――何故かエレンが、衝動的に頭を押さえる。

「エレン？」

何かあったのか。実体がないエレンは未来から来たから……そこで何かあったのか？

でもエレンはすぐに我に返ったようで、俺から視線を外してそっぽを向いたまま、乾いた笑みを浮かべてきた。

「その考え方、傲慢すぎて気持ち悪いです」

「うるせえ」

「本当に、気持ち悪い」

「……エレン？」

少し瞬きしただけだ。

それなのに声がした方にいたエレンがいつの間にかいなくなっていた。

（何かあったのか？）

頭を押さえていたから、何か原因があるはず。

それとも――――未来へ帰ったのだろうか。それとも過去に来れなくなった？

最後に聞いたエレンの声。

元気のなさそうなあの静かな音色は、少しだけ嫌な感じだった。

結局、エレンがその日帰ってくることはなかった。

ファーランが元気にやってきて、今日何があったのか話をするだけ。そうして帰っていく子供に笑って見送りをして……。

――――この家の広さに、愕然とした。

「エレンがいたから、狭く感じていたのか」

ケニーがいなくなってから急に来たエレンという存在。
ずっと一緒に居たようなものだった。一人でいたのはほんの少しの間だけな気がする。
自分の独り言すら誰も返してこない。
それが酷く寂しいものだなんて思いもしなかった。

（やっぱり俺のせいか、エレン……）

せめて一言だけでも何かを言ってから帰ってほしかったな。

・・・

「あっ？」
「うわ……」

ちょっと待て。
何でエレンの代わりにやさぐれた様子のジークが居やがるんだよ。

第八話、逃走

今日も地下街は騒がしい。
いつものような喧騒。地上から来た商人たちの怒声。そしてある子供が何かを追いかけている姿。
でも誰を追いかけているのかは分からない。また子供が何か幻覚でも見ているのか。

「おい待てゴラ！　逃げんじゃねえ眼鏡野郎!!」

聞こえてきた怒声に振り返る地下街の住人達。
そうして誰が騒動の中心にいるのかを知り、リヴァイであれば関わるのは止めようとつい先ほどまでやっていた作業へ戻る。
大抵は喧騒などが起きれば野次馬が出来てその便乗に何かしらやらかそうとする者がいるのだが、リヴァイの場合は絡んできた奴ら全員ぶっ飛ばす程度には狂っているので関わらない方が吉と最近ではそう噂されるようになったからでもある。
走っている声に怒りの感情が混じっている。
駆けている場所すら道なき道であり、屋根の上やら路地裏の塀の上やら、とにかく奇妙な道を駆け回っているのだ。
そうして何かに向かって手を伸ばすのが見えた。その先に誰もいないはずなのに。

「地下街だよ説明してやるからとっとと止まれや!!」

誰もいない先で、幻聴でも聞いたのか。
本当に頭がおかしいガキだ。
先ほども塀の上を飛んで屋根へ上り、どこかへ行く姿が見えた。その騒がしい姿に「仕事の邪魔しないでくれよ」と願いつつ小さく溜息を吐くと、俺の傍に居た子供が驚いたような表情を浮かべてきた。

「今のって……リヴァイか？」
「ん、何だファーラン、お前あのゴロツキと知り合いか？」
「ええっと……」

最近よく働くようになったガキが肯定なくただ曖昧に微笑む。
それを奇妙に思いつつも、なんとなく理由が分かった。

「まあそうか。あのリヴァイなら地下街の誰でも知ってておかしくないな」
「……へぇ、リヴァイってそんなに有名人なんだ？」
「まあな。チビのくせに喧嘩は強いわ何考えてるのか分からねえわで不気味だがな。どっから来たのか分からないがあのケニーってやべえ男の付き添いしてたガキだ。いろいろと頭が狂ってんだろうよ」
「……ふーん」
「サボってねえで仕事やれガキ。終わらせねえと駄賃もやらねえぞ」
「っ――――すぐにやります！」

そうして意識を切り替えたのかテキパキと動く子供を見下ろす。
このガキと同じで、あのリヴァイも俺のところで働いたことがあったっけなと思い出した。

（……そういえば、あの娼婦んとこの区域はどうなったんだか）

あそこはあのリヴァイが唯一行き来しない場所だったはず。そう周りが囁いているのを聞いたことがある。しかしあの区域でつい最近建物が炎上する大騒ぎが起きたとか聞いたが、あれはどうなったんだろうか。
まあこちらに被害が来ないなら、あまり気にしなくていいか。

・・・

エレンがいなくなった翌日、目が覚めて起きた先に何故か床に座ってボーっとしている男がいた。

「あっ？」

「うわっ……え、まさかリヴァイ――――」

その男――――前世の記憶通りであれば奴はきっとジークであると思うが、彼が俺を見た瞬間物凄い悲鳴を上げながら逃げ出したのだ。それはもうゴキブリを直視したかのような反応。

トラウマを刺激されたような行動だった。青ざめたまま変な顔をしたあいつが一目で俺をリヴァイと断定したのは凄いと思う。

それだけ俺が恐ろしかったのか？

これでもまだ髪はちゃんと切ってない。髪の毛も売れる材料と知ってある程度は売り物にするため伸ばしてる最中だったんだぞ。かつての母さんみたく伸ばしまくっていて、肩まで長さがあるはず。年齢も子供で普通だったら分からないはずだろ。

それなのに俺をリヴァイと認識する何かがあったのか。

未来でジークに恐怖を刻む何かを俺がやらかしたか。

いやまあそれは良い。

そこはどうでもいいんだ。問題はただ一つ。

「ふざけるなよクソが」

何でエレンの代わりにジークが来たのかとかいろいろ言いたいことはある。それ以外にも実体ではないくせに物に触れることが可能なのか家の扉をご丁寧に蹴り飛ばし、俺から逃げていったのだ。

このまま逃がしたら駄目だと本能的に理解する。

――――地下街では何度かエレンと記憶を巡って鬼ごっこをしたことがある。今回はそれと真逆だ。

俺が鬼でジークが逃げる方。

ジークは何故か死に物狂いで逃げまくってはいるが……。

「おい待てゴラ！　逃げんじゃねえ眼鏡野郎!!」
「何なのお前そんなちっさい頃から何でそんな怖いわけあああもうまたこうやって逃げ続けなきゃいけないのかよ!!　巨人にもなれないしなんだここは!!」
「地下街だよ説明してやるからとっとと止まれや!!」

ようやく捕まえた時には、地下街の端まで来ていた。どれだけ俺が怖かったんだこいつ……。
縄を持ってきて正解だった。両手を結んで身体も縛って、引きずってでも連れて帰ろう。
「ねえちょっと待って。リヴァイ？」
「あぁ？」
「お前、俺のこと分かるの？」

まだ俺と会ってないくせに――――と、ジークはあり得ないような目で俺を見てくる。
ジークと繋がった縄を引っ張りつつ、それに素直に答えるか考えて瞬時に否定を下す。
こいつが味方かどうかまだわからない。
俺が覚えているのは最後どうなるのか。そして誰がどうやって死ぬのか程度。細かい道筋で何が起きるのかは知らないのだ。ジークが味方であるのかすらも。

「……少なくとも、お前が俺の家をぶっ壊して逃げた不審者だってことは分かる」
「いやアレ不可抗力だよ！　ユミルの民が通じる道の中にあんなでっかい穴が開いてたら飛び込みたくなるの当然だろ！　というか道の至る所でボッコボコに穴開いてたし始祖ユミルが小さな穴の一つに足引っ掛けて派手に転んでたけどね！　そういえばエレンも転んでたなぁ！」

「……はぁ？」
「穴の先にまさかこんなちっさいリヴァイがいるとか思わないだろ……なんだこれ。本当に。まさか、これもエレンが何かしでかしている結果なのか？」

いや、それはきっと違う。
なんとなくそう思った。どうしてそう思えてしまったのかは分からなかったが。
でもこいつにそれを教える義理はない。一応は敵対関係。マーレ側だったこいつに知識を教えて何になるのか。
おそらく『道』と言うのは始祖ユミルから始まった光の柱が立つ景色の事だろう。そこだけは覚えている。ジークが何でエレンと一緒に居るのかは覚えていないが……。
彼が王族の血筋を持つというのは知っているが、そこまで細かい最後を覚えていないのが難点だ。だからこそ強くなって皆を助けていきたいとは思うが。

「お前が何でここに来たのかは分かった。間抜けにも穴に潜って地下街に来ちまったってことだろ。……それで、お前はちゃんと戻れるのか？」
「……さあ」
「帰りたくないのか？」

何も喋らないので首に引っ掛けた縄を引っ張ってやると、ジークは俺を見下ろしてくる。
その瞳は淀んでいた。エレンよりはマシだが、目に光がなく何かに絶望しきっているように見えた。
「俺は、いろんなことをしでかした。自分にとってそれが正しいと思っていた。でもエレンは……」
「……」

「ああそうだ。あの男の過去を見た時に……そう、これだけは分かる。リヴァイ、お前のおかげで世界は面倒くさい事態になったよ」
「はぁ？　どういう意味だ」
「……」
「おい眼鏡野郎なんか言ったらどうなんだ、おいゴラ」

それ以降喋らなくなったジークに俺は深い溜息を吐く。
何が起きているのか分からない。エレンがここに姿を見せなくなった理由も、なにもかも。
とりあえずこいつはペットみたく家に放置しておくべきか。それか扉ぶっ壊したのこいつだし直してもらおうか。強制的に。
何が起きているのかは分からないけれど、ここに来た以上ある程度は働いてもらおう。物動かせるみたいだし。

（というか、エレンに働かせようって考えが浮かんでなかったな。そういえば……）

俺の身体に触れることが出来たのなら、きっと物を動かすことも出来たかもしれない。
それともこのジークが何かおかしいのか。トラウマ級の悲鳴を上げて逃げた勢いが凄すぎて扉がぶっ壊されたのか。いやそれなら縄を縛ることが出来るのはおかしいよな。

「リヴァイ？」
「……ファーランか。今日は仕事じゃなかったのか？」
「あ、うん。それはもう終わってこれから帰る途中なんだけど……」

戸惑い気味に俺の後ろ側を見てくるファーラン。
そうしてその先、俺の手の平に握られた縄を見て、顔を青ざめてきた。

「いったい何を縛ってるんだリヴァイ。俺には空気を縛って縄が宙に浮いているようにしか見えない」

その言葉に、俺は自分がやらかしたと理解する。

「待てファーラン。逃げなくていい」
「何を縛ってるんだリヴァイ。何かいるのかそこに。リヴァイしか見えない何かがいるのか!?」
「大丈夫だ害は与えないきっと多分。だから逃げるな！」
「本当か!?　本当なんだな!?　俺は信じてるぞリヴァイ!!」
「なら何で一歩後ろに退くんだクソが!!」

ドン引きするファーランに慌てて誤解を解こうと必死に弁明する俺。
そんな姿が面白かったのかジークがちょっとだけ笑っていたので思わず膝に向かって蹴りを食らわせたのだった。

第九話、暴挙

「あの子は放って良かったわけ？」
「放置したわけじゃねえ。お前にはまだ聞きたいことがあったからな。その後にちゃんと弁明しに行く」
「……やっぱり俺のこと知ってる？」
「そうだといったらお前はどうするつもりだ」

気がついていないだけで、俺はエレンの何かを見逃していたような気がする。
エレンは俺を触れた。きっとその気になれば物にも触れられたかもしれない。でもそれに何で気づかなかったのか。あんなに一緒にいたはずなのに。
そういえば、あの漫画でそんな描写あったか？
覚えていないだけかもしれない。
……そんなに気にしなくてもいいかもしれないが、何かひっかかるのだ。
いや今はジークと話すのが優先か。

「お前は誰の敵だ？　俺達か、それともエレンか？」
「……ねえ、君本当に幼児なわけ？　それとも精神はそのまま？　こっわ……」
「うるせえ質問してるのは俺だ」
「……さぁ、どうだろう」
急に思い詰めたような顔をしてきたジークが自嘲の笑みを浮かべる。

「もういいや。リヴァイに記憶があるって思って話すから」
「なにを？」
「俺はもう何もする気がない。エレンが俺の力を使おうが、もうどう

でもいいんだ。だからあの時自暴自棄になって穴に飛び込んだかもしれない……まあ、強いて言うならエレンの敵かな」
「……今そっちでは何が起きてる？」
「エレンが暴走して地ならしが決行されてるんだ」

つまり、今のままだと俺はエレンを止めきれないのか。それとも未来が反映されてなくて何も理解しきれないジークが説明してるのか。
……いや、しかしエレンが始祖ユミルと出会うことが一番最悪へ繋がるルートな気がする。
原作では俺はその前にエレン達と接触できたか？
朧気だが、ジークと会うことは出来た記憶がある。その後何処かで負傷して死にかけていたはず。
だから俺は、エレンと会うことが出来なかった。

（前提条件が駄目なのか？）

このままここに、地下街にいていいのか。
俺は確かに仲間達を助けたい。でも今なら――――まだ子供で、始まってもいない今ならやれることがあるんじゃないのか？

「……ジーク」
「なに、リヴァイ？　ってかやっぱり俺のこと分かってるんじゃん」
「それはどうでもいい。お前に聞きたいことがある」
「なんだよ」
「ここからマーレに向かうにはどうすればいい？　俺一人で、潜入できると思うか？」
「……あり得ないことを言うんじゃないよ、まったく」

ブツブツと呟いたジークが、しかしと言う。
「あの時、グリシャとクルーガーが出会うあの場に向かうことが出来

ればもしかしたら叶うかもしれない」

でもただの子供がなんの機械も持たずにたった一人で向かえるわけがないだろうと話す。

それは当然だ。俺も無謀じゃない。

ただの可能性の話だ。もしも先に皆よりマーレに向かえたらと。誰にも会わずに、エレンのように一人だけ潜入し戦うエレンの場に居合わせられたら。

「ジーク、未来を変えたいか？」

「……無理に決まってるだろ」

「今ここは過去だ。俺も未来からきたわけじゃない。エレンを止めたいなら協力する。だからどうすればいいのか未来について細かく教えろ」

ジークが背後霊のように引っ付いてるのが普通なら、未来を教えてくれたら。

エレンが敵だと言うなら俺に少しは協力してくれるかもしれない。物にも触れられるし、縄でしばれるけどそれを他人には空中に縄が浮いてるように見えてるみたいだし。それを、何かに利用できるなら。

俺の考えにジークは面白そうに見てきた。

「……今は無理でも、俺がパラディ島に行く時に接触出来たらきっとマーレにも行ける。可能性は低いけどそれが成功できれば」

「そこまで待つ必要はある、か……」

それに、ジークの手を借りることを選べばきっと何処かで誰かが死ぬだろう。俺が救えるはずだった人も死ぬかもしれない。

どうしたらいいのか……。

「ジーク、お前と協力するなら俺は何をしたらいい？」

「それはっ――――」
「ジーク？」

青ざめた顔で俺の後ろ側を見つめるジークに、ハッと我に返った。ピリピリと肌が突き刺さるように痛い。これはおそらく危機察知。
後ろへ振り返れば、そこにいたのは久々に見た気がする男、エレンだった。
やはり目は薄暗く淀んでおり、何を考えているのか分からない表情。少し怒っているのかもしれない。

「楽しい話をしてますね。全部忘れてください」
「エレン――――」

・・・

「……あれ、ここは」
「気がつきましたかリヴァイさん」
「エレン？　俺は何をやって……」
「気絶したように眠ってたんですよ。最近いろいろと休む暇なく働いてたでしょう？」

俺の額に手を当てたエレンが笑う。

「ファーラン君も後で見舞いに来ると思いますよ。リヴァイさんが倒れたことを知ったようなので。……今は寝ていてください」
「……ハッ。それなら他の奴等にも知られたな。襲撃されるかもしれねえ」
「寝てろ」

そういって雑に布団を俺に被せてくるエレン。ケホッと咳が出てきたのでかなり重症かもしれないと思い、素直に従うことにした。

「俺が少し離れただけでこれかよ……まったく……」

エレンが離れたとは何なのか。エレンは俺と一度も離れてはいないはずだろう？

その言葉の意味が理解しきれないけれど、眠気に負けて俺は意識を落とした。

思春期　地下街から地上への反抗期と攻防戦（少しは勝てるかもしれない）

第十話、食事

「……エレン、ここに保管しておいた縄が無くなっていたんだが、何処にやったのか覚えているか？」
「それならリヴァイさんが盗人か変態が出たとか言ってそいつを縛るために持っていったでしょ？」
「そう、だったか？」
「そうですよ」

にっこりと笑った声と言葉に、曖昧に頷く。
この地下街じゃいろいろ喧嘩に巻き込まれるし、殺されそうになったことも何度かある。だから俺が忘れていただけか……。

「それよりも、ご飯食べなきゃだめですよリヴァイさん。今日何も食べていないでしょう。だからそんなに小さいんですよ」
「うるせえチビなのはまだガキだからだ。今に見てろ」
「いやそこは諦めましょうよ。未来から来た俺がはっきり断言するんですから！」
「未来は不確定に変わるんだろ！　なら俺がお前以上にでっかくなってもおかしくない未来があるはずだ!!」
「大丈夫です周りが変わってもリヴァイ兵長だけは頑固として変わってませんでしたから!!」
「ふざけるなクソ」
「膝打ち止めてください痛い！」

いつものように軽く喋るが、エレンの様子は変わらない。
いや今日は元気な方だろうか。最近はなんか疲れたような顔だっ

たし、変に苛立っていたようにも見えたから。

「……今日は堅いパンか」
「スープにするんですか？」
「ああ、どうせファーランも来るだろうし、味が薄いが……蒸留水で軽く玉ねぎスープでも作って、それに浸して食うとする。……お前も食うか？」
「いや俺は実体がないので無理ですよ」
「でもお前には触れるだろ？　……あれ、触れる？　なら逆に物を持ったりいろいろ出来るんじゃ」
「リヴァイさんこっち見て」
「あぁ？」

じっと見つめてきたエレンの目は緑色の星のように見えた。
頭を触ってきたエレンに、少しだけ戸惑う。
……あれ、俺何やってたんだっけ。

「エレン、今何かやったか？」
「いいえ。ほらリヴァイさん、スープ作らないんですか？」
「スープ……ああ、そう。そうか。そういえばスープ作るとか話してたな。そうだった。作らなきゃな」

記憶が少しだけぼやけているのはどうして――――いや、今は考えるのは止めよう。
スープを作るのを優先しよう。
小さく溜息を吐いたエレンに気づいてはいたが、その意味を『今』考えてはいけない気がした。
じっとこちらを見つめてきたエレンは、そんな俺の考えに気づいてしまったのか。
「……チッ、スープを作るのに木材消費するのもアレだしな、違うのも

作るか」
「どうせならリヴァイさんの好きな紅茶とかどうです？　茶葉はまだありましたよね？」
「まぁな」
「ああそういえばリヴァイさんって最近身長伸びました？　ちょっとだけ服の裾が短くなっているような」
「本当か！　あっ、いや。ゴホン……まあ成長期だからな。そろそろこの伸び切った髪も似合わなくなるだろうし、切って売っちまうか……」
「ぶふっ」
「笑うなエレン。ふざけるなよクソ」
「だから何度も蹴らないでくださいよ！」
「チッ――――それにしてもファーラン遅いな」
「買い物でしたっけ？　なんか市場に面白いのがあるからそれ貰ってくるとか……」
「紅茶だったらいいな」
「それで喜ぶのリヴァイさんぐらいです」
「うるせえ」

家の外から聞こえてくる足音。誰かが喧嘩でもしているのか、怒鳴り合いが響く。
エレンは椅子に座り、作業している俺の後姿をじっと見つめてきた。
「…俺とファーランだけ食っててお前はみているだけってのもアレだ。エレン、お前も食わないか？」
「いりません」
「そう、か」

デジャヴのような気がしたが、本能的に鳥肌が立ち、警戒するような感覚に襲われたので考えるのを止める。

「最近物価も高くなりやがる……はぁ……」
「まだ子供のリヴァイさんにそんなこと言われたら世も末ですよ」
「うるせえ精神年齢は子供じゃねえ」
「ハイハイ」

地下街で食料などの供給はないに等しい。あるとしても何か意図があってのことか、身内が地下街に追いやられた人を救うための方法か。

地下にいるネズミを喰らっても生きられるかどうかわからない程度には貧困なのだ。豊かな国ってわけじゃねえし、どこぞのお偉いさん達が無料で配給してくれるわけじゃない。

国は――――というか、このパラディ島の王はいつか来る罪の裁きを待っている。かつてマーレなどと言った国々を巨人として襲い、エルディア人は残虐な悪魔だと思われた。だから何も知らない子孫でも、その罪は同じもの。死はその代価だと思われている。

そのせいで救えるものを救わず。弱い者はそのまま死んでいく弱肉強食が地下街に根付いていた。

親もいない子どもならばより酷い。家を持たずに路上暮らしな奴もいるし、パン一個盗んで死にかけたファーランだって同じだ。

だからと言って地上が安全かと言われたら、それには頷ける自信はない。

なんせいつか巨人がやってくるだろうから。

「エレン、地下街と地上の価値観は同じか？　食料もここまで高くなるのか？」
「まあ、地上も地下街も似たようなものですよ。巨人に襲われた直後の数か月間は本当に酷かったですし……」
「食料不足が原因か」
「それだけじゃありません。俺達はマーレ人……エルディア人以外の人がやっている普通の暮らしすら出来ていない。これが普通だと思

わないでください、リヴァイさん」

そう言ったエレンが拳を軽く握る。

家の外は騒がしく喧嘩している音が響くのに、まるで別世界かと思えるぐらい部屋の中はとても静かだった。

エレンの目を見つめるが、奴が何を考えているのか分からない。何を見てきたのかすら、ちゃんと全てを理解できないのだろう、俺は。

「エルディア人は全員、家畜と同じなんですよ」

「……マーレにいる奴らもか？」

「あいつらにだって良い奴はいます。助けてくれた人もいた。でも世界は俺達を認めない」

「だから壊すしかないって？」

「はぁ、もうこの話題は止めましょう。せっかくのスープが美味しくなくなりますよ」

「……エレン、本当に対話は諦めたのか？」

そっぽを向いたエレンに俺はもう何も言うことはない。

彼にかけるべき言葉すら思い浮かばない。

（……そういえば、俺はエレンの何を警戒していたんだったか）

このままじゃいけないのは分かる。

エレンの手の平の上で踊って、それですべてを終わらせたくはない。

ここに居たらエレンの思うが儘な気がする。ケニーには悪いが、どうにかしてここから出なければ……。

そう思っていると、扉を叩く派手な音が聞こえてナイフを手に警戒しつつ外へ出た。

そこにいたのはファーラン含めた数人の子供たちだった。

「リヴァイ！」
「りヴぁーい！」
「リヴァイ！　なんで俺達と市場に来なかったんだよってかいい匂いする！」
「……なんだファーラン。遅かったな。あと何でガキども連れてきたんだ」
「あーはは。ちょっと事情が……って待って！　これ見てくれよリヴァイ！　ようやく入手できたんだ！」
「あぁ？」
「リヴァイが欲しがってただろ！　立体機動装置!!」

第十一話、邂逅

あれから数年と少し経ち、中学生ぐらいの年齢になったかと思う。きっと。おそらく。

身長がそこまで伸びなかったのでファーランとそこに近い区域で生まれたチビ共の面倒を見ていたらあいつらの方がやけにでかくなりやがったのが原因でもあった。

一応これでもファーランとは大体同じぐらいの年齢だと思うんだが、そう見えないのは身長のせいか。

酔っぱらいやら通行人がわざと俺たちを見てファーランの方を兄扱いするのでそのたびにぶちギレてはぶん殴りに行く程度には神経質になっている自覚がある。

身長の扱いは充分注意してほしい。

これでも結構気にしてるんだ。いろんな意味で。

「……リヴァイさん」

「あぁ？」

「逆立ちしても身長は伸びませんよ」

「うるせえクソが」

家の中ではいつものようにエレンが呆れたような目で俺を見てくる。

一発蹴りでも食らわせようかと思ったがどうせ避けてくるだろうと思い止めた。まだ俺はエレンが避ける程度にしか強くないってことだ。もっと頑張って鍛えて、いつかエレンにブチ当ててやろうと思う。

そう考えていたのがバレたのか、ドン引きした顔で「凶悪な面になってますよリヴァイさん。まだ子供なのに今からそれで大丈夫なんですか!?」とか心配されたんだが解せぬ。

「今日はどうするんですか？」
「ファーランはチビ達と立体機動の練習してるからな。……俺はちょっと、散歩でもしてくる」
「散歩ですか」
「ああ、どうせいつか壁の外でこいつを存分に使うことになるだろうし、今のうちに慣れさせてもらう」

立体機動装置を身につけながらも言う俺の言葉に、エレンは真顔で何も言わずに佇んでいた。
その態度に思うことはあるが、今は何も聞かない方が賢明だと判断する。

――――どうにも、俺の記憶は曖昧な部分があるように感じたからだ。
それを指摘すればするほど、きっと俺の記憶に穴が開くのだろう。エレンにとっての地雷か、それとも最悪の未来を防ぐためにある程度は修正しているのか。
とにかく余計なことをこいつに言うよりは、自分で行動した方が早いと判断する。
……今のところは、だが。

「ファーランって人、なんだかアルミンに似てますね」
「アルミンほど頭は良くないだろ。人と対話して距離感を掴むのは優れてると思うが……」
「まあリヴァイさんそういうの苦手ですもんね。この前だって凶悪な顔してたせいで盗賊か何かだと勘違いされて襲われてましたし――――いっだぁ！」
「余計なお世話だ!!」
「飛び蹴りはやめてくださいよ兵長！　腹打ったんですけど!?」
「うるせえ俺はまだ兵長じゃねえ」

「ああ……そう、そうですね。リヴァイさん」
「……とりあえず、ファーランについては後で考える」
「そうですか」

そう。いつかの未来で死ぬと確定しているファーランはどうにも社交性に優れているようで、様々な人と渡り歩き情報を集める力を身につけていた。立体機動を手に入れられたのもそのおかげと言える。

このまま俺と一緒にいつか調査兵団に捕まって壁の外に出るよりは、どこかで地下に潜って憲兵たちや王族周りでの動きを探ってほしい。

いつかきっと、エレンとクリスタ――――後のヒストリアと名乗る少女を連れ去る事件の際に協力してほしいから。

（まだ覚えてるから、大丈夫だとは思うが……）

前世の記憶は紙に書き写した。そのせいでずいぶんと出費してしまったが、人の頭は数年経てば忘却する記憶が増える。曖昧な前世での原作知識を余計に曖昧にしてたまるかと思い行動したが、それが良かったのかもしれない。

パラディ島の文字は読み書きできないので、前世での文字になってしまうが……。

「……リヴァイさん」
「あぁ？」
「行くなら遠い方が良いですよ。今は憲兵たちがいっぱいいて、万が一捕まったら面倒ですし」
「そうか」

エレンの忠告に頷いた。

立体機動装置を持った俺たちはある意味処罰の対象だろう。なるべく顔も見られないよう気を付けて進まないとな。

独学で立体機動装置をうまく使えるようになったのは、今のところ俺だけ。
ファーランはあともう少しでコツを掴めると言っていたから出来そうで、他のチビ達は何度やっても無理そうな感じがする。そういうところも世界の修正力が働いているというのだろうか。エレンは何もしてないようだったから、ただの偶然かもしれないが。

「行ってくる」

その言葉にエレンは返事をしない。違和感を感じて振り返ればいつの間にかエレンはいなくなっていた。
多分また未来に戻ったのだろう。ここ数年は俺と一緒に居たり、突然いなくなったりを繰り返していたのでもう慣れたが。
家の中は俺一人だけ。ファーランたちがいないせいか、とても静かで寂しい空気が漂っている。外も珍しく静寂に包まれていた。
その空気に居心地の悪さを感じてしまい、頬をかきながらも何も言わずに部屋の外へ出た。

（さて、何処へ行こうか……）

とりあえずエレンが言っていた通り地下街の端っこにでも行こうかな。
どうせだし地上への穴が開いたあそこにしよう。
……たしか、あのファーラン達が出てきたアニメの中にあった地上へ繋がる穴の方。そこだけは記憶していた。アニメで見たときに、鳥が飛び立つ姿は美しい光景だなと思ったから。
地下街の端。通常では人が通れない崖のような位置に立つ場所に一部分だけ地上への光が差し込む場所があったはずだ。
そこから地上へ行くことも出来そうだったが、さすがにファーラン達をおいて出るわけにはいかなかった。
あのままあいつらを放置していたら野垂れ死ぬかもしれない。

チビ達は自分の身を守れないし、ファーランも戦闘特化というわけじゃない。まだ教えなきゃいけないことが残っている。
もう少しだけこの地下街の生き方を教えて、ちゃんと一人で行動しても死なない程度には育てよう。
それぐらいの責任は俺にあるだろうから。
そう思いながらも日にあたってボーっと考えていると、後ろに見知った気配を感じて振り返った。
そこにいたエレンはまたも呆れたような顔で俺を見ている。

「……日向ぼっこしても小さいままですよ」
「うるせえエレン。別に身長が理由でこっちに来たわけじゃねえクソが！」
「でもリヴァイさん最近ファーラン達に身長を抜かれて焦ってますよね？　チビって呼んでるけどもうチビじゃないし、見知らぬ他人にその呼び名知られて爆笑されて『お前の方がチビだろ！』って喧嘩売られてましたよね。速攻で三倍返しにして終わらせてましたけど」
「チッ、エレンよ。お前最近身長についていろいろ言うようになったな。喧嘩売ってるのか？　三倍どころか十数倍で買うが？」
「嫌ですよ俺痛いのが大好きな変態じゃないんですから」
「俺はチビじゃねえ。まだ成長期だ!!」
「そ、そうですね……」
「ドン引きすんな!!」
「ねえあなた、誰と話してるの？」
「あぁ決まってんだろそこにいるエレンと――――誰だ？」

ここは地下街からは誰も来られない場所だ。立体機動装置を使わない限りは急な崖みたくなっていて、昇らないといけない場所。地下街の端っこだし、普通に行けるわけがない。
それに子供の声だった。女の子みたいな明るめの声がした。
地下からじゃないということは、おそらく地上――――。

「あぁ？」

不意に何かが空から落ちてくる。よく見れば頑丈そうなロープだった。

空から地下街へ降ろされたそれに思わず目を見開いた。

（何やってんだ一体。憲兵共が知ったら死罪にもなり得る犯罪行為だぞ）

まるで前世で読んだことのある光景。あの地獄から這い上がりたい亡者たちの物語たる蜘蛛の糸を思い出した。

よく見れば太陽の光を遮る小さな影がこちらへゆっくりと下りてくる。それは子供だった。俺と同年代かそれより下ぐらいの子供だ。

「そこどいてー！　ちょっと失礼！」

「はぁ？」

上からロープを垂らした子供は、必死に縄から下へ降りてくる。

しかし体力がないのか、それとも無理に下へ降りようとしたのか最後は尻からずり落ちて強打し、悲鳴を上げていた。

短い髪。顔立ちは中性的で性別がはっきりとしない。

しかしその顔は見たことがあるものだ。何処で見たのか思い出せない。でもその感覚があるということは、こいつは前世で見た漫画の知識の中にいるキャラクターの一人ということだろう。きっと。

そう思っている間に何とか痛みから回復してきたらしい子供が、強打した部分を擦りつつゆっくりと立ち上がってきた。

「いでで……ふぅ、着地成功！　ひぇーここすっごい高い場所だったんだね！　あははっ、崖じゃん！　ねえねえ貴方ここの地下街の人間なの!?　ってちょっと待って、それ立体機動装置!?　手に入れたのすっげぇー!!」

「おい待て、話を――」
「ねぇここの地下での暮らしってどんな感じ？　なんか秘密とか隠されてない？　窮屈な場所ってない？　何か違和感を感じるとかない？　立体機動装置ってどうやって手に入れたの!?　ねぇねぇ!!」
「うるせえクソガキ！　落ち着いて話をしやがれ!!」
「いったぁ!?」

奴の尻に向かって蹴りを入れると、先ほど落下した時のダメージも残っていたのか地面に転がってもだえ苦しんでいる。それに同情するような目でエレンが眺めているが、奴の姿が見えていないのか何も手助けをしようとしない。
いつもだったらここらは家の中と同じように静寂に包まれている場所なんだが、この女か男かわからないガキのせいで喧嘩している時みたく騒がしい。

「お前なんで地上から降りてきたんだ、戻れなくなったらどうするつもりだ」
「大丈夫だいじょうぶ。その時はちゃんと考えてたし、地上へ通るための通行費ぐらいは用意してたよ。それに実際に地下街を見てみたかったんだ！」
「あぁ？　なんで？」

問いかけた言葉に反応し、頬を赤らめ息荒く俺に眼前まで近づいてきやがった。

「地下街ってどうやって作られたのかなって不思議に思ったんだよねぇ！　自然とできたものなのか、それとも人工的なのか。それにどうやって地下に移り住もうって決めたんだろうとか何か隠されてるんじゃないかって考えだすと止まらなくて衝動的に来なきゃって思ったんだよ！」
「地下街の危険を承知でかよ……変態か……」

「私は変態じゃないよ！　実際に目で見て知る、見聞を広めるためにはそれぐらいの危険は覚悟する必要があると思うんだ。何で地下街が出来たのかを知れば、もしかしたら第二の地下街が出来るかもしれない。知って初めて自分の手で何か作れるかもしれないだろう！　人が住む場所、家畜とかそういうのが作れる場所が増えればもっと豊かになれると思わないかな!?」
「いや知るか」
「冷たいなぁもう。……それで、君は？」
「あぁ？」
「何で君はここへ来たの？　立体機動装置なんて格好良いものつけてさぁ！　やっぱりいいよねそれ！　人類の文化の最先端だよね！　それがあれば壁の外へ出られるし、調査して何かを見つけられるかもしれない！　いつか兵団に入ろうかなって思ってたけど、羨ましいなぁー！」

こいつ本当にうるさい。
でもまあ、もう帰ろうかなと一瞬思ったが、地上へ行くための一つの手になりそうなので何も言わないでおく。

「地下街について教えてくれない!?　貴方とは良い友人になれそうな気がするんだ!!」
「俺はそうは思わないが……」
「名前教えてよ！　貴方の名前！」
「名前を問いかけるならまずはお前が先だろ」
「ああ、そうだね。確かにそうだ。名前は自分から名乗るのが礼儀ってもんだ！」

一瞬名前を問われて俺をどうするつもりかと警戒してしまったが、まあ子供だし大丈夫だとすぐに意識を切り替えた。名前を聞く奴は大抵が悪意を持って近づく輩だからな、この地下街では。
立体機動装置について憲兵共に何か告げ口するようなら報復ぐら

いはしてやろう。
その程度の好奇心旺盛な子供だと思っていた。
――その時は。
「私はハンジ・ゾエ。よろしくね！」
「ッ――――」
その声に、その言葉にようやく合点がいった。
エレンの方を思わず見たが、奴は無表情で俺を見つめている。これはまさか、試しているのか？
俺が急に変な方を見たのが気になるのかハンジが「ねえねえなんでそっちの方向見てるのそういえばあなた派手な独り言呟いてたよねもしかしてそういうお年頃!?　それとも頭がぶっ飛んでるのそれが地下街での普通なの!?」と息荒く問いただそうとしてきたのでとりあえず蹴り入れた。そうしたら地面に転がって呻き声をあげつつ「急に物理行使とか酷い！」と喚いてきた。それに適当に謝っていると、また俺の事が気になったのだろう。
奴は俺に向かって手を伸ばして握手しようと言ってくる。
「私はちゃんと名前を言ったよ。今度は貴方の番だ！　さあ、君の名前は？」
「……俺は、リヴァイだ」
「そっか、よろしくねリヴァイ！」

それは記憶を消される前日譚

何度も何度も、最初からを繰り返しているような気がする。
そのたびに変わってしまった部分を見て、深い溜息を吐くのだ。

（流石は兵長と言うべきか。本当に、厄介だ……）

エレンにとってリヴァイという存在は前世の記憶を持つだけでそこまで脅威を抱くはずじゃなかった。
ただ――――前世の記憶を持ってしまっただけで、こんな風にリヴァイに引っ付く必要があるとは思わなかったのだ。
たった一つ。皆とは違う部分。
前世の記憶なんてものを持って生まれてこなければよかったのに。

（このままじゃ何も変わらないな……）

エレンは一人、苦悩する。
今生きている彼の記憶は消せる。なんせ今のリヴァイは前世とは別物だ。
アッカーマンではあるが、エルディア人の生まれであるため始祖の巨人の力を行使して生まれてから今までの記憶を消去することは可能だった。記憶をゼロから捏造するという点では難しいが……。
アッカーマンという血筋でも、記憶を消すことは可能。逆に消した記憶を思い出すこともまた出来る。
あの時、過去から未来が変動するより――――リヴァイが動く前。原作と呼ばれた確定未来が見えていた頃。
自分が誰かに殺されるため、ちゃんと死ぬ覚悟を決めた時だった。
皆に会って全てを話して、それを忘れさせて自分を殺せるよう仕向けて。

そうして最後に会ったミカサと一緒に居た優しい記憶。
あの山小屋で、全てから逃げ出してきたのだと思い込ませたミカサと共にいて。つかの間の一瞬が、永遠に感じられた頃。
――――自分が死んだら全てを思い出すようにと、ミカサの記憶を忘れさせた決意を思い出す。
リヴァイのせいだった。
過去が変わったせいで全部台無しになった。
だからそこだけは、エレンはリヴァイを許せない。

ただいくら記憶を消していても、リヴァイの頭の中に前世の記憶があるせいで、いくらこちらが暗躍をしていてもすぐに気づかれてしまうのだ。
いわゆる雑草を表面だけ切り取っても根っこが残ってしまったら何度も生えてくるようなもの。
しかも原作知識とリヴァイが呼んでいたそれは、始祖の巨人の力すら理解しているようで、エレンが何かしら記憶を消去していることにも感づいているようだった。
前世の記憶を持つせいで出来ない部分も多いように感じる。あとは人類最強としての切り札という彼の立ち位置が問題でもあった。
彼がいなければ進めない未来がある。
そのため、リヴァイ自身を根っこから変に弄ることは出来なかった。
前世の記憶さえ無くせば元通りになるのだが、それを手放さないと言うのはこの数年で理解した。
彼にとってはそれが全てなのだ。もうエレンは分かっている。リヴァイにとって前世とは自分自身を示す本質そのものであると。
それを消しても良いと言ったら喜んで行うが、リヴァイの意志は頑なである。
だからもう、前世の記憶を消そうと足掻くのはやめた。
ただ勝手な行動をして未来を変えないでほしいだけ。
あのユミルの民が集う『道』が穴ぼこになった件もそうだ――――

あれは未来でリヴァイがいくつものバタフライエフェクトを引き起こしたせいだった。
未来が変われば、それだけ道筋も変わる。
始祖ユミルはその未来が変わるたびに巨人を作るか減らすかを決めていく。しかし未来が変わるのは突然なのだ。なんせリヴァイが「今日はどこに散歩しようか。そうだ、前世で見たあの場所にしよう」と気まぐれに行動するだけで未来が一気に変わる可能性があるのだから。
巨人になるはずだったモノが巨人にならず人として死んでいく未来があったとして、その『道』には巨人が消失する。消失した分だけ、その場所に穴が出来るのだ。
穴ぼこの未来は、巨人を減らした証拠。
――――リヴァイなりに、巨人を殲滅しようとした証でもあった。
エレンとリヴァイは巨人を殲滅するという同じ目標を持っている。ただ違うのはその犠牲者の数。どのような未来を描くのかの理想。リヴァイはエレンが一人悪になって進む未来を止めたかった。エレンはこのまま突っ走りたかった。その攻防のせいで、エレンは過去から現在へ戻ることが出来ずにいた。

「リヴァイさん」
「あぁ？」
「もう俺ね、決めたんです」
「何が？」

一歩後ろへ退き注意深く見つめてくるリヴァイに、エレンは苦笑する。
リヴァイはきっと始祖の巨人の力が脅威だと認識し警戒しているのだろう。
何度も何度も見てきた光景だ。何度も記憶を消しているのだから。
いや、出来るかは分からないがもしかしたらアッカーマンとしての血が警戒を促しているのかもしれないが……。

「立体機動装置を手に入れましたし、そろそろ地上へ行くために動こうとしてますよね？」
「……だから何だ」
「いえ、俺もうアンタがどう動こうが変に弄るのは止めることにしたんです」
「あぁ？」
「リヴァイさん俺が記憶を消してるって理解してるでしょ？」

その言葉に彼は目を細める。
やはりかと言うように、警戒は怠らずに。
まるで小さな動物がこちらへ向けて威嚇しているように見えた。
中身は肉食動物のように狂暴だが。

「何が言いたいんだ、エレン」
「リヴァイさんの持っていた前世の記憶……あの漫画の、原作が始まる瞬間までに勝負しませんかってことです」
「どういう意味だ？」
「リヴァイさんがこの地下街にいる今から、過去の俺が兵団へ入隊するまでの間に俺は無理やり記憶を消そうとはしません。……いくつか仕掛けますけど、リヴァイさんだったらすぐ分かるでしょうし、問題はないですから」

垣間見える未来でエレンをじっと見つめるリヴァイの瞳。何を考えて行動するのか読めない不可解なもの。
いくつかの偶然を引き当てて、さっさと地上へ上げてしまおう。その方が都合がいい。
早めに地下街から脱出したリヴァイさんによって見れる複数の未来にはかつて経験した最悪のものはない……はずだ。
ハンジが地下街へ興味を持ち、偶然リヴァイがいる場所へ来るように仕向けておいた後の未来は現段階で複数見えるが、そこからどう伸

びるのかはまだ未知数だった。
何度も言うように、リヴァイが動けばそれだけ未来が変化するのだから。
だからこれは、エレンとリヴァイの理想をかけた勝負でもあった。
「リヴァイさんは前世の記憶を失いたくはないでしょう。なら俺はもう諦めます。でも俺は俺が描く未来は変えたくない。リヴァイさんが変えようと動くならそのたびに俺も動きます。イタチごっこ上等ですよ」
「……だから勝負ってことか」
「はい」

原作知識を持つリヴァイにとっては、それがすべてだ。つまりはそこから改変した未来についての対応力はないに等しい。
そこからどうやって人を救うのか。どうやって理想の未来を目指すのかを――――何故か、リヴァイの理想の先を少しだけでも見てみたいとエレンは思ってしまった。
あの『道』すら変異させてしまったリヴァイの力に、様々な感情が込み上げたせいかもしれない。

まあそれでも、自分の理想を覆すつもりはないとエレンは覚悟を決める。
今は何もしない。これから先は裏で動く。リヴァイのように行動するだけ。
ただすべてが始まったその後は――――。

第十二話、手紙

地上から地下街へ来たハンジは相応の危険に身を晒されてでも知りたいことが山ほどあるらしい。
うんざりするほど怒涛の質問攻めを喰らい、これがハンジかと遠い目をしてしまったが、とりあえず当たり障りない答えを出しておくことにした。
あいつは紙を取り出してメモを刻んでいく。
それを何度か繰り返すうちに気が付けば夕暮れに差し迫っていて、それに気づいたハンジが「もうこんな時間!?」と慌てたように上から垂らされたロープを手に取った。

「何だ、もう帰るのか？」
「無断でここへ来てるからね。地下街にいるってバレたら面倒くさい。また明日、同じ時間に来るよ！　リヴァイ、あなたもまた来てくれるかい？」
「……まあ、時間はあるからな」
「よかった！　何かあったらメモでも残しておいて！」
「いや字は書けねえから無理だ」
「えっ――――うわっ！」

何故か驚いた様子のハンジがロープからずり落ちて尻を強打する。
痛みにもだえ苦しんでいたようだったが、涙目になりつつも俺の方を見てきた。

「文字読めないの？　じゃあ書くことも？」
「地下街育ちはほとんどがそうだが……なんだ、馬鹿にしてんのか？」
「いやいやそうじゃないよ！　そっか。そういう教育を行わないのも地下街の……よし、リヴァイ！」
「あぁ？」

「私が君に文字の読み書きを教えてあげるよ！」
「いやそれは……」
「リヴァイ？」

思わず断ろうかと思ったが、さすがに言語習得についてこれから先の事を考えれば必要なものかと判断し頷いておく。
それに満足そうに笑ったハンジは「また明日！」と言って地上へ戻っていった。
騒がしい嵐が無くなったせいか少し寒気がする。
冷たすぎる風が肌に当たるせいだろう。もうすぐ冬がくるからか。
コツコツと足音が聞こえて後ろへ振り返る。
そこにいたのはエレンだった。
ハンジがいた時は後ろへ下がり、いつの間にかいなくなっていたはずのエレンの姿に少しばかり苛立ちが込み上げてくる。

「……エレン」
「はい、何ですかリヴァイさん」

とぼけたような顔で、俺をじっと見つめるその姿。
彼に隙を与えてはいけない。そう思っていたはずなのに、何故俺は散歩をしようと思った時、エレンの言う通りに従ってしまったのか。

「……お前、仕組んだな？」
「さぁ、どうでしょう」

にっこりと笑ったエレンが何を考えているのか分からず、少しだけ恐怖を覚える。
それと同時に、怒りもあった。
こいつ、俺をどうにか手のひらの上で転がそうとしてやがるな。
今回は分かりやすい警告。
次はもっとうまく誘導してやろうかという意思すら感じられる。

（……ああ、そうか。前世の記憶を奪われないから大丈夫だと思っているのが間違いか）

奴にとっては、今もこれから先も俺を含めた様々な未来が見えるはず。

その先で何が起きるのか理解し、俺をエレンの理想通りに動かそうとしているだけ。明らかな挑発行為だった。

――――でも、なんでわざわざそんな分かりやすい警告をしてくれたのか。

それだけが気がかりだった。

でも今はそれを考える暇はない。

喧嘩を売られたなら買う。そうじゃなければ俺が見た原作に近い未来になってしまう可能性が高い。

つまり意地とプライドの問題だった。

「上等だ」

ニヤッと笑った俺にエレンは何も言わずに俺を見つめてくるだけ。

きっとこれから先もエレンについては注意を怠らない方が良い。

それだけを心に刻んで動くことにした。

――――と言っても、地下街ではファーラン達の面倒を見て、約束の時間ではハンジと会って文字を教えてもらう代わりに地下街の生活について教えていく。

そうやって日々を過ごすうちに、気が付けば半年過ぎていたようだ。

「よし！　もうこれで文字はばっちり覚えたね。流石だなぁリヴァイ

は。結構早い段階で覚えてたじゃないか」
「カタカナを右から読んで上下逆転させてるような文字だったからな。覚えやすかっただけだ」
「カタカナ？」
「いやなんでもねえ。……それで今日は何が知りたいんだって？」
「あーうん。それなんだけどさぁ」

目をキラキラとさせていたハンジが、ちょっとだけ気まずい顔で口を開く。

「私はこれから訓練兵として志願することにしたんだ。だからここへ来るのは難しくなる」
「……壁の外を見るためか？」
「何があるのかを自分の目で見て知りたいからね！　もちろん時間があって抜け出せるならまたここに来るよ！」
「いや来るなよ訓練兵。バレたら処罰の対象になるだろ」
「アッハハハ！　処罰どころか地下街にたまーに侵入してたってバレたら牢獄行きかもね！　いやもしかしたら殺されるかも！」
「おい」

危険を承知の上でやるのは構わないが。こいつ好奇心で動いていつか死ぬぞ。誰かついていてやれ特にモブリット。まあ未来で会えるとは思うが。

「……まあつまり、お前が来るのは今日で最後なんだな？」
「まあね。リヴァイは寂しい？」
「いや」
「そう言うと思った！」

やけに爆笑しつつ空を見上げたハンジ。
流れる空気が冷たく、太陽の暖かさに眠気が呼び起こされる。地下

街では通常聞こえない鳥の鳴き声がする。
いつの間にか、ハンジの笑い声は聞こえなくなっていた。
「……ハンジ。お前に聞きたいことがある」
「なに？」
「地下街を調べていて、お前はどう思った？　これは自然形成されたもんだと思うか？」
「急に何言い出すの？　うーん……流石に人工的には無理だと思うよ。こんな大きさ。今の技術でも不可能だと思う」
「人がやるなら無理だろうな。でも巨人だったら？」
「いやだから何言ってんの？　巨人ならできるって言っても、あいつらに知恵はないんでしょ。一匹閉じ込めて暴れさせたとしても、こんな広い穴出来るわけがない」
「出来るわけがないって誰が決めたんだ？　いや、そもそも地下街だけじゃねえ。巨人は何処から来たのか。巨人に知恵がないって本当に断言できるのか。お前は」
「なにを言ってるの？」
「地下街は安全とは言えない。それは地上も同じはずだ。壁がどうやってできたのか。巨人に何故壊されないと断定できる？　何で王政はその常識を民に押し付けたのか、分かっているのか？」
「リヴァイ、それは――――」
「絶対にありえないって言葉はな、胸糞悪いがそういう未来の道筋を確定させたクソ野郎にしか出来ねえんだよ。だから巨人が知恵を持って動くかもしれない。壁がいつか壊される日が来るかもしれないぞ」
「ね、ねえリヴァイ。何言ってるの？　頭おかしくなったの？　いやほんと、なんで急にそんなこと言い出すの？　まるで何か、根拠があるみたいな……」
冷や汗を流したハンジは顔を青ざめている。
頭が回るのか、もしかしたら地下に巨人でも眠ってるとかいう想像

でもしてるのか。
俺の真後ろにいるエレンをチラリと見たが、奴は何も言わない。
（……少し言い過ぎたか）
ハンジがこぶしを握り締め考えている様子に、肩の力を抜いてみせた。
俺の雰囲気が変わったのが分かったのか、きょとんとした顔でハンジが見つめてくる。
「あの、リヴァイ？」
「まあ、冗談だ。さっきの話は何も気にするな」
「ちょっと！　ねえ本当にやめてくれない!?　ってかマジでビビったー！　ああもうリヴァイ本当そういう冗談良くないよ!!」
「うるせえ黙れクソ」
「クソって言う方がクソなんですぅー。このクソ野郎！」
「うるせえクソ野郎。……まあこういう話は流石に誰かに喋らねえ方が良いぞ。話すなら内緒話でも出来そうな友人とかにだな」
「え、それってつまり、リヴァイにとって私はこんなぶっ飛んだ話でもできる友達だってこと？」
「いやそうじゃねえクソが。……はぁ、もういい。おら、夕暮れが近づいて来てるぞ。帰るんだろ」
「まあそうだけど、なんか釈然としないな！　なんでお別れ直前になってこんな意味深な話してくるわけリヴァイの馬鹿！」
「うるせえ」
「それにこれは話さない……いいや、話せないよ流石に……」
まあ、そうだろうなと思う。
ハンジは頭が回る。俺が話した内容について、いろいろと危険性に気づいたのだろう。
俺が冗談だと言った話が、嘘かどうか遠回しに伺っている様子も含めてハンジはちゃんと考えているようだった。

「ああそうだ、ハンジ。文字を教えてくれたお礼だ。受け取れ」
「え、なにこれ雑巾？」
「これから集団で生活すんだろうが。汚ねえと眠れた気がしないだろ」
「いや私は別に……というか、今日言ったばかりなのに雑巾持ってたってことはリヴァイはこれを常に持ち歩いてるわけ？　何それ変態？　そういう性癖の持ち主!?」
「うるせえ明日から大変なんだろ掃除して風呂入ってクソして寝ろ」
「もう指摘するとすぐ罵倒するの良くないと思うよ！」
「指摘されたわけじゃねえよ！　……ああそれと、これも頼む」

懐から取り出した封筒に入った手紙。封筒には蝋燭で封をしてある。
こういった手紙類は地下街にとって高級品だが、これだけは譲れなかった。
勝手に読まれたら困るから、封をすればそのままにしてくれると思ったのだ。
ハンジが独断で勝手に開けたとしても、こいつならおそらく自分の考えで動いて周りに喋ろうとかはしないはずだから、責めるつもりはないが……。

「これは？」
「地上にいる男に宛てた手紙だ」
「ええと宛名は『スミスさん家のエルヴィン君へ』ってその子が何処に住んでるのか具体的に書いてないんだけど!?　私スミスさんちのエルヴィン君とか知らないよ！」
「じゃあ持ってるだけでもいい。俺もいつか地上に行く。その時まで預かっててくれ。それかお前がエルヴィンに会ったら渡しといてくれ」
「会ったらって、そんな偶然あるわけが……ああ、いや……」

ハッと俺を見たハンジが口を閉ざす。
そうして何も言わなくなったこいつは、別れる時間までその場で黙って考え込んでいた。
俺に何かを聞こうとしていたが、問いかけようとはしない。

「とりあえず、再会する時までに何かしらの返事でも書いてくれたら助かるって伝えといてくれればいい」
「あーうん。なんかよくわからないしいろいろ考えなきゃならないことを頭にぶっこまれた感じだけどもう分かったよ!!　……つまり、再会した後なら問い詰めても問題はないってことだよね？」

ハンジの質問に、俺は何も言わないでおいた。

第十三話、人間賭博場　前編

ハンジが訓練兵として志願し、別れてから数日。流石に訓練がきついのか地下街よりかはいろいろ興味を持つものがあるのかは分からないが、とりあえずハンジが宿舎から抜け出してこちらへ遊びに来る様子はない。

調査兵団になるまでまだ時間はかかるだろう。数年は会えない可能性を考え、その間に俺はこのまま地下街に居ていいのかと考える。そんな時だった。

「立体機動装置を使った金稼ぎ？」

「ああ！　俺達はリヴァイのおかげで生き方を学んだけど、それ以外の皆は違うだろ？　死んでる奴らだっているんだ」

ファーランが息荒く俺に向かって話していく。

それは地下街での現状を変えていきたいというもの。少しでもいい暮らしになれるようにしたいという熱意。ファーランが持つ社交能力の高さを考えてより経験をといろんな場所で仕事をさせてたくさんの人間たちと交流させたせいだろうか。

地下街は厳しい環境しかない。

きっと巨人に襲われてからも、その後も――――。

もしかしたら、エレンがパラディ島以外の全てに攻撃をと行った後の未来でも、地下街という闇は残されたままかもしれない。

商人たち、住処を持つ人々。それ以外は生きる気力すら失ったものが多い。夢を無くしたものが何もできずたどり着く人。頼れる身内を失って路頭に彷徨う子供が行きついた地獄。そういう場所だからだ。

ファーランは優しい。

自分の事しか考えてないこの地下街で、他人の事を考えて行動す

る。だから人をよく観察し、その心にするっと潜り込むことが出来るのだから。
地下街での闇をずっと見てきた彼には耐え切れないのだろう。
武器を手に動こうとする姿は、エレンに似通っているかもしれない。

「娼婦たちの住む区域で生まれた子供たちが飢え死にする。俺達がこうやって立体機動を手に入れたんだから、これを利用して彼らに食べ物が渡るようにしたい！」
「駄目だ」
「なっ――――リヴァイ！」
「立体機動だけは使うな。それ以外なら構わない」

紙に書いた情報を思い出す。
立体機動装置を使って移動を繰り返していたから、調査兵団に目を付けられたはず。だから壁の外へ行く羽目になった。そのせいでファーランは巨人に食われて死んだはずだ。
ならばその状況自体をなかったことにすればいい。
立体機動装置を使わなければ調査兵団に目を付けられることはない。俺はハンジを通じて入るつもりだから、何があろうとも問題はない。
しかしファーランは俺の言葉に納得していないのだろう。

「立体機動装置を使わずにどうやって……飢え死にする奴らは多い。今こうやってる間にも死んでるかもしれないんだぞ！」
「物理的な手段に出るんじゃねえって言ってんだよ」
「どういう意味だよ、それ……」
「俺は今までお前に何を教えてきた？　地下街でどうやって生きていけばいいのか、食べ物の増やし方を教えたのは俺だろう？」

流石に病気になってしまったら俺には何もできないが、餓死を防ぐ

ことは出来る。
食べ物を分け与えるだけがすべてじゃない。地下街という限られた場所だが、食べ物を増やしていけばいい。それ以外にも子供でも働ける場を教えて、ファーランのように自立させること。
俺達がずっと守れるわけじゃない。
立体機動装置を手にしたからと言って、それで全部うまくいくわけじゃないことをファーランに教える。

「誇れ、ファーラン。お前の社交性は俺より優れている。人と接する方法。危険かどうかを見分けるやり方。喧嘩を回避する仕方。全部を教えてやれ」

それこそ教師のように地下街で子供たちに常識を根付かせてやればいい。
俺がやるのではなく、ファーランがやれることだと思う。俺は喧嘩や殺し合いの仕方。立体機動装置などの運動方法についてしか教えられない。
これから先地下街へ出向くのも難しくなるだろう、きっと。
ちょうどよかったのだ。
俺としても地下街をこのまま放置していくわけにはいかなかったから。

「……リヴァイより優れてる、だって？　俺が？」
「喧嘩は弱いがな、人と接する行動は俺より出来ている」
「ハハッ、まあリヴァイは凶悪面で判断されちゃうことあるからね。あと毎日掃除しまくってる神経質な面もあるから」
「うるせえクソが」
「そういう口が悪いところも……そっか、俺にしか出来ないこと、か……」
「お前自身が動いて人を救おうとしても、それは限られるだろ。なら自分の手で動けるように教育すりゃあいい。お前ならできるはずだ

……もちろん俺も協力する」
「……ああ、ありがとう。リヴァイ」

ついでにファーランに文字を教えることにした。彼を通じて学校のように子供たちが集まって勉強する場所を作っておけばいい。
大丈夫かなと思える子供だけ、仕事を提供してやってもらうのだ。最低賃金であろうとも、金さえあれば果物一つぐらいは買えるだろう。

そうやってファーランの言葉をきっかけに学校……いや、寺子屋のようなものか？
路上でも何でも、生きたいと思える子供達。大人も交じっていたが、悪意ある奴らは俺が追い出してやりつつ、彼らに生き方を教えた。
それはケニーが俺に教えてくれた時のように。
俺が教わった全てをファーランが活かした。そうして次にファーラン自身が子供たちへ教える番なのだ。

（……ああクソっ……なんか、ケニーに会いたくなるな）

もう数年も会うことのできない叔父。
今は何をやっているんだか。元気に飲んだくれになってたらいいが……。
再会したら本気でぶん殴ろう。それだけは譲れない。

現在時刻は深夜、だろうか。
地下街は太陽が出る場所が少ないから分かりにくい。
子供たちは眠っている。
ファーランは自立できそうな子どもの面倒を見て仕事をするため外にいる。

そんな状況で、一人の男の声が聞こえた。

「……リヴァイさん」
「あぁ？」
最近は何も言わなかったエレンが、珍しく俺に声をかけてきた。
それに警戒しつつ彼を見ると、じっとこちらを観察するように顔を向けてくる。
「何だよエレン。何か言いたいことがあるのか？」
「……そうですね。この後の選択次第によっては、ですけど」
「はっ？」
意味が分からず目を細めると――――――不意に、扉が乱暴に開かれた。
「ごめんなさいリヴァイさん！　ファーランさんが!!」
「おいなんだ。どうしたチビ助、何かあったのか？」
涙をこぼすチビの肩を叩く。
そうして彼は嗚咽を漏らしながらも、必死に言葉を紡いだ。
「ファーランさんが俺の代わりに捕まってしまったんです。あのクソな金持ち共に……!!」
俺の口癖を覚えてしまったチビが、悔しそうにそう呟いた。

ここまでやらかすの兵長ぐらいなものですよ

甘い考えだったかもしれない。
イタチごっこだと思われた攻防は、確実に別の意思を持って変わろうとしていた。
――――流石にこれは、予想外だと。
勝負を仕掛けた話についてはリヴァイの記憶を消した筈だ。その後は本当に記憶を弄る真似はしないつもりだった。
今回の件についてもそうだが、本当なら口を出すつもりはなかったのだ。
今ここにいるエレンにとって重要な点はリヴァイとハンジが交流すること。
ファーラン達との関わりは注視していなかった。
さすがに幼い頃はエレンとの交流が多く、独り言など目立ちすぎて死にかける未来もあったからそれだけは気をつけたが。
小さいが、なんとか成長したリヴァイなら大抵の人間が敵うわけはない。本当に気をつける点はリヴァイの発想。どういう考えで未来を辿るのかという点だった。
だからエレンは、ハンジが協力者になるよう仕向けたのだ。
なんせエレンが手を出さなければ未来は本当にひっくり返る。
調査兵団へ行くことを止めて密かにアルミン達と接触した世界もあった。
あれは主にアルミンがヤバすぎて即座にその未来ルートを消そうとエレンはすぐ行動したが。
他にも、ケニー・アッカーマンを始めから味方へ引き入れてリヴァイが憲兵へ成り上がり壁の崩壊と共にライナー達を引っ捕らえてグリシャがレイス家を襲う前に捕縛した未来ルートがある。
あのあとの未来をエレンは見ていない。そこまでの未来が確定してしまったらエレンは巨人になれないからだ。

だからハンジと交流させ、壁が破壊される前に巨人を捕らえようという考えをリヴァイにさせないよう気をつけている程度である。
それと以前何故かこちら側へ落ちてしまったジークのせいで彼と協力する未来ルートが出来てしまったこともあった。その場合壁は破壊されず物語が始まることなく、リヴァイがジークと共に過去のマーレにいたアニ達を仲間にすることへ成功し、奮闘していた世界に変わっていたのだ。
もちろんこれもエレンにとっては理想とは程遠い未来なのですぐにジークを道へ投げ飛ばして来た穴をなんとか塞いだけれど……
未来を見通すといっても、リヴァイの動き一つで一気に複数の結末へ変わるようになっている。
確実にヤバイなと思われる部分はなるべく誘導していた。
自分が出来るのは、原作と呼ばれたあの最初の未来へ繋ぐため。でも自分が行動したことで起きる未来変動は流石にリヴァイほどではない。死人がどれだけ出るのかといった部分のみ。それ以外は変えてないつもりだった。
最初に見たあの『地ならし』を起こすことこそパラディ島の自由へ繋がる近道だから。
だから、エレンは気にしなきゃいけなかった。ハンジと出会ったからある程度の未来改変は大丈夫だと思わなきゃよかったのだ。
リヴァイの傍にいるエレンが、彼の行動を変えるたびに未来が変わる。
それなら、リヴァイに最も近くにいて影響を受けたファーラン達もまた同じなのだと。
最近はなくなった筈。ハンジと出会うことで、後はリヴァイのいう原作開始までは注視する程度でいいと思っていた。
それは、頭が痛くなるほどの大きな未来改変だった。
きっかけなんてなかった筈だと一瞬焦ったが、リヴァイを注視していたエレンには分かった。
これは、まだ小さな出来事でしかないのだと。

（今回はリヴァイさんが未来を変えたんじゃない。リヴァイさんに影響を受けたあいつらが引き起こしたのか）

――――その時になってようやく、心の奥底が凍るような感覚に襲われる。

前世の記憶があるからリヴァイは動いた。そのせいで未来が変わったと思っていた。しかし違うのだ。

未来改変への羽ばたきが大きければ大きいほど、その影響は強まる。

（俺も、兵長に影響を受けてたってことかよ……！）

そうエレンは今までの行動全てを思い返し理解する。

リヴァイを動かすエレンもまた、未来を変えているようなもの。リヴァイだけじゃない。エレンもその自身の行動一つで未来を変えてしまっていたのだと気づいた。

それは無意識だった。

リヴァイが未来へ進む先、その歩む方向さえ変えるだけだから。

あの最初の未来を見るために動いているのだと思い込んでいた。

事象が逆転していた。

リヴァイの動き自体が未来を変えていたのではない。リヴァイ自身のせいじゃない。確かに彼の影響でこうなったと言えなくはないが。

リヴァイではなく、周りが影響を受けて動いたせいで未来が変わっていたのだと気づき、愕然としたのだ。

もしもその影響が大きくなったらどうなる。

リヴァイだけじゃない、他も気をつけなければならないのか？

もしも全員の動きが変わって、全部未来が変わったら……。

そこまで考えてエレンは死んだ目になった。

いや過去へ来てからずっとエレンは感情をなくした魚の目をしてはいたが。

それ以上に彼の目が死んだ。
前世の記憶を持つリヴァイ風にいうなら、これは呪いのようなもの。それも膨大に増え続ける汚染。
一人で止めきれるかと叫びだしたくなるほどのもの。
エレンは少しだけ面倒くさくなって全てを投げ出しそうになった。それでもすぐに意地を張り、頑張れる程度の決意を抱くことができたけれど。

（いろいろと考えるのは後にしよう。今はとにかく、リヴァイさんのことだ）

あの時ファーランによって引き起こされた未来は、リヴァイの自由が失われる最低のもの。
なんせリヴァイはまだ誰も失っていない。それどころかより多くの子供達を抱え込んでいる。
多くの者の庇護は、リヴァイの弱みに繋がる。
リヴァイは自分のせいで失う命がないように行動する。だから人質をとられたらそれだけで抵抗が出来なくなる。
地下街に根を張る金持ち連中はリヴァイの噂を聞き、弱みにも気づいたのだろう。
リヴァイの隣にいたファーランが有効な人質として狙えると。
リヴァイは一人なら最強だ。
でも仲間がいたら弱くなる。守らないといけない命を庇うから、傷が増える。エルヴィン以外の人間に縛られる。それだけは駄目だ。
勝負とか言っていられる状況じゃない。これを見過ごすことはできない。
だからエレンは、今回だけは特別に休戦にしようと思い込むことにした。

リヴァイがこれから選択する行動が、面倒な未来へ繋がる恐れもあるのだから。

第十四話、人間賭博場　中編

そこは、地下街のゴロツキ共が目的がないと滅多に来ない――――地上への階段に最も近い場所。

住宅地のように建物が連なるその奥には、一部区間のみポッカリと何もない空間があった。

そこには人の身長より大きな柵が張られていた。それはまるで地上の人々を巨人から守るためにある壁のように見える。

その柵の中で、複数の誰かが戦っていた。境界線でありリングのようなものだったのだ。

誰かが逃げないように。戦うまで終わらない地獄のような光景が広がる。

その柵を囲むように、建物が並べられて建っているのだ。

そこは窓が異常に多く開かれていた。

まるで階下――――柵の中で行われている殺戮を覗き見るために。

殺し合いを喜んで見て、賭け事を行う観戦者。地上でやるとなると一般的な民衆に共感を得られず目をつけられる可能性があるためなるべく知られない場所で行う遊びだと、彼は笑った。

これは地下街の一部の娯楽であり、国に脅威をもたらそうとする奴らを懲らしめるための場所なのだと説明する。

貴族から見れば、これは地下街でしか暮らせない奴らを見下す行為。地下街で増えすぎた人を物理的にかつ有効に削るための必要な搾取。

そして地下街で見過ごせない何かをやらかした者達に対する警告。地上で行うのであればまだ見過ごせるが、地下街で生まれ育った子供たちが協力し合い生き抜こうとする行為はこれから先の脅威になり得ると彼は予感していた。だから捕まえたのだ。

しかしそれだけで殺戮が安易に行われるわけがない。

だから褒美をとらせるのだ。地下街の住人にとっては、地上へ這い

上がる権利を与えるためのチャンスなのだと。
これが出来て勝ち上がれたなら、良い暮らしが叶うぞと。
殺し合いは地下街に住む奴らから始まる。
これを自ら望むよう細工した者共が数人生き残れば、その後にその娯楽を企画した者から何人かの兵士が投入される。
王家支持派の中の兵士は、人を殺すことに慣れたものが多い。
手加減もできる。遊びも可能。
そうして賭けを盛り上げて、地下街の人口を減らすのだ。
金儲けも兼ねた凶悪な行為ではあったが、王家の意志に従った行為でもあった。
貴族は高みの見物と見てはいるが、心の奥底で「これが自分たちだったら」と恐怖を植え付けられる。勝手な行為をしないよう牽制と警告は、地下街の者達だけじゃない。王家の秘密を知らないが何か抱えていると気づいたが無言を貫く賢明な者どもを対象とした行為。
賭け事や観戦を行った時点で共犯になったも同じ。だからもう、逃げることは難しい。もちろんこれを一度見て何かに目覚めて何度も足を運ぶ狂人も存在しているが……。
男たちがいる場所は一番高い部屋。
壁に手錠で繋がれた血だらけのファーランは男を睨む。しかし男は何もせず、ただ嘲笑うだけだった。
「――――お前たちはやり過ぎたんだよ。地上で……学校のように子供たちに何かを教えるという行為は見逃せる。裕福な馬鹿共が勝手に無償でやっているだけならな。だが地下街じゃそれは脅威になれる。わかるか？」
柵の中で殺し合いが始まっている。
血生臭い地面に横たわる死体と、それに興奮する人々の熱狂が部屋に響き渡る。
それを聞いていた彼――――王家の秘密を知っているがそれを隠す商会上層部の男だった。

その名を、ファナティカー・ハイデントゥームと名乗った。

「地上と地下街は空気が違う。ここは常に殺伐としてやがるんだよ。人を信用しない。利用するためだけに関わる奴ら。ガキどもが手を取り助け合いながら何かを盗む。女は男に金を貰って身体を売り、男は力だけでのし上がる。そんな単純な世界で十分なんだ」

「……」

「なのに、お前たちがした行為はなんだ？　子供に文字を教え、地下街でどう賢く生きるのかを習わせる」

「……それがなんで脅威になるんだよ。意味が分からない」

殴られて重傷を負っているファーランはファナティカーの言葉に眉を顰めた。

何故そこまでいわれる必要があるのか分からない。何故脅威と捉えられるのか、理解が出来なかった。

それにファナティカーは笑う。

「ハハハ！　脅威に決まっているだろう！　飢え死にするかもしれない弱い子供を育てて自分たちの思うがままに扱えるかもしれない存在へ鍛えるようなものだ！　まるで兵団を一から作り上げているみたいじゃないか！」

「ッ……そんなつもりで子供たちに生き方を教えてきたわけじゃない！　あのままだと死んでいた。親もいない路上暮らしの子供は、何もできず飢えて死ぬだけだ！　それを助けて何が悪いって言うんだ!?」

「そうだな。過去――――お前のように本気でそう思っていた奴らがいたよ。文明の発展のためにと武器を作り上げた者。世界を見たいがために巨人に手が届かない場所まで空を飛ぶことを夢見た者。そういう奴らは自覚もしてないんだ。これは国に対する反逆行為だということもな」

そうして言葉を続けようとしたファナティカーだったが、不意に扉

が叩かれたため後方へ振り返る。
「失礼します。会長――――」
「ああ、やっとお出ましか」
そう言って笑ったファナティカーはファーランにこれ以上言うつもりはない。
どうせいつかはファーランという男は殺す。だが、それより前に一番の盛り上がりを見せるであろう釣り餌になってもらわなきゃいけない。
「リヴァイという狂人がここへ来るようだ。ここの人間賭博場の一番の目玉としてな。ハハハッ。殺されるためだけに来るだなんて本当に馬鹿だよなぁ！」
「ッ……だからどうした。リヴァイは殺されない。あいつはお前が思っているよりずっと強い！」
「ハハッ、分かってるさ。だからあいつには枷を付けさせてもらう……さて、そこで楽しんでいてくれたまえ、俺は今回新しい客を迎え入れなきゃいけないのでね」
「おい待てクソ野郎!!」
「汚い口だ。全部終わったらその口から潰してしまおうか」
ファナティカーは別部屋へ向かう。
隣室に位置するそこは大きな窓が開かれており、客人たちは階下を見て身体を震えさせていた。
そこにいた客たちは貴族にしては末端の者。しかし王家に疑問を持つ思考であると情報が伝えられ、脅威になり得るかもしれないと判断しここへ招待した者達だ。
「やぁ、どうですか今回の催しは」
「……ま、まあいいんじゃないかな」

「顔が青いですよ。これから先がとても楽しいというのに」

ファナティカーが笑うと、彼らも無理やりだが笑う。

今にも気絶し、吐きそうな様子だった。そりゃあそうだろう。なんせ派手な殺し合いが行われているのだから。その殺戮を楽しむのは彼らより圧倒的に地位が上の者ばかり。

熱狂と狂乱の声が響いた瞬間身体をピクリと震わせるが、ファナティカーに悟られないよう懸命に我慢していた。それをファナティカーは察し、心の中で嘲笑う。

「リヴァイというゴロツキがここへやってきます。彼はどうにも地下街で脅威となり得る存在でしてね。なんせ奴はとても強い。幼い頃に大人を殴り殺したと噂されている程度には、この地下街では一番と言われるぐらいでしょう」

「そ、それはとても楽しみですな」

「そうでしょう！　しかしそんな圧倒的な強さだと賭けにはなりませんからね。彼には手枷を付けて、目隠しをしたまま参加してもらいますよ」

「そ、れは……」

「楽しみでしょう？　彼がどういう風に戦うのか」

――――言葉の裏に隠された、リヴァイがどう殺されるのかお前たちに分かるかというもの。

お前たちもいつかそうなるかもしれないぞと言外に警告を発しつつ、ファナティカーは笑う。嗤う。

賭けをするのは自ら進んでこの地下の人間賭博場へやってきた金持ち連中のみ。

今回もまた稼ぐだろう。ファナティカーの隣で震えている末端貴族共に警告も出来る。

一石二鳥。リヴァイが殺されたら、その後隣室で繋がれたままのファーランから子供たちをどう教育しているのか詳細を聞くために

拷問して、それから殺そう。
だから気づきもしなかった。
――――リヴァイが、悪魔を連れてこちらへ近づいてくるという事実に。

・・・

それは一瞬。
手枷と目隠しを付けた男、リヴァイ以外の者が立つことすら出来ず地面に身体を伏した光景。
血に濡れた足が彼の強さを想像させる。
両手を使わず、視界を奪ってもなお戦った男は足だけで全てを倒してみせたのだ。

「な、んで……！」

それを上階から眺めていた全員が絶句した。
いつもの熱狂すら聞こえないほどの静けさが周りを包み込んだ。
武器を持った兵士すら瞬殺する圧倒的な強さに息を呑む者が多かった。それと同じく、恐怖を抱いたのだ。
彼は上を見上げた。向けた方向はこちら、ファナティカーの方だった。それに男は一歩後ろへ下がり顔を青ざめる。

「まさか、俺の位置が分かっているのか？」

慌てて部下共に命じて殺せというが、何故か銃を撃つ前に彼らはバタバタと地面へ倒れる。
リヴァイは何もしていない。ただこちらへ向かって歩き始めただけだ。見えていないはずなのに、しっかりとファナティカーの方へ向けて歩いている。
銃を持った部下たちは上階にいた。何かを投げた様子もないのに

倒れていった姿が見えた。リヴァイが攻撃したのかと思い込むぐらいとても不自然に気絶していったのだ。
一歩進むごとに、場の空気が混乱する。でも悲鳴が上がったと思ったらすぐに聞こえなくなる。窓から見えたのは気絶している貴族たちの姿。
ファナティカーの傍に居た末端貴族すら倒れていく。恐怖で気絶したのかと思ったが、ただ眠っているように見えた。体を揺すっても彼らは起きない。毒でも使ったのか？　いやそれにしてはおかしい。何故自分だけは起きているのか。何故だ？
もう自分しか起きていないのか。
誰か、気絶していない者はいないのか。
王家の秘密を知って以来――――こんなにも恐怖を感じたのは久々だった。
何が起きているのか分からないという未知の恐怖に身体が震え、怯えてしまう。
リヴァイという男は何者なのか。
分からないという事実が、怖い。

「……エレン」

静寂に包まれた場でリヴァイの声が聞こえた。
エレンとはなんだ。誰か協力している者がいるのか？
でも誰もいない。窓から覗き見た男はリヴァイしかいないのに――何故か、部下に命じたはずの、後ろ手にきつく縛った縄が勝手に解かれた。
そうして視界を覆っていた布すらも自然と解かれる。
何をしたのか分からない。
これは何かの仕掛けか？　罠か？
いつの間にかリヴァイが立体機動装置を付けていた。隠していたのかそれとも呆然と見ている間にまた何かをしたのか。
立体機動装置によって一気に上階へ。自分がいる窓へと飛び移っ

てくる。
階下から見たリヴァイは小さな男だと思っていた。
……いや、それは当然だ。調べによるとリヴァイはまだ十代前半。成長期のはずだが栄養が足りていないのか幼い子供のように見えた。
なのに今窓から侵入してくる男はなんだ。人の形をしているが、本当に人間なのか？
「よぉ、クソ野郎。ファーランは何処だ」
「ひっ!?」
リヴァイはナイフを手にファナティカーの眼前へ向けた。
攻撃されそうだと怯え、尻餅をついたファナティカーは恐怖のあまり失禁する。
それに「汚ねえな……」と舌打ちを鳴らしたリヴァイがふと何もない方向を見た。そうしてじっと見つめていたと思ったら何かに頷く。
「ああ、隣か」
それは確信を持った声だった。確実に隣室にいると分かったのだ。何故？
どうしてファーランがそこにいると分かったんだ。
何か、音がしたのか？
いや周りは死んだかのように異様に静まってる。
ファナティカーの嗚咽が響くのみ。それなのに奴は何もない方向を見た後すぐに察した。
ファナティカーは恐怖に身体を支配される。
このまま何が起きているのか分からず殺されてしまうのかと涙を流す。
「み、皆に何をしたんだ。ど、毒か？　それとも何か驚異的な武器でも

……」
「あぁ？　エレンがやったことだ、俺が知るかよ」
また彼はエレンという単語を口にする。
まるでそこにいるかのように、何処かを見ながらそう答えたリヴァイに、ファナティカーの背筋が凍り付く。
ファナティカーは彼の言動を見て思い出したのだ。
なぜリヴァイが狂人と言われているのか。
奴がガキの頃、誰もいないはずの場所に話しかけ、何かを追いかけていたとされる調査報告。
ただの頭のおかしいガキだと思ったが、今までの行動を察するにこいつは何かを見ている。
ファナティカー達が見えない何かが確実にそこにいる。
巨人とはまた別の恐怖。
王家の秘密を知っているせいで、リヴァイがそれに近しい能力を手にしているのかと疑いをかけてしまうぐらいには、ファナティカーの心は現状を理解したいと思わなかった。思いたくもなかったのだ。
こんな子供が地下街にいたなんて思いたくない。それを現実だと思う方がおかしい。
「まさか、悪魔を付き従えているのか……？」
このリヴァイという男は殺さないといけない。
これは王家の脅威そのものだ。彼をこのまま生かしておいてはいけない。
伝えないといけない。誰かに。
そう思ったのが最後だった。
「安心しろクソ野郎。俺はてめえら貴族共に目を付けられるようなこ

とはしねえ。せいぜい記憶を奪われるだけだ」

その言葉を最後にファナティカーは気絶した――――。

「――――というのがこれから行く先で起きる未来です。余計なことしないでくださいねリヴァイさん」

「いやふざけるなクソが。俺が悪魔の手先になってるじゃねえか！」

「でも全員の記憶を奪って逃走。あとは目立たずハンジさんと再会するまで地下街生活を平穏に暮らすっていう未来ですよ。良いでしょう？」

「何でそれでいいと思った？」

「俺が何も言わなくてもリヴァイさんが勝手に未来を変えようとするからですよ！　俺だってここまで細かく未来を言うつもりはないですけど、今回は仕方がないですし。それに伝えないとその未来通りにならないでしょうが！」

「うるせえ原作厨!!　ファーランの身が危険なんだ、シナリオがどうのこうの言ってる暇あるならさっさと俺に協力しろ。未来が変わるのが嫌なら臨機応変に対応しやがれ！」

「だからっ――――そういうところですよリヴァイさん！　本当に横暴だなこの人は!!」

「エレンに言われたくねえんだよクソが！」

そうしてまた、未来が変わるようだ――――。

第十五話、人間賭博場　後編

エレンが促した選択肢は二つ。
ファーランを助けるか、見捨てるか。
そんなの選択肢は一つしかないに決まってる。

「それで、お前が言うには今行われてるのは王家支持派の仕業ってことだな」
「……」

何も言わず、ただ目を瞑り額に軽く手の甲を当てているエレン。
無言は肯定と捉えるが、それにしては少し様子がおかしい。いやまあいつもこいつは頭がぶっ飛んでる程度にはおかしいが……。
先ほどファーランが逃がしたチビが慌てて外へ出て行ったのは、きっと立体機動装置を取りに向かったから。
睨み合う俺とエレン。その空気は冷たく研ぎ澄まされていた。
本当だったら酔っぱらい共の喧騒が外で響き、熟睡するチビ達の寝息が聞こえるはず。
しかし今はとても静かだ。喧嘩が起きていないのは偶然だろうけれど。
子供たちの寝息すら何も聞こえない。まるでこの世界で俺とエレンしかいないように思えた。
ただ、息を呑むようにこちらを伺う気配がしなければだが……。

「エレン、俺は別にお前がいちいち口出ししてくるから面倒なだけであって、お前が言った通りの行動をしてやってもいいと思ってる。それで平穏に事が済むならな」
「……リヴァイさん」
「でもそれをこいつらが受け入れると思うか？」

扉を開ければそこからなだれ込むように転がり落ちてくるチビ達の姿。
その一番上にいたのは赤毛のチビ――――――立体機動装置を他のチビ達と協力して持っていたイザベルだった。
このチビこそ、過去から未来を変動させた一人。
前世とは全く別物になったキャラクター。
漫画で読んだことのあるイザベル・マグノリアという名前の少女は男勝りな性格と口調が特徴だが、俺が出会った当時はまだ幼女であり、まだまだ俺より背が低く小さいため他の奴等と同じようにチビと呼んでいる。それにファーランからもいろいろと教わっているせいか、イザベルは俺を特別視しない。それだけのこと。口調すら敬語を使い分け、態度も若干女の子らしくなっているのだ。
そんなイザベル含めたチビ達はファーランが捕まったという事態に気づいたらしい。

「リヴァイさん誰と喋ってるの!?」
「もしかしていつもの幽霊!? ってそんな場合じゃねえや!」
「ファーランさん助けに行くなら俺も行く!」
「なんか手伝えることありますか、リヴァイさん!」

チビ達全員の顔を見た後に、エレンの方を向いた。
あいつは俺をじっと見据えていた。未来について話していた時よりもずっと無表情のまま、こちらをじっと見つめてくる。

「お前が言う未来に、こいつらは出たのか?」
「リヴァイさん誰と話してるの?」
「まだ幽霊いるの?」
「静かにしてろチビ共」

不安そうな顔で周りをキョロキョロと伺うチビ達。

俺の腰や手にしがみついては幽霊を探すその姿はまだ幼くとても癒される。
ああ、こんなことをしている場合じゃねえってのに。
本当はこいつらにエレンと話している様子を見せたいわけじゃない。チビ達には俺が頭ぶっ飛んでるとか誤解されるかもしれないが、それでも構わない。幽霊騒動は俺の周りでよく起きているからな。
ただエレンには自覚してほしいのだ。
俺が未来を変えているとこいつは言うけれど、エレンが細かく説明してくれた未来にチビ達はいるのかどうかという話がしたかった。
ハンジと出会った時点で原作とは異なっているはずだ。ファーランはともかく、まだ十歳にも満たないイザベルをチビ達と同じく一緒に育てている時点で地下街で生きる俺は――――前世の漫画で見たあのリヴァイとは全くの別物になる。
そもそも前世の記憶なんてものを持っている時点で俺の知る原作知識とは逸脱していると思うが。
じっと見つめてくるエレンが片目を閉じてから、また静かに口を開いた。

「……そうやって未来を勝手に変えて、自分が勝ったと思わないでくれませんか。リヴァイさん」
「はっ？」

――――不意に、背筋がゾッと凍り付くような悪寒に襲われた。
無感情な声で言い切ったエレンの周りで、チビ達が倒れていく。
慌ててイザベルの傍に行くと、あいつは眠っていた。全員静かに寝息を立てて床で熟睡していたのだ。

「エレン、おまえ……」
「それは脅しですか？」
「あぁ？」
「リヴァイさんは自分の力を過信しすぎてるんですよ。俺が言う未来

と全く別に進もうとも……ファーランを助けると、パラディ島に住む皆を、エルディア人を全員救えると本気でそう思っているんですか？」
「本気じゃなかったら今てめえはここにいないだろうが。俺はファーランを助ける。それ以外も全員救う。平穏な終わりを目指すためにな」

エレンは俺を失望したような目で見て、深い溜息を吐き出した。

「……本当に俺のよく知る兵長とは違うんですね。人を殺していないからかな」
「何言ってやがる。兵長ってのは未来の俺だろ？」
「いいえ違います。……未来はたくさん変わっていますが、それでも兵長は一貫して理想を追いかけていなかった。現実を見て、自分の出来ることをやろうとしていた。それが俺にとっては邪魔なだけでした。本当に……。アンタのように全てを救うと思い込むような鬱陶しい理想論は掲げていませんよ」

気に食わない顔をしているエレンは、以前感情を爆発させたときの雰囲気に似ている。
情緒不安定なのか。急にキレる様子に困惑するが――――でも、なんとなく理解した。

「つまりエレン、てめえは俺がお前の知る『リヴァイ』がするだろう行動をしろって言いたいのか。現実を見ろと、ファーランは救えねえとでもいうのか」
「俺が協力しなかったらもう手遅れになりますよ……リヴァイさんも含めてですけど……」
「うるせえふざけんじゃねえクソが！　俺はてめえの好き勝手に動く人形じゃない。お前が知る未来のリヴァイ兵長とやらは俺じゃない！」

ようやくわかったのだ。
エレンに感じていた違和感。この嫌悪感の正体が。
つまりエレンは今の俺を見て、未来の俺と比べている。
現実を見ていると言った未来の俺は――――何をやらかしたのか分からない。
もしかしたら俺が救いたいと思った誰かが死んでしまったのかもしれない。
理想のままで生きられなくなって、現実を見てやれることだけをやろうとしているのかもしれない。
エレンの邪魔をしたのは分かる。
過去に来て干渉するぐらいの酷いことをエレンにしたのだと分かる。
ただそれだけじゃない。
エレンは勝手に俺に期待して、勝手に失望しているだけだと気づいたのだ。

「お前にとってはここは過去かもしれねえがな。俺にとっちゃここは『今』だ。前世の記憶を持った俺が『今』を生きているだけだ！　未来のレールなんざ知るか。お前が期待するリヴァイ兵長になりたくもねえよ！」

そう叫んだ瞬間、エレンの目が細まる。
逆鱗に触れたのか、それともまた俺に何かするつもりなのか。
警戒しつつも俺はエレンと向き合った。

「前言撤回する。エレン……俺はお前と協力してファーランを助けようとは思わない。俺が全てを救う。犠牲を伴った未来なんて作るつもりはない。お前が目的とする地ならしへの未来も全部――――」

俺はきっと、こいつが接してきた未来の俺と同じようにエレンに期

待していたのだろう。
勝手に仲間であると期待していた。こいつと協力しても良いと思っていた。
何を思い上がっていたんだ。
エレンは俺の目的に反する敵であるはずなのに。
「俺が殺すのは巨人だけだ。それ以外は絶対に殺さない。憎しみを生み出す行為をするつもりはない。エレン、俺はお前と真逆の意志を貫く」
エレンは何も言わなかった。
チビ達の事は――――始祖の力で記憶を弄ったのかもしれないが、眠らせたというのに。俺にはなにもしないでいた。
じっと睨み合っていたが、不意にエレンが視線を背けた。
「……じゃあ勝手にしたらどうですか。このままここに居ても、ファーランは死んじゃいますけど」
「うるせえ今すぐに行くに決まってんだろうが！」
「俺が記憶を奪わなかったらこれから先、面倒な事態になりますよ」
「別にそれでも構わねえよ！」
「……はぁ」
深い溜息を吐いたエレンは、もう何も言わなかった。
・・・
今のリヴァイは反抗期真っ盛りだ。
エレンはリヴァイのことをちゃんと理解していた。
過去の自分よりかはまだマシだろうけれど、エレン自身の意志とは真逆の方向へ突っ走るのは止めてほしい。いろいろと面倒くさいの

だ。主に最悪な未来にならないよう調整することが。
エレンは何度も過去から未来を繰り返し見てきたわけじゃない。
見たものは己の経験に変わる。絶望を何度も味わったし、いろんな悲劇を繰り返し見てきた。リヴァイ兵長がいない未来も経験していた。ミカサが早々に死んでしまった未来すら、リヴァイが動く先にはあった。
別にエレンはリヴァイが自分の意思通りに動くとは思っていない。
今回ファナティカーという男が起こした出来事、そしてリヴァイがどう動くのかについて未来を話したのだってそうだ。
何度も繰り返してきたエレンはとっくにリヴァイの精神年齢を超えていた。
だからまだ幼く、青いリヴァイは扱いやすかった。それでも突然発生するバグのように急に未来が変動することはよくあるが。

（演技だって気づかなかったなら、それでいい）

今回は物凄くうまくいったと思う。
つまりエレンにとっては――――非常に珍しいことだが、あのリヴァイに未来云々での勝負で勝ったと言える状況だった。
リヴァイに気づかれないようにしつつも、小さく溜息を吐いた。

（本当によかった。まだこの頃のリヴァイさんは素直だ……。どうかこのまま、リヴァイ兵長の時のような裏の裏を読んで未来を激変させるぐらい動こうとするあのやばい感じにならないでほしい。でも、あの兵長のようになってほしい）

矛盾を抱えた願いをリヴァイに込める。
これから先で起きる悲劇について、エレンはリヴァイに語らない。
自分の意思で動いてもらう。そうして――――あの恐ろしき『リヴァイ兵長』になってもらわないと困るから。
未来を勝手に変えられるのは困る。それに今もなお、リヴァイの前

世の知識を奪おうと虎視眈々と狙ってはいるが。
エレンは心の中で冷や汗を流す。
リヴァイが自分を敵と認識し直したことに称賛する。
リヴァイの周りで影響を受けた奴らの未来も変わる。それら全てが悪い方向へ行かないよう、エレンが調整するだけの話だ。
これからもなお、エレンはリヴァイの敵として傍に居る。
彼が弱りきり、前世の記憶なんて持たなきゃよかったと思えるぐらいの修羅場を乗り越えてくれるまで、エレンは彼から離れるつもりはない。

まだリヴァイはこれから成長し『リヴァイ兵長』となった時のように現実を見ていない。全てを救うと夢見ているだけ。
まだ幼い彼は、リヴァイ兵長になれない。
このまま死ぬ可能性だってあるのだ。人類最強たる彼が。
地下街の中で必死に生きているだけのゴロツキという程度。それをどうにかしないとこの先の未来で躓く恐れがあった。エレンはそれを察して、死んだ目になりつつも動くことにしたのだ。

ファナティカーを通じて、彼の中に根付く常識をぶち壊さなくてはならない。

（俺が今、目の前にいるリヴァイさんを――――――あの人類最強のリヴァイ兵長へ成長させる）

人を殺すことに躊躇いがある彼は、戦うための力にストッパーをかけた状態なままなのだから。ミカサの時のように、アッカーマン家として覚醒していてもその引き金は降ろせない状態なら一般人と変わりない。
だからエレンは自分でリヴァイを育てることにした。
リヴァイが周りすら未来を変えるぐらいの影響力を持つなら、自分はそれ以上の力でもって動けばいい。どんなに敵意を持たれても構

わない。その覚悟を持ってエレンは動いていた。

今はまだ、舞台は整っていない。

すべてが始まった時に笑うのはどちらなのか、それを知る人はまだいない。

第十六話、娯楽

ファナティカーは真実を知った瞬間の感情がどれだけ揺れ動くのかを知っている。それがたとえ世界の謎の一端だとしても。

世界は未だ謎が多く残されている。

それらを解明した時、人はどう思うのか。

感激して涙を流すか、または心の底から絶望し生きる気力を失うか。

ファナティカーが王家支持派になったのは親から受け継いだ商人の主として正式に引き継がれたその日に真実を知ったからだった。

彼はただ、『王家が受け継いでいる人から巨人になれる力によって壁は守られている』というもののみを知った。真実という枷に縛られて、自由に動くことが出来なくなったのだ。

そしてその王家が持つ力の一端は、ウーリ・レイスという名の王に出会えて初めて理解したのだ。

絶対に越えることのできない圧倒的な力。その存在感に彼は魅了された。それと同時に失望した。

何もできず踏み潰される蟻のように、力がある者は弱者を簡単に嬲ることが出来る。

それなのに王家は力の行使を許さない。

楽園を壁の中に築く。それだけのために動いているようにしか思えない。

あれだけの力があると分かっていながら、誰も何も言わないのだ。

自分が知っている知識はまだ一端に過ぎない。きっとまだ、何かを隠している。

それは薄々感づいていた。

でも彼は何も言えなかった。自分が利用されていることも。『王家の秘密を知る』という枷を己につけるために教えたということも分かっている。

だからファナティカーは心の奥底で自分を含めた王家とその支持派達を深く蔑む。
王に何かを命じることなど出来るわけがない。
そんなことをすれば己の命含めて家族全員が死ぬと分かっているのだから。
ウーリ・レイスはとても甘い人だ。ケニー・アッカーマンという男を引き入れてアッカーマン家の迫害を止めた。しかしそれだけだ。
壁外への進出の手助けになりかねないと自覚もせずに、様々な技術発展をしようと夢見た人々の妨害。壁の外へ出ようとする人の思考を狂人と思わせる行為。
王政府はそうやって自分たちを壁の中へ押しとどめた。
平和主義者でありながら、破綻した思考の持ち主だった。壁の中の楽園へ自分たちを監禁するような行為に嫌気がさした。
でもそれを口に出して言おうとは思わない。
王家、または王政府の意志のままに動く忠実な駒へ成り上がることだけに注意していた。
ファナティカーは賢く、そうしなければいけないほどの圧力に屈する自分を嫌悪してもいたが……。
だからファナティカーは失望したのだ。王家の思考そのものに。
その巨人化する力はすさまじく、とても美しかった。
あっけなく人を踏み潰すような化け物として魅了された。なのに彼は人々と同じように生きている。
壁の中に人々を押し込め、監禁しているようなものだ。
楽園を作り上げることに重点を置く王家の気味の悪さに寒気がした。それを表に出して言ったことはないが。
王家とはそういうものだとファナティカーは心の底から理解したせいか、恐怖は抱かなかった。むしろ怒りの方が強かったかもしれない。
我々が守らなくてもいい。別にその一端を知らなくても問題はなかったというのに、一定の利益と様々な目的の上で成り立ったもの。その一員になれたことが幸運だと思えた。いやもしかしたら逆で、知

らない方が幸運だったともいえるかもしれない。
一般人が知ればきっと混乱し大騒動へ発展するだろう事実だ。誰かに話せばきっとファナティカー自身は拷問され殺される。どんなに商人として王家を支え、民間人の支えとなろうとも――――己の立場が崩れるのはきっと、あっという間だろうと。
だからファナティカーは王家を支持している。
巨人になれる化け物が王家だと若干の蔑みを抱きつつも。
それでも、王家以上の圧倒的な力を持った存在はいないだろうなと思っていた。
王という権力。その力は本物だ。
一番最初に見たあの美しさをもう一度味わいたい。
それだけのために彼はこの人間賭博場を開いている。金稼ぎと王家の意志のため反逆する可能性や壁外へ発展しそうな力を有した者達に警告の意味を兼ねての娯楽でもあった。
それとはまた別に、ファナティカーはあの圧倒的な力に魅了されていた。
存在を知った後は何度か会合に参加するだけであって、直接力を見ることは叶わなくなっていた。
だから彼はそれに類するものを探していた。

そうして出会ったのだ。

「なんてことだ……」

ファーランという男を捕らえた後、柵の中で起きている殺し合いを見るために今回新しく来た客と共に眺めていたはずだった。
そこに乱入してきたのは今回殺すはずだったリヴァイという男。
何故か名前を知られているというのに、彼はマントを着て顔を隠していた。
まあそれはどうでもいい。それよりも引っかかる部分があった。

監視員として雇っていた兵士が扉ごとぶっ飛ばされてきた。何が起きたのかと混乱する場で悠々と柵の中へ入ってきたのは、人を威圧するような鋭い目つきの少年だったこと。
その少年がリヴァイだと理解し、ファナティカーは驚愕する。
「正面から乗り込んできたのか……!?」

目隠しや手錠はされていない。
ファーランという男が殺されるかもしれないのに抵抗したのか？
人質すらどうでもいいという冷徹な思考の持ち主か、絶対に救えると自信を持って動く相応の馬鹿か。
ごくりと生唾を飲んだファナティカーは少しだけ目を輝かせた。
あまりにもぶっ飛んだ登場の仕方をしたリヴァイに目を奪われたからだった。
扉ごと吹っ飛ばされてきた兵士は地面に伏せる形で倒れていた。痛みに呻きつつ何とか柵の外へ逃げようとしていたのだ。
そんな彼よりも小さく、まだ子供であるはずのリヴァイという男が吹っ飛ばしたのか？
「っ……おい、何をしている。早く殺せ！」

ファナティカーの指示によって動いた地下街から集めた玩具共が武器を手に殺しにかかる。
しかしリヴァイは彼らを汗一つ流さずに処理していく。殺しはしていない。ただ地面へ転がしているだけだ。ある程度の痛みを伴った攻撃でもって、しばらくは立ち上がれないようにしているだけ。蹂躙にも似ているそれは、まるで大人が小さな子供たちを遊ばせているかのようだった。
見た目は全く逆なのに。
大人が遊ばされているのだ、子供であるリヴァイによって。
地面に転がされている大人たちに誰もが口を開いて呆然と眺めて

いた。

「……すごい」

何故かは知らないが、切り裂きケニーの異名を思い出す。ファナティカーにとっても王家支持派の一人であったため、王政の一人として見られ殺される可能性が高かったためいろいろ情報を集めていたことがあった。いつの間にかウーリ・レイスの傍に居るようになったあの男。あいつの攻撃方法と似ているように感じた。

逆手で持ったそのナイフは武器で攻撃してきた男共の剣を受け流すために使用されていた。武器を盾代わりに利用して、あとは己の拳と足のみで潰しまくっている。

一撃で倒すその圧倒的な力に、無意識ながらに魅了されていた。

人は超えられない壁というものが存在する。

ウーリ・レイスとは全く別の、人より優れた圧倒的な力。化け物が人の形をしていると言われたらどれだけ幸せだったことだろう。

柵の中にいるリヴァイへ向けて銃を使った攻撃さえも人間と思えない反射能力で避けている。

そうして地面にあった石を思いっきり投げたのだ。銃を放った方向へ向けて。

鈍い音と共に倒れる兵士の姿が窓からはっきりと視認した。

貴族共があまりの混沌とした状況に悲鳴を上げて逃げようとする。

玩具たちに加えて兵士たちもやられたのだ。自分たちも攻撃されると思ったのだろう。

慌てるように裏口から逃げていく人々。きっとこれでもうこの娯楽は使えない。大赤字だ。別のやり方を探しておかないと、王政にしくじったと思われて殺される。そうファナティカーは計算していた。

リヴァイをじっと観察するように見下ろしていた。

周りの阿鼻叫喚が一曲を奏でているように感じつつも。

恐ろしい化け物だ。

まるで人の形に縮まった巨人だ。

――――そんな声が聞こえてくるようだ。
ファナティカーも同様に感じていた。
このままではあのリヴァイに殺されるだろうと。
なのに何故か、足が動かない。
彼をずっと見つめていたい。

「ファナティカーさん？　な、なんで笑っているんですか……？」
「えっ？」

怯えたような声が聞こえて、ファナティカーは我に返った。
隣にいた末端貴族たちはリヴァイにだけじゃなくファナティカーにすら恐怖を抱いているように感じた。
逃げたいけれど、ファナティカーがいるから逃げることすら出来ないと思われているのか。

「にげないんですか。ふぁ、ファナティカーさん！」
「このままじゃ……わ、我々は彼に殺されてしまう。は、早く逃げないと!!」
「……そう、ですね」

ちらりと窓の外を見た。
そうして――――ふと、目が合った。

「……チッ」

舌打ちを鳴らしたリヴァイが敵意を持った目でこちらを見上げてきたのだ。
それに恐怖で足踏みし、泣き震えてる貴族たちがファナティカーの隣で悲鳴を上げる。
その嗚咽に眉を顰めたファナティカーが彼らの方へ顔を向けた。

「……逃げましょう。幸いここから裏口へ行く手段は残されています。階段を降りなくてはいけませんが、表からは入れないよう全く別の構造となっていますし、扉も頑丈なので来れませんよ」
「そ、そうですか。では早く逃げないと！」
「……ええ、そう。そうですね」

少しだけ無念に感じつつ。
足を止めたい衝動に駆られながらも、ファナティカーは末端貴族共を連れて逃げることを選択した。
ファーランという少年はあのまま放置で構わない。
そうしなければきっと、リヴァイの逆鱗に触れるかもしれない。
このままここに居たら殺される。
それは分かっている。自分がしている凶悪さも、その娯楽も。

「何処へ逃げようって言うんだクソ野郎」
「――――ッ！」

衝撃がファナティカーの頭を抉るように走る。
回転する視界の端に見えたのは、窓の外から足を乗り出し――――立体機動装置を伴ってこちらへ侵入してきたリヴァイの姿だった。
まさか、マントをしていたのは立体機動装置を隠すためだったのか。
悲鳴を上げた末端貴族共が逃げようとしたが、リヴァイに捕まりあっけなく気絶させられていた。
片手にナイフを持っているというのに、それを使わずに手加減したのだと知る。
身体の至る所から痛みが走るが、立てないこともない傷だとファナティカーは分かった。
加減された力の入れ方は、全力でやったらどうなるんだろうかという疑問に変わる。

「ファーランを攫ったのはてめえだな」
「そ、れは……」
「てめえの何が俺を気に食わないのかはどうでもいい。ただ喧嘩を売るなら真正面から。俺に直接言いやがれ」

これは警告だと彼が言う。
人を殺さずこれで終わりにしようというのか。それともまた来ても全部ぶっ飛ばせるという余裕があるのか。

（そう。そうか……ウーリ・レイスがあんな破綻的な平和主義者なのはもしかして……）

圧倒的な力を持つが故の、余裕の表れなのではないかと思ってしまった。
いわば人間と蟻のような比較だ。
その関係性はまるで――――巨人と人間のようではないか。
蟻はあっけなく殺されるのだ。
人間に抵抗することすら出来ずに踏み潰されて一生を終える。
そんな圧倒的な力を持った人間は、道端に落ちている蟻を意識するだろうか？
いいや、人間が道端で歩く蟻を意図的に殺そうと動くのは滅多にない。それをやるのは純粋な子供か、害虫が大嫌いな人間ぐらいなものだ。
わざわざ殺すまでもない存在だから、無視している。
――――平和主義者ではない。ウーリ・レイスもリヴァイもきっと。力があるが故の余裕の表れなのだと感じてしまった。そう理解してしまったのだ。
呆然とリヴァイを見上げているファナティカーに何を思ったのか。
リヴァイはまた舌打ちを一つ鳴らしつつも、小さく呟く。

「……殺しはしねえよ。安心しろ」

そうして己を気絶させようというのか、彼の手がファナティカーの方へ伸びる。
それに慌てて彼は頭を下げた。
「悪かった。許してくれ！　な、なんでもするからお願いだ！　このまま終わらせないでくれ！」
「あぁ？　殺しはしねえって言っただろうが」
「そうじゃない。そうじゃないんだ……!!」

ただファナティカーは圧倒的な力を持った存在に、魅力を抱いていた。その感情の奴隷だったというだけだ。
リヴァイは不幸にもファナティカーの期待に応えてしまった。
己自身の力でもって全てをぶっ倒した行動力。未知の力ではない。彼自身の純粋な力。
そしてその力をウーリ・レイスと重ねて見てしまったことで、リヴァイに執着を抱いたのだ。
王家支持派という衣を脱いだ彼は、ただの狂人だっただけ。
圧倒的な力を持った存在がこんな地下街で生きている事実に驚いた。
王家ではない。地の底へ堕ちた生き方をするリヴァイという存在がどれだけ成り上がれるのかを見てみたいと思ってしまった。
「俺は貴方がどれだけ上へ上がれるのか見てみたいと思った。殺そうとしたことを許さなくてもいいです。制裁されても構いません。ただ……ただ、貴方がこれから先何をするのかを見てみたい！」

ウーリ・レイスへの執着は『壁の中に人類を監禁させて楽園を築こうとしているだけ』という目的だと知った時点で消えている。圧倒的な力を持った存在だとしても、何もしないならそこらにいる人間と変わらない。

暴力に飢えていた。
その力が何に向くのかを見てみたかった。
リヴァイがこれから先、何をするのかを知りたくなった。
商人のトップとしては失格なその性根を必死に隠していたというのに。リヴァイのせいで閉ざさなくてはいけない扉を開けてしまった感覚に襲われただけだ。

それによくわからない顔で「まあ抵抗しないならいいか……」と頷いたリヴァイにファナティカーは目を輝かせる。
そうしてファーランがどこにいるのかを知って、ファナティカーが鍵を手に意気揚々とリヴァイを案内した。

――――――未来が変わる音がする。

「なんでこうなった」

死んだ目で彼らを観察していたエレンは、ファーランが死ぬはずだった未来が何故かリヴァイが手錠などを付けないと宣言した時点で急に斜め上にぶっ飛んだ。
どんな原理でこんな変な未来に変わるのか。
混沌とした状況にエレンは頭を抱えたのだった。

第十七話、調査兵団より、地下街のゴロツキへ

ファーランが連れ去られた後、貴族共には口を閉ざしてもらっているのか、これと言った事件は何も起きていない。
ただ俺についての悪い噂が流れている程度。ゴロツキとして名が売れたこともあり、ただ歩いているだけで人に避けられるか喧嘩を売られることが多くなっただけである。
エレンはあの後何も言ってこない。
何かを覚悟したような目で俺をじっと見つめているだけ。
エレンにとっては何か都合の悪い事でも起きたのか。俺にはよくわからないが、何かあった場合こちらもちゃんと対処しなきゃいけないと言うのは分かる。
いつの間にか記憶を消去されること、意図的にエレンが何かをしなければだが……。

ファーランはあっけなく連れ去られたことでいろいろ思うことが出来たらしい。
地下街で住んでいるんだ。明日死ぬかもしれないぐらい厳しい場所なのだから、ファーランが今回の事件で一人でどう対処すればいいのか考えて悩むことぐらいは必要だろう。俺がずっとここに居られるわけじゃないし。
あれから数日。……いや、一か月ぐらいだろうか。
カレンダーがないせいでどれくらい日にちが経ったのか分かりにくい。地下街だからなおさらだ。とりあえず眠くもないし外で活発に動いている人を見る限り今は昼間の時間帯なのだろう。

「リヴァイ」
「あぁ？」

不意に、ファーランがものすごく嫌そうな表情を浮かべながら部屋に入り話しかけてきた。

「リヴァイ……なんか、商会から詫びの品物が大量に届いてるんだけど……」

「必要な物以外全部売り払っとけ」

宅急便なんか頼んだ覚えはない。

というかそういう品物が届くことなどありはしないが、ある特定の商人のロゴが刻まれている木箱をみて理解した。これあいつの仕業だと。

しかもまだ多く届いているようだ。馬に乗せられた品々がこちらへ近づいている様子が窓の外から見えたため、溜息を吐く。

「リヴァイさーん！　なんかすっげえ食べ物が届いた！　あと紅茶も！」

「それは置いとけ。後で分ける」

「リヴァイ様、他に必要な物はございますか！」

「帰れ！」

いつの間にか侵入してきたファナティカーを足蹴にして外へ叩き出しつつ、品物はもらい受けておく。

足蹴にしているのに喜んでいるような顔なのはなぜなのか。知りたくもねえが……。

エレンが「どうするんですかこれリヴァイさんのせいですよ」というような目でじっと見つめてくるのが妙にムカつく。何も言ってはこないけれど圧かけてきているのが分かる。あいつが話した未来を意図的に変えたことにまだ怒っているのか。

「……リヴァイさん」

俺の考えていることを読み取ったのか。それとも偶然か。
エレンが俺に向かって話しかけてきた。
しかし今はファーラン達がいる。だから無言で奴を睨んでやった。
チビ達は俺がファーランを助けに行く前、エレンと話していた時の記憶を失っていたからな。あの時はいろいろあったし狂人扱いされても構わないと思っていた。俺以外誰にも見えないエレンと話している姿はあまり見せない方が良いと思うし。
そう思っていると、エレンはまた口を開く。

「俺が話しても話さなくても未来が変わる。これから先どんな未来になろうとも、直前で変わる可能性があると身に染みて理解しました。地上へ出るのは確定していても……だからもう、これは俺の意地です」

（はっ？）

よくわからず首を傾けた、瞬間だった――――。
扉が盛大に開かれたのだ。
蝶番が壊れたのかと思うぐらいの勢いで開かれた扉の先にいたのは、マントを着た子供。
チビ達が急に来た訪問者に警戒し、ファーランの背中へ隠れる。
敵かと思い身構えたが、よく見ればそれは汚い格好をしているハンジだった。
そういえば訓練兵となってからもう数年が経ったのか。
成長し俺より背が高くなりやがったクソ眼鏡は、原作に近い姿をしていた。眼鏡はゴーグルに近いものを身に着け、髪の毛も伸びてハーフアップにし軽く結んでいる。
というか本当にデカくなりやがったなこいつ。以前は俺より低かったくせに頭一つ分ぐらい違いがあるぞ。
クソ。成長期にしてはでかくなりすぎだろうがクソが……。

いや俺もまだ成長期だ。少しずつではあるが伸びているはず。
ハンジは何故か頬に泥が付いているし、髪の毛からゴミのような臭いにおいがする。
こいつ風呂に入ってないな？　それとも徹夜明けか？
目に隈があるし、テンションがおかしい。

「……お前、こんな地下街で何してやがる」
「数年ぶりに会った友人にそんなこと言うなよリヴァイ～！　ああ～ひっさしぶり～!!」
「抱き着こうとするな汚物。おい誰かこいつを庭に連れていけ！　風呂に入れるぞ!!」
「はい！」
「うんリヴァイさん！　分かった！」
「えぇちょっと待って私すぐ地上に帰らなきゃだからちょっとぉ！」

連行し服を引っぺがし髪の毛を念入りに洗うよう指示する。
シャツを脱がせようとした瞬間「リヴァイのエッチ！」と変なことを言って抵抗してきたため、もうしょうがないとチビ共に任せることにした。清潔第一な習慣を身につけさせたチビ共ならこいつを綺麗にすることぐらい簡単にできるだろう。
それに中性的な顔をしているせいで性別がよくわからなかったからな。主にイザベルにやってもらうよう頼んだ。
幸い高級品たる石鹸もあの変態商人から貰っている。それをたくさん使って綺麗になってもらおう。
その後またすぐ風呂を掃除しよう。きっと汚れちまってるだろうし。
室内にて椅子に座り、庭から聞こえるハンジの呻きと騒音に眉を顰めた。俺の苛立ちに気が付いたらしいファーランが苦笑する。

「リヴァイ、あいつ誰だ？」
「ハンジっていう好奇心旺盛な変態だ。あいつがテンション高い時は

容赦なく腹をぶん殴れ」
「あー。あのさリヴァイ、変態とは関わらない方が良いと思うぞ？あと友人は選んだ方が良いんじゃ……」
「うるせえクソが」

苦笑しているファーランに紅茶を入れてもらい気ままに飲んでいると、ピッカピカで石鹸の香りがするハンジが戻ってきた。服は――――ああそうか。俺のは小さいからファーランのを渡したのか。シャツと黒ズボンを着たハンジは文句も言えないぐらい疲れた様子だった。
ドヤ顔で褒めてもらいたそうなイザベルを筆頭としたチビ達の頭を撫でておく。すごく嬉しそうにしているのでお菓子もやろう。

「全く、まさか地下街で綺麗にされるだなんて思わなかったよ……」
「お前何時から風呂に入ってねえんだ」
「……さぁ」
「きたねえ。クッソ汚ねえな汚物野郎。お前もう俺達に近づくな」
「ドン引きした顔で言わないでくれないかな！」

先ほどよりテンションが低いハンジが椅子に座って俺の呑んでいた紅茶を奪ってくる。それに苛立ち足蹴にしてやった。しかし攻撃しても紅茶を離さないので、仕方なく新しいコップを出したファーランから紅茶を受け取る。
ちまちまと飲んで少しは落ち着いたのだろう。
深い溜息を吐いたハンジが俺を見た。

「まったく、酷い目に遭った……あの子達本当に容赦がないね。石鹸でゴシゴシ身体中洗われたよ……」
「それだけお前が汚かったってことだろ。……それで、訓練兵を卒業したお前が何しに来た？」
「手紙の返事を届けに、だよ。あとお誘い」

「あぁ？」

にっこりと笑ったハンジが、俺に二つ手紙を渡してくる。

一つには「地下街生まれのリヴァイ君へ。スミスさん家のエルヴィン君より」という宛名が丁寧に書かれた手紙。

もう一つは訓練兵になるための書類だった。

「エルヴィンと話したけど結構気さくでいい人だったよ。それでリヴァイに直接話がしたいって言ってたんだ」

「……話がしたいってんならなんで奴がここに来ねえんだよ」

「いや何言ってんの、分隊長だよ？　いろいろと忙しい身だからね。本当はリヴァイに直接会いに行きたかったって言ってた。手紙だけで来れなくて済まないってさ」

「そうか」

思わずエレンの方を見た。

あいつは何も言わず俺の方をじっと見つめていた。

「それでね。あなたにはいろいろと話したいことがあるんだ。でもってリヴァイは強いだろ？　どうせなら私たちと同じ調査兵団に入ってほしいって思ってさ。今のうちに訓練兵に――――」

「駄目だ！」

机を勢いよく叩いたイザベルが、ハンジを睨みつけた。

「リヴァイさんを連れて行くな!!」

泣きそうな顔で、俺の腕を必死につかんだまま叫ぶ。

親をとられたくない子供が泣き叫ぶような声だった。ファーランも他のチビ共も何も言わないが、同じ気持ちなのかもしれない。

「あ、はは！　凄いねリヴァイ。ほんと、皆に慕われてるなぁ羨ましいぐらいだよ!!」
「うるせぇ」
ハンジは居心地悪そうな顔で頬を掻きつつ、笑ったのだった。

第十八話、試行

『――――さて、話を軽くまとめよう。君から手紙を貰った時は驚いたよ。私は君の事を知らない。だがリヴァイは私の事を知っているように書かれていた。誰かに調査を依頼したのかと思ったがそうじゃないみたいだ。これ以上書くと万が一の場合もあるため、直接会って話がしたい。そのために君も調査兵団にならないか？　リヴァイ、君の実力ならすぐさま調査兵団に入れるだろう。だが君の情報を読む限り特例で兵団へ行かせるわけにはいかない。遠回りにはなるが、目を付けられないよう気を付けるんだ。訓練兵として必要な根回しはしておこう。その後にじっくり話をしようじゃないか』

いつもの崖っぷちの場所。

立体機動装置を使ってでしか来れない、ハンジと出会ったあの大穴が開いた場所で俺は月明かりを頼りに手紙を読んでいた。

エルヴィンからの手紙には率直に「会って話がしたい」という言葉と調査兵団への勧誘。訓練兵にならずとも調査兵団に入れると書かれていることはつまり、地下街で広がる俺の噂を知っているということだ。

俺がエルヴィンを知っている理由が分からないと書いてあるから、ある程度の調査はしたのだろう。

もしかしたらあの変態商人が起こした事件については、エルヴィンが俺に対してある程度調査したのがきっかけかもしれないな。分からねえけど。

「……エレン、もしも俺がエルヴィンに原作について全てを話したらどうする？」

「その時は現時点で不必要な記憶だけを消しますよ。当然でしょう？」

まあ、そうだろうなとは思う。
エレンが進撃の巨人を受け継いでいない状況でエルヴィンに全部を話してしまうとする。きっとあいつはグリシャ・イエーガーに話を聞こうとするだろう。もしくは何かしら根回しをする可能性が高い。俺としてはその方が都合がいいが、エレンがそれを許すわけがない。だから俺が動くしかない。

（意地を張ると言っていたのもきっと……俺が調査兵団以外に行く未来があったからかもしれねえな……）

俺としてはこのままエルヴィンの元へ下らなくてもいい。
エレンを止めること。エルディア人の人権問題を解決するために、マーレへ向かっても構わない。憲兵になってもいい。アルミンに全部話してもいい。
選択肢はたくさんあるけれど、それら全部をエレンが阻止してくるというだけだ。
きっと俺が話せばこいつはすぐに記憶を消すだろう。最悪――――話した人の記憶だけじゃない。頭を何か弄るかもしれない。
なんせ意地を張ると言った直後にハンジが来たんだ。
あれは絶対に狙ってやっていた。そういう未来だから直前に話したともいえるけれど、なら何でハンジが俺と偶然この地下街と地上を繋ぐ大穴の傍で出会うことが出来たのか。
これはきっと、エレンの根回しのせいだろう。
俺を調査兵団に入れさせるために。それ以外にも、何かしら都合のいいようにするために。
――――つまりエレンは、ある程度人を動かす力があるということだ。

（いやでも、それなら何で俺を動かそうとしねえんだ？）

前世の記憶があるせいか？

それとも変に動かしたせいで変わった未来があるのか？
……まあ何にせよ。エレンにとっては俺は邪魔なだけだろう。でも切り捨てることはできない。だから無難な方向に進ませようとしている。

（エレンの都合のいいようにさせてたまるか）

エレンは俺の背後でじっとこちらを見つめているだけ。
空を見上げれば星空が輝き、そよ風が頬を冷たくさせる。手紙を懐に戻し、エレンと向き合った。

「……エレン」
「何ですかリヴァイさん」
「もしも俺がこのまま地上に向かうとして……まだ生きているグリシャ・イエーガーに会ったらどうする？」

ピリッとした殺意がエレンから発せられた。
目が細められ、俺に近づくエレンはキレた様子だった。

「かつて……まだ始祖ユミルと協力する前の俺とジークが傍に居るかもしれませんね。父さんが何をしているのかを見るために」
「俺が邪魔したらどうする？」
「させねえ。そんなことさせてたまるか。リヴァイさんが父さんの前に出ようとするなら、俺はアンタの記憶を消しますよ。そんなくだらねえ思い付きごと全部」
「くだらないかどうかは試してみたらわかると思うがな、エレンよ。つまりそれは決定的に変えてはならない未来の一つってことだ」
「どう思おうと構いません。何があろうとも絶対に阻止してみせますから――――」

敵意、殺意。そしてくだらない夢のため。

本当にこれは、くだらない争いだ。エルディア人の自由。ハッピーエンドという共通の目的でありながらどちらも違った結末へ進もうとしている。俺達の意地の張った戦いなのだ。

「なぁにしてんのリヴァイ！　また独り言？　好きだねぇ～！」
「やかましい早く降りてこい」
「はいはい。全く仕方がないんだから！」

エレンが俺から離れ、壁際で座り込む。
それとは逆にロープを垂らし降りてきたハンジが疲れたように笑って俺を見てきた。

「私はまだ新兵なんだよ。そう何度も抜け出しちゃキース団長に怒られちゃうからね！」
「そん時はエルヴィンに頼まれたとかなんか言っとけ」
「大雑把だなぁリヴァイは」
「うるせえ。オラ、綺麗にしといたぞ」
「あっ、ありがと！」

袋に入れたものを投げ渡す。
それに入っていたのはイザベル達が綺麗に洗濯し乾かしたハンジが来ていた服だった。あの時着せたファーランの服はこちらに返してもらっての交換である。ハンジが袋から服を取り出しフンフンと匂いを嗅いで「いい香りがするね。なんか使ってる？」と余計なことを聞いてくるので無視してやった。

「……ハンジ、訓練兵になるために俺は何をしたらいい？」
「えっ！　入ってくれるんだ!?」
「このままこの地下街でのんびり暮らすつもりはねえからな。それにエルヴィンと話すためには調査兵団に入った方が良いらしい」
「あはは！　エルヴィンらしいや。つまり煽られたからそれに乗って

やろうってことかー！」
「うるせえ」

またも爆笑するハンジの頭を叩いてやった。そうすると少し痛みに悶えつつ「相変わらずの暴力で変わってないな本当に！」と睨んできた。

涙目になりながらも頭を擦るハンジがふと地下街の方を見た。

崖から見える地下街は薄暗い。しかし明かりが所々で灯っているせいか、まるで星が点在するかのように輝いている。

この地下街で、どこかで誰かが死んでいるのだろう。いつものように。

「……私ね、この前初めて壁の外に出たんだ」
「ああ」
「本当に怖かった。吐いたよ。しばらく寝られなかった。一人になるのも怖かったんだ。眠ろうとして横になっても、悲鳴が耳から離れないんだ。もう壁の中にいるのに。……隣にいた上司が食べられて、同期すら犠牲になってしまう。外はそういう厳しい世界だってわかったから」

顔を伏せたハンジは壁の外での悲劇を思い出しているのだろう。

助けられるはずだった人が死んでしまう恐怖。ついさっきまで会話していた人ですら、あっけなく巨人に食われる光景。

「エルヴィンはまだ若い。私たちより年上だけど……なのにもう分隊長だ。ねえ、分かる？　上司がすぐに食われて死んでしまうから昇進が早いんだよ。だから調査兵団は入れ替えが早いんだ。……だから私も、次に壁の外に出たら死んじゃうかもしれない。いつもの日常が無くなるって思うと寝られなくてね」
「……そうか」

身体を震わせ、血の気がゼロのハンジはいつもの楽し気な雰囲気はない。
巨人に対し恐怖を抱いている様子だったが――――。
「だから思ったんだよ。なんであんなにも怖い巨人が人を食べるのか。それ以外の動物は欠片も興味を抱かず、食べようとしないくせにって……ねえリヴァイ、貴方は最後にここでいろいろ話してたよね？　巨人について何か知ってるってことだよね？」
「……」

エレンの方を見るが、奴はじっとこちらを見るだけである。
ハンジは俺が見た方向へ顔を向けるが、何もいないことに眉をしかめていたようだった。

「……俺が今言えるのはこれだけだ」
「なに？」
「俺が調査兵団に入るまで死ぬな。エルヴィン達と話をする時にお前もその密談に入ればいい。いいな？」
「……なにそれ。当たり前の事じゃん！　でもやだなー！　これでマジで死んだらリヴァイのせいだなー主に何も話さないせいで気になり過ぎて!!」
「うるせえクソが。死にたくないなら自分で調査しやがれ！」
「――――ん？　ああそうか！」

何かを思いついたかのように立ち上がってきたハンジが、興奮した顔で俺を見てきた。
「そうだよね、調査だよね!!　巨人について何も分からないから怖い。どうして人間を食べようとするのか怖い。なら知ればいいんだよ！
巨人と人間、分かり合えばきっと何かが変わるはずだ!!」
「おいクソ野郎頭をぶつけすぎて脳みそもクソになったか？」

「クソって言う方がクソなんです～！」
「んなわけあるか」
「んー。とりあえず、ちょっとは頑張れそうな気がするよ。ありがとうリヴァイ。……それと、あの赤毛の子は大丈夫？」

赤毛の子と聞かれて思い出すのはイザベルの事だった。
きっと最後に泣きながら「リヴァイさんと離れるのはヤダー！」と駄々をこねた様子が気がかりなのだろう。深夜の時間帯に選んだのも。イザベル達が寝ているからっていう理由が付く。
ハンジが離れていったあと、チビ達は俺から離れようとせず引っ付いたまま夜まで過ごす羽目になったからな。少しでも離れたらきっと泣き叫ぶだろう。
だからどうにかしないといけない。
それにファーラン達にやってほしいこともあるし……。

「まあ、何とかする」
「そっか。じゃあ……また今度。調査兵団に来てからだね！」
「ああ」

ハンジが上へあがり、「またねー」と軽く挨拶して地上へ出ていく。
それに軽く手を上げて見送った俺は、空のてっぺんに満月が浮かぶ夜空を眺めながらも、これから先の事を考えていた。
そろそろファーラン達と別れるよう、準備を進めないといけない。

第十九話、厳命

地下街で生活していくうちに、少しやり過ぎたのだろうか。
子供達の面倒を見ていくうちに自立を促すためいろいろやってはいた。いわゆる孤児院のようなものだ。でもある程度一人で生きられるようになっても帰る家は変わらない。住む場所を変えて、家を持って――――つまり、自分のテリトリーを作ってもなおチビ達はご飯を食べにこちらへ帰ってくるのだ。
ただ傍に居たいが故の執着心か、それとも家族をもう二度と失いたくないための恐怖かは分からない。
こいつらだって今は豊かに暮らせていても――――ファーランが救おうと動かなければきっとこのまま死んでいただろう。家族を失い路上で生活し、そうしていつか飢えていくだけの地獄だったはずだ。
荷物を整理している俺に邪魔ばかりする子供たちを背負い投げしたりベッドの上へ持ち上げてシーツで簀巻きにしても身体中を使って暴れまくっている。
ファーランは俺の荷物整理を手伝いながらも苦笑していた。
子供達に荷物を奪われそうになったらすぐ取り返すが、埒が明かない。

「リヴァイさん何で外に行くの？　地下街でも別に楽に暮らせてるじゃん！」
「そうだよイザベル姉ちゃんの言う通りだよ！」
「リヴァイにいしゃん、いかにゃいでぇ……」
「このまま帰ってこないの？」
「我儘言ってんじゃねえぞチビ共。やりたいことがあるだけで別に二度とここに帰らねえわけじゃねえ」
「嘘だ！」
「……イザベル」

まだまだ幼いが、チビ達よりかは姉貴分になっているイザベルがしゃがみ込んで服を畳んでいる俺の背中に抱き着く。
それに連鎖するように他のチビ達も抱き着いてくる。

「行っちゃヤダ……兄貴……」
「聞き入れろイザベル。他の自立したチビ達も離れていっただろ。地上に行った奴もいた。あいつらと何が違うって言うんだ」
「違うじゃん！　だって、リヴァイさんは……調査兵団に行くんだろ。巨人に食われるかもしれない場所に……行くんだろ!!」

だから怖いのだとイザベルは言う。
自分がそうなるわけじゃないのに。そこへ行ったら本気で死ぬと思っているような目をしていた。
他の子供たちはただ行かないでという執着心、親が離れるような寂しさから来ているように見えたのだが……。
――――おや、と少しだけ首を傾けた。

（……原作でのイザベルは、こんな性格だったか？）

漫画を読んだ記憶はあまりにも朧げになっているが、外を異様に怖がるような感じじゃなかったはずだ。それだったら何か印象に残っているか、記憶に刻まれているはずだから。
だからきっとこれは俺のせいなのだろうと思う。
もしかしたら育てていくうちに何か、影響があったかもしれない。
チラリと部屋の奥、俺達を観察するエレンを見たが、あいつは真顔で俺と視線を合わせただけだった。

「……お願い、死なないで。リヴァイさん」

グスリと泣き言を言うイザベルに引きずられて子供たちも泣き言

を喚く。

「舐めてんのかクソが」

「えっ」

「巨人に食われるために俺は地上に行くわけじゃねえよ。やりたいことがあるから行くっつっただろうが」

「……でも」

「でももクソもあるか。良いかチビ共、怖いって怯えてて何かいいことがあったか？　この地下街で生活してて、怖くて怖くて仕方がねえって閉じこもったままで良い事なんて何かあったか？」

俺の言葉にハッと我に返ったのだろう。

涙をこぼさず真面目な顔になった子供たちに向き合いながらも、俺は頷く。

「喚いてばかりでいるように育てたつもりはねえぞクソガキども」

「っ――――分かったよ兄貴！　私……ううん、俺もリヴァイさんみたいに調査兵団に入る！」

「私も！」

「俺もおれも―！」

「いやそれは駄目だ。断る」

却下を下すと即座にブーイングが飛ぶが、そこらへんはファーランに任せておこう。

地上での活動でやるべきことはまだたくさんある。地下街でもまだまだ根回しをしてほしいぐらいだ。あの変態商人にでも頼んでしまえばこいつらの奉公先ぐらいは見つかるだろうし、大丈夫だろう。

「ファーラン、後のことは頼んだぞ」

「ああ、分かってるよリヴァイ。こっちは任せてくれ」

「チビ共もしっかりやれ。しくじるなよ」

「うん！」
「分かってる！」
「大丈夫だよ兄貴！　俺頑張るから！」
「掃除も頑張るからね！」

子供たちの頭を撫でて、荷物を受け取り外へ出ていく。
後ろを振り返れば涙を流す子供たちと少しだけ寂しそうなイザベルとファーランの姿が見えた。
彼らは全員手を振って「すぐ帰ってきてね！」と言っている。
かつてはここはケニーと俺が暮らしていた家だった。今となってはチビ達が暮らす手狭な家になってしまったが……。

（……いつかまた、絶対にここにケニーを連れて帰ってやる）

その時が少しだけ楽しみだ。
あのケニーがガキどもに囲まれて老後を過ごす顔を見て笑ってやろう。そう思いながらも俺は家から離れ前へ歩いて行った。

・・・

訓練兵には様々な人間が存在する。
個性豊かと言った方が良いのか。早くも怒鳴られ走らされている人がいれば、ちょっとした諍いで喧嘩をしている人もいた。
血気盛ん。正義のためにと未来を夢見て動く者。壁の外に興味を抱き空を見つめる者。好きな人と豊かな生活を送るため憲兵団を目指す者もいた。
そんな中、教官から言われた言葉をメモしつつ歩く女性がいた。

「教官は私に向かって――――きゃっ！」
「おっと、すまない。大丈夫か？」
「は、はい……すいません……」

メモを取っていた彼女が別の女性訓練兵にぶつかり尻餅をついて転んでしまった。それに恥ずかしそうに地面に落ちた手帳とペンを拾っていく。

「立てるか？」

手を伸ばしてきたのはぶつかった方の――――眼鏡をかけた女性訓練兵だった。

それに若干恥ずかしく思いつつ手をつかみ立ち上がった彼女は愛想笑いを浮かべる。

「す、すいません。私はイルゼ・ラングナーです！　今期訓練兵として志願いたしました！」

「身構えないでくれ。私も今期の訓練兵で、リコ・ブレッェンスカという。イルゼと呼んでもいいか？」

「は、はい！　では私も、リコさんと呼んでも構いませんか？」

「敬語は止めてくれ」

「あっ、すいません……癖でして……」

「まあいいが」

微笑ましく挨拶をする二人。

少しばかり雑談をしつつ歩く横を通るのは同じく荷物を持った少年――――いや、青年だった。

「あれ、彼も同じ訓練兵ですかね？　それにしてはずいぶん威圧感がありましたね。いえ、身長から見たらずいぶん小さいですが……私達より年下の子供ですかね？」

「ああ。おそらくは……訓練兵の入隊最低年齢は１２歳だからな。おそらくは彼もそれぐらいだろうよ」

「なるほど」

「いや何でメモを取ってるんだ君は」
「これも癖です！」
「……そうか」

呆れたようなリコと「えへへ」と照れ笑いを浮かべるイルゼ。

チラリと二人を横目に見つつ、少年が向かったのは男性寮の室内だった。

荷物を置くために来たのだろう。

扉を開けようとしてドアノブへ手を伸ばそうとするが、それより先に手を取って勝手に開けた人がいた。

「荷物多いけど大丈夫？」
「……ああ」
「手伝うよ」

そう言って勝手に少年の荷物を持ちつつ部屋へ入った男。お人好しなのか「何処におけばいい？」といろいろ聞いてきて、動き。荷物を置いた後は窓を開けて空気を入れ替えてくる。

「私はモブリット・バーナー。同じ寮室の仲間として歓迎するよ。これから先も共に頑張ろうね」
「……リヴァイだ」

握手は何もしなかった。部屋が汚いと掃除を始めたリヴァイに付き添うようにモブリットもまたやるようになり、そこから何故かリヴァイに対して自然と敬語になっていくようになる。

モブリットもまた、リヴァイに影響を受けるのかは未知の領域だ。

影響を受けた先の未来がどうなるのかもまだ分からない。

彼らの様子を見ていたエレンは――――前途多難な訓練兵生活の未来を垣間見たのだった。

訓練兵　暗躍するエレンとリヴァイの攻防（疲弊気味）

第二十話、訓練兵の憂鬱

訓練兵と呼ばれてから数日。

どうにもゴロツキ時代の喧嘩癖が抜けないのかよく長官に怒鳴られては飯抜きやら外周やらを命じられてしまう。

それについ反抗したくなるけれど流石にここで問題を起こすのは駄目だと考え我慢している。

敬語だって使いたくないから使わない。だから余計に目を付けられているようだ。

でも初っ端から体力テストみたいなことをされた時人外かと思えるレベルの新記録を叩きだしたので俺を脱退させるわけにはいかないと思われているらしい。

つまり俺は今期訓練兵の問題児として扱われているようだ。

まあ調査兵団に入るのが目的だから目立っても別に問題はない。

なんせ俺が目指す先にあるのは人類最強。

ジークがトラウマになり仲間に思わず俺の名前を話して警告をする程度には派手にやるつもりだ。

それに罰として飯抜きされるのもまあまあ平気だし、大丈夫だろう。

幼少期の頃に味わった餓死寸前までの経験に比べれば気楽にできる。

それに外周を走らされる分には問題ない。むしろ二倍でも三倍でも構わないぐらいだ。

あまりにも余裕すぎて俺以外でもこれぐらいの罰なら平気かと思った。

だが頭がおかしい訓練兵は毎年のように存在するらしく、この前イ

ルゼが夜中に抜け出して訓練兵が外へ抜け出すための地図的なのを調査し記録しようとして教官に見つかり俺と同じように走らされた時は死にそうな顔でやってたし最後は倒れていた。
なんか可哀そうになってきたので水を与えたら「ぜ、ぜひゅ……はぁ……か、神様ですか……？」とか縋るような目で言われても嬉しくない。
そのあと何故かイルゼを介抱するリコに「お前あんなに走ったのに、汗を一滴も流してないのか？」と、ドン引きされた。
俺が何をしたって言うんだ解せぬ。
まあ、モブリットはともかく他はあまり会わないだろうし、気にしなくていいと思う。
あの後モブリットと共に何故かよく一緒にいるイルゼもリコも――――どっかで見たことのある顔だけど多分そこまで重要人物じゃないはずだ。
一番の問題点はエレンと話す隙が無いということだろう。
訓練兵というだけあって、チーム全体の助け合い精神。共同で働く責任感とやらを刻みつけるためか、ぶっちゃけ一人の時間が少なすぎる。
自由時間の時に外に抜け出して兵舎裏にいてもすぐ誰かが来ることがよくあるし、寮の中は誰かしらいる。
当然ながら訓練しているときにこっそりだなんて難しい。
学校じゃないから抜け出してエレンと話すのも見つかる危険が多い。問題児の看板を背負っているからあまりトラブルを引き起こすのも止めておいた方が良いだろう。いくら戦闘面が優れていても頭がイカれているから論外だと言われる線は越えたくない。

地下街ならここまで苦労はしなかっただろう。
あそこなら幽霊騒動もあってかエレンの方を見ていても「リヴァイさんそこに幽霊いるの？」と怖がるだけで何も問題はなかったし。
訓練兵である今、普通にエレンの方を睨むとモブリットが「誰かいるんですか？」と話しかけてきて好奇心旺盛なイルゼが手帳を持って

突入。
それをリコが呆れつつイルゼを押さえて「リヴァイ、何を見ていた？　また猫でもいたか？」と聞いてくるのだ。
今のところ無視をするか大雑把に話を反らしていたが、訝しげな態度からしてそろそろ追求されると思う。なんというか、ものすごく面倒だ。
いろいろと面倒過ぎて、このままリスクを背負ってエレンと話す意味はあるのかと思うことがあった。
でも、一度でもいいからエレンと話したいのだ。
――――今、お前は何をしたいのかと。何をしようとしているのかを聞きたい
時間があるのなら、エレンを問い詰めたいというだけ。
俺が安易に話しかけられず、身動きも出来にくい状況を狙っていたのか、本当に唐突にエレンがいない日が増えたのだ。
毎日のように俺の背後にいた筈のエレンが、訓練兵になった途端急にいなくなった。
まるでジークが来た時のようだと思いきや、たまに思い出したかのように俺の傍に現れて、周りを観察するようになったのだ。

（一体あいつは何がしたいんだ……）

正直に言えば――――エレンは敵だ。
だからあいつが何をしようとしているのか見定めないといけない。
そう思っていると、不意に肩を叩かれる。振り返った先には荷物を持ったモブリットがいた。
「リヴァイさん、そろそろ次の訓練です。行きましょう」
「……ああ」
とりあえず、今やるべきことはやっておこう。考えるのはその後だ。

イルゼの観察手帳

イルゼはリヴァイという少年のことが気になっていた。
それは別に異性としてというわけじゃない。
出身地が地下街というのも珍しく、また筆記以外でだとトップに君臨する体力お化けの持ち主。立体機動装置を使いこなし、憲兵団に入ることも可能と思われた人物だったからである。
だからイルゼはよくリヴァイの背中を追いかけていた。
そんなリヴァイは身体が小さく、入隊希望の最低ラインである12歳ぐらいだろうと勘違いした男の何人かが教官の目の届かないところで彼に嫌がらせをして脱落させようとしたことがある。
すぐさまそれを察知したリヴァイは何をしたのか、いつの間にか男たちが土下座をして「痛いのヤダ」「怖い怖い顔面抉らないで」とかなんかトラウマ刻まれたみたいにブツブツ呟いて泣いて許しを請う姿を兵舎裏で偶然見てしまったのだ。もちろんそいつらは離脱した。あれだけリヴァイを怖がっていたのだ。きっともう二度とここに戻らないだろう。
その頃からイルゼはリヴァイの事が気になっていた。
それを寮室で二人っきりの時に、内緒話のようにリコに話したことがある。
彼女はただ、首を傾けただけだった。

「リヴァイってあのチビの事？」
「はい」
「気になるって言われても……アンタが探求心強いのは分かってたけどさ。リヴァイはただのチビできっと私たちより年下で、それでただ壁の外に出たいって言う大馬鹿なだけでしょ」
「そう、そこが分からなくて……」
「何が？」
「地下街出身だって言ってましたけれど、私はそこから這い上がって

きた人を見たことがあります。なので少しだけ不思議で……。地上に出るだけで満足しないのかなって。なんであえて地獄を選ぶのか私にはわからないんです……」
「……アンタも調査兵団希望しているのに？」
「あ、いやその……だってリヴァイが言ってたんですよ。『憲兵なんかになって安全で快適な生活が送れるのは何も変わらない日常を謳歌しているだけだろ。前へ進むんじゃなくて立ち止まっているだけだ』って言ってたんです……だからその……」
「ふーん？　なかなか言うじゃん、あのチビ」
「ああそれとモブリットさんが言うにはあのリヴァイって人私達より年上かもしれないって話ですよ？」
「はっ？　あんなに小さいのに!?」
「実年齢が分かってないそうです。地下街出身の子供なら当たり前らしいですよ」
「そんなやばい話私に喋っていいわけ？」
「いや食堂でリコがいない時にリヴァイが喋ってましたから」
「それだけ常識だって思ってるってわけね。地下街の闇怖すぎか」

呆れたような顔のリコに、イルゼは苦笑する。
地下街から出てきた人間は太陽の光の存在がどれだけ尊いものなのか心の底から理解している。だから彼らはもう二度と地下街へは戻らないと誓うのだ。あそこは地獄だと、そう言っていたのを聞いたことがある。
涙を流し顔を青ざめて震えていた。路上で人が倒れ死んでいると。身近にいる誰かが殺されて死ぬのだって当たり前で、助け合いの精神も余裕がなければできないのだと。生きたネズミを喰らう子供がいるぐらいやばい場所だったと言っていた。それを聞いていた記者が様々な人に知ってほしいと新聞に載せようと行動していたようだが、いつの間にかその人は行方不明になっていた。
不幸な事故でもあったのだろうと周りから囁かれていたのでイルゼは納得した。地下街とは比べて平穏だが、地上でも強盗や殺人など

といった狂気は存在する。だからこの世界で生きている限り何処にいても平穏な場所はないとイルゼは思っていた。
でもリヴァイは違っていた。
モブリットと話していた会話を聞いていたところ、リヴァイにとっては地下街は実家がある故郷のような場所であり、家族が待っているのだと言ったのだ。訓練兵を卒業した後、時間があったら一度顔を見せに行くと言っていた。
他の人とは何かが違う。
彼にとっては、地下街は二度と戻りたくない地獄のような場所ではないのだ。

「……リヴァイを地下街から出したのは誰でしょうね」
「あいつチビのくせして大人吹っ飛ばせるぐらいには脳筋じゃん。案外自分で出たとかじゃないの？」
「その可能性は十分あり得ますね。でもそれなら何で訓練兵に志願したのかなって思います。地下街から出て地上に来て何で安全な仕事を選ばないの？」
「スリリングが大好きとか？」
「いえ、それにしてはおかしい。家族がいるなら出稼ぎをしに来たってことでは？　多分何か違う気がする。それに私はリヴァイが訓練兵から調査兵団へ行こうと思った理由も知りたい」

何故訓練兵に志願したのか。地下街は地獄だと聞いたが、何をしていたのか。そしてどうしてここへ来たのか。いろいろ知りたいことがある。でもそれを聞いていいのかとちょっとだけ理性が足を止めたのだ。謎を秘めた人物だと感じていたけれど、全てを話してもらえるほど親しいわけじゃない。
それに突っ込んだ話を聞いてリヴァイが自分を鬱陶しいと思う可能性があった。
リヴァイが希望しているのは調査兵団だという。イルゼも同じく調査兵団に行きたかった。だからなるべく仲良くしていた方が良い。

チームワークが重要だと言うのは訓練を通してよく理解できたし、気になることはゆっくりじっくり知っていけばいいと思うから。
イルゼはある意味、調査において我慢強さも持っていた。探究心は強いが、本来そこまで好奇心旺盛というわけではなかったのだ。
調査兵団だって希望していたわけじゃない。訓練兵には志願したけれど、ただなんとなくリヴァイの傍に居て、ふと気になったのだ。
憲兵にもなれるはずのリヴァイが何で壁の外へ行きたがるのか。
そうして思ったのは――――壁の外には何があるのだろうか、という疑問だった。
リヴァイの言葉を聞いて、心にストっと落ちたのだ。
自分は憲兵として安全な日常を送って、このままずっとみんなと同じように立ち止まっていたいわけじゃない。壁の外を知って、謎を見つけて。巨人の秘密を知って――――そうしていつか、前へ進みたいのだと。
そう思っていると何故かリコが微笑ましそうな目でイルゼを見つめてきた。

「……何ですか？」
「いや、ただアンタはリヴァイに夢中なんだなって思っただけ」
「はい？」
「恋はしてないのに興味本位だけでここまで動かすの流石脳筋チビだと思っただけさ」

そうやって笑うリコにイルゼはむぅっと頬を膨らませた。
からかわれているのは分かっている。
別にリヴァイだけに執着しているわけじゃないし。
そう思っていても話すつもりはないのだ。
それを言ったらきっとリコは問いかけてくると分かっているから。

（あの時に見た手紙。それを渡してきたのは……）

食堂から離れた場所。倉庫裏にちょっとした空間があるのをイルゼは知っていた。調査した結果そこに人は全く来ない絶好の休憩ポイント。良い隠れ場所だと分かったのだ。
しかもそこから教官たちにバレることなく外へ抜け出せる秘密の隠れ家のようになっていた。
イルゼだけが知っている情報だと思っていた。
なのにそこに――――リヴァイがやってきたのだ。偶然彼を見つけた時はもう就寝時間をとっくに過ぎた時だった。イルゼはただ眠れなくてこっそり歩いていただけ。騒がなければ教官たちが見に来る心配もないし、星を見てから帰ろうと思っただけ。
リヴァイは何故か、周りをキョロキョロと見渡していた。探し物でもしていたのかと慌ててイルゼは隠れた。一瞬視線が合い、見つかったのかと思ったがリヴァイはイルゼを無視した。
そうして小さく舌打ちを鳴らしたリヴァイは、倉庫の扉を軽く叩いた。
軽い音が響いたので教官にバレたのかと少しだけ不安になったが、リヴァイはそれでも寮に戻ろうとしない。
そうしているうちにやがて誰かが遠くからやってきたのだ。
よく見ればそこにいたのは訓練兵ではない。翼の模様が描かれたあの兵団の服装。リヴァイの頭をスンと匂いを嗅いで少しだけ笑った年上の男が懐から何かを取り出してくる。
それは手紙のように見えた。
男が出した手紙をリヴァイが受け取り、代わりにリヴァイも同じように手紙を差し出した。
手紙を持ったリヴァイは静かに寮へ戻っていく。そうして男もまた同じように離れていった。
（あの背中。自由への翼の模様は……調査兵団のものだった……）
リヴァイは既に、調査兵団と何かをしている。
でも彼は誰にも言っていない。イルゼはそれを話そうかと思った

が、脳裏に過ぎったのは地下街の生活の悲惨さについてみんなに知らせようとした記者のことだった。
行方不明となった記者が何故脳裏に浮かんだのかは分からない。でもこれを誰かに話すのは止めた方が良いと思った。それだけのこと。
夜中にこっそりと行われたそれは誰にも言えない。リコにすら話したこともない秘密の光景だった。
だからイルゼはリヴァイの事を知りたいと思っている。
調査兵団に入れば、あの時の秘密もきっと分かると思ったから。
イルゼは行動しなかった。慎重になり過ぎたせいで、判断が遅かったのだ。
リヴァイが何をしているのか直接彼に問いただせばよかったのだとイルゼは後悔する。

「……なんだろう、これ？」

リヴァイを観察し続けた結果、彼が持ち歩いていたノートを偶然見る機会があったのでそれを読もうとして、そこに書かれていた奇妙な文字系列に首を傾けたのが最後。
絵かなと思ったが、それとは違う。
文字のように見えるけれど読めない。ひっくり返した先、その一部分だけが――――。

「おいイルゼ、何見てんだてめえ」
「あっ」
「あ、じゃねえよ盗み見すんな痛い目に遭いてえのか」
「うっ、す、すいません……ちょっと気になってしまって……」
「お前の手帳が勝手に読まれても怒らねえってか？」
「いや別に私の手帳には変な内容は書かれてませんけど」
「そういう問題じゃねえよクソが」

骨が折れたんじゃないかと思えるデコピンを食らい、それに悶絶しつつリヴァイに何度か謝って許してもらったことがある。
さりげなく彼から「あのノート全部読んだのか？」とか聞かれたけれど、首を横に振って「あんな落書きみたいなの読めるわけないでしょう」と否定しておいたのだった。
ただイルゼは読めた文字があった。
なんとなく――――こう書かれていたんじゃないかなって思う文字。

（ユミルって……リヴァイの知り合いの名前なのかな……）

分からないけれど、それを聞ける状況じゃないのはイルゼも理解していた。
だから彼女は何も聞かずに黙認する。それは、無意識ながらに感じる身の危険のせいでもあった。
何か嫌な予感がしていたのだ。
誰かに見られているような視線も、イルゼは感じていたから。
ただその不気味な視線の先は――――偶然かは分からないけれど、リヴァイがたまに何もない場所をじっと眺める位置にあるなと思っていた。
だから一度だけ、リヴァイと同じように感じ取った視線の先へ顔を向けたことがあった。
――――やらなきゃよかったと、即座に恐怖を抱いた。
これは察しちゃいけない気がする。何かが見ているのだ。きっと。自分が向いた方向に、誰かがいる。誰かが、自分を見ているようなそんな嫌な感覚に襲われる。
それだけは、本当に不気味で知りたいと思わなかった。

世の中には知らなくても良い事がある。
イルゼはそう思ってリヴァイの事だけを観察するにとどめた。彼の先に何か不気味なモノがあるだろうけれど、リヴァイだったら別に

怖くはないから。
いろいろと知りたい先にリヴァイがいると理解したからでもあった。
だからイルゼは今日もリヴァイの背中を追いかける。彼が何をしているのかを知るために。

第二十一話、不穏

失敗した、と思う。
どうにもエレン相手に本格的に敵対するとして、奴の邪魔をしようと思ってもうまくいかないという話を手紙越しにエルヴィンに諭されてしまったからだ。

ぶっちゃけ手紙は誰かに読まれる可能性があるため、姿が見えない幽霊的な同居人がいるとかそういう設定で相談しているという風に見せている。
頭がおかしいと思われてもいいようにと、嘘で言い逃れできるようにするためでもあった。地下街出身だからとか偏見もあるからそれぐらいなら慣れてるし。

失敗したと思うのは、エレンのことを甘く見過ぎていたということ。
エルヴィンに全部ぶっちゃけてこれから先の未来について道連れにしてやろうかと行動したことがあった。
しかし手紙でもエレンの邪魔は入るようで、書きたいことが書けず思うようにいかない。
もしやと思い、通りがかりのモブリットに始祖ユミルについて話したことがあった。
巨人の正体。その起源。そして世界の敵について。モブリットは頭が良いからもしもエレンに邪魔されないならこのまま黙ってもらいつついろいろ協力してもらおうかとも思っていたんだ。
予想通りエレンは動いた。
モブリットと話していた数分間の記憶。それを消して俺が掃除していた時間と置き換えたらしい。
記憶を捏造されたこと。それを直接俺の目の前で見せたこと。

それはつまり、エレンからの警告だった。
自分以外の誰かに話すなと言いたいのだろう。前世の記憶、その知識を。
エレンにとって都合の悪い未来になるものは全て排除される。
俺が動いたところで問題はないみたいだが、相手に喋るのは論外ということか。
モブリットのようにエルヴィンに正直に打ち明けても意味はない。もしかしたら今までの行動すら無駄になるかもしれない。手紙だってそうだ。姿も見えない幽霊について「視線が喧しい」だの「小言がうるさいけど周りに人がいるから文句が言えにくい」だのそういう愚痴ばかりしか書けない。物語の根本に関わる話を書こうとすると手が止まるのだ。
気が付いたら手紙が散乱し書いた文字が読めなくなっている状況もあった。
正直言ってエレンについて書くことすら神経を使う。
きっとあいつは未来を何度も見直して俺の手紙の内容を注視しているのだろう。それはまるで部屋の隅まで埃がないかチェックするかのようで、妙に苛立つ。
未来を見通せる時点であいつの方が明らかに勝機は上。
エレンにとって都合のいい未来へのレールを無理やり歩まされているようなもの。
というか、そもそも未来からエレンが来ている時点で未来が変わってないってことになるのか？
あいつがいなくなった瞬間こそ未来が変わった証拠になるんじゃないだろうか。
いやでもそれに気づいたとしてもどうやって本格的に未来を変えるのかが問題だと思う。俺以外に真実を知る奴はいないし、エレンに記憶を抹消されるだけだからな。
……なら俺は、自分自身の手で動けばいい。だから都合が良いように動かしているのだろう。俺を人形のように。手紙で検証し、調査兵団に顔見せがてらいろいろ紹介してもらってはいるが、このままじゃ

埒が明かないのは当然。
　でも何もできない。自分しか動けず現状何かをやるにしてもどうすればいいのか分からないから。記憶を消される。行動を制限される。そんな状況で何をすればいいというのか。
　だからエレンの望む未来通りに従えばいい。
　そう思うだろうな、エレンから見れば。

（ふざけるなよクソが。このままで終わらせると思うかこの野郎）

　エルヴィンはきっと俺が何かを伝えたがっていることに気づいている。
　ハンジが訓練兵になる前に話すことが出来たあの内容もすべて伝わっていると見た。

　ちょっとだけ危険を伴うが、仕方がない。

「……リヴァイさん、何をする気ですか」

　考えていたら急に出てきやがる。
　つまりそれだけ未来で何かが変わったということだ。

「まだ何もしてねえだろうが」
「でもこれからする気でしょう？」
「さぁな」

　俺は何もしない。ただちょっと目の前にいるエレンについて、隠す気が無くなったってだけだ。

「このまま動いたらリヴァイさん死にますよ。いつものように直前で回避できるようなものじゃない」
「なら俺をいつものように動かして未来を回避してやればいいだろ」

「分からないんですか。もうリヴァイさんだけを止めるだけじゃ――――」
「うるせえ指図すんな」
何があろうともこれは自己責任。
そして最終的にはエレンのせいにする。
俺の苛立ちとこれからの行動に眉を顰めたエレンが、苛立ち交じりに目を細めた。
「……ああそうですか。リヴァイさんがそう言うなら俺も考えがありますから」
そういって、エレンはどこかへ消えていった。

・・・

訓練兵にとって休息の時は少ない。
それは本番に備えるため。いざ巨人と戦う時に臆して動けないという状況を防ぎ、人と争う時に逃げないよう徹底的にしごくためでもあった。
訓練は月日が進むにつれて厳しくなっていく。
それに余裕を持ちつつ動くことが出来たのはリヴァイとリコの二名。地味だがイルゼとモブリットもまあまあ動けてはいる。そう教官は彼らを評価していた。
それ以外だと人相手なら動けるけれど巨人だったらきっと即死だろうなと思える程度の者しかいない。今期の訓練兵は優秀な人材が数少ない年であった。
ただ成績トップに君臨するリヴァイが頭おかしいレベルでぶっ飛んでいただけ。
全てにおいて上位をキープ。筆記についても最初は躓いていたよ

うだったがモブリットなどと交流していたおかげかいつの間にか出来るようになっていた。
　そのおかげで彼を中心とした問題騒動も何回か起きていたようだったが全てリヴァイ自身が鎮圧している。その冷徹な判断。敵と見定めれば容赦ない行動。それら全てが巨人に向けられればとても面白いことになるだろうと。

「リヴァイ訓練兵は調査兵団に向いているでしょうな。しかし成績優秀者は憲兵団に行くことも出来ます。彼がどんな判断を下すのやら」
「はて、それはどうじゃろうなぁ……」

　ピクシスの声に教官がピクリと眉を動かす。

「それは一体どういう意味でしょうか」
「うむ。少しばかり面白いうわさを聞いてな。……なんでも調査兵団がそのリヴァイという少年を勧誘することに熱心だそうだ。わざわざ手紙を送る程度にはな」
「はぁ。それは……まあ、彼は優秀ですから」
「それに妙な噂もあってな……」
「噂とは？　私は何も聞きませぬが……」

　教官にとって訓練兵は最も近くにいる存在。
　駐屯兵団たるピクシスが知っている噂を自身が分からないということはない。そう首を傾けるとピクシスは意外そうな表情を浮かべてきた。

「最近妙に憲兵団がうろつくようになったと思わぬか？」

　そう、だろうか。
　よくわからない。教官にとってはいつもの事だと思っていた。ピクシスが何故そう問いかけるのか分からない程度には毎年変わらな

いことだと思っていた。
訓練兵を勧誘するためにどのような人材が揃っているのか見るためにこちらへ来る人が多いからだ。
そう困惑するような目で彼を見つめていると、ピクシスは飲み物を片手に窓の外を見上げた。

「まあ些細なことかもしれぬがな。ワシの考えすぎかもしれん。……いや、酔っぱらいの戯言だ、気にするな」

彼の言葉になんとなく頷いておいた。
それからというもの、教官はいつもの日常にリヴァイを観察するという動作が加わった。
ピクシスが「うちに欲しい」とは言わず、「アレは調査兵団行きじゃろうな」といったこと。そして憲兵団が動いているという件について何か裏があるのではと疑っていたからだった。
そうして理解したことがある。
どうにも最近リヴァイについての噂が絶えないようだった。
その噂は訓練兵の間ではなく外から来たらしい。

リヴァイには悪魔が見えている。その悪魔が何か悪事を働いているらしい。
そんなバカげた噂が密やかに囁かれているものの一つだった。
まさかそんな噂だけで上が動くとは思わなかったのだ。
外から来たという、何処から発祥したのか分からない噂一つだけで。

第二十二話、エレンはかなり怒ってる

リヴァイさんマジやってくれたな、と。

地団駄を踏んでぶん殴ってやりたい程度にはエレンはキレていた。

まあそれをやったところでリヴァイさんに反撃されて痛い思いをするのはエレン自身だと彼は理解していたが。だからこそ額に青筋が浮かぶほど怒っていても何も言おうとはしないのだ。

リヴァイがやらかしたのは自虐。自殺行為のような賭け。

確かにエレンは訓練兵たるリヴァイならば何もしないだろうと少しだけ離れたことがあった。何故かと言えばそれはジークが『道』にいたせいである。アルミンはまだ捕まえていないので『道』にはいないが……。

しかしジークはやらかそうとした。本来であれば一瞬だが、『道』の中ではもうとっくに数年……いや数百年という規模の長い時間が流れていた。

その間、少しの時間リヴァイと一緒に居たせいか彼に影響を及ぼしたらしく、ジークは始祖ユミルを説得しようとしたり穴にもう一度落ちてみようとしたりと変な行動に出るようになったのだ。

なんで今更ジークがやらかしてんだとエレンはキレ散らかした。

時間差によるリヴァイの影響は恐ろしいと背筋がゾッとしたが、エレンは恐怖を怒りに塗り替えて抵抗することにした。

これでジークがまたリヴァイに手を出して来たら面倒な事態になる。

始祖ユミルはミカサに執着している。リヴァイには目を向けようとしない。だからきっと大丈夫だとは思うが――――それは確実とは言えない。

始祖ユミルがあの未来のチビなおっさんを気に入るかはまだ分からないのだ。なんせ彼のフラグは本当にエレンの斜め上にぶっ飛んで成立しまくっているから。

未来を覗き見た時にエレンはギョッとした。

このまま先を行けば彼は調査兵団にならないと分かったからである。
少し前に見た時は何もなかったはずなのに、何で急にこうなったのかとエレンの目は死んだ。いつも通り死んだ魚の目でリヴァイを睨みつつ原因究明をしていた。
だから理解したのだ。
リヴァイが訓練兵でも行動を制限する意味はなかったと。
未来が急に変わった理由が何故かと言えばそれはエルヴィン団長との手紙のやり取りを注視していたら、いつの間にか団長が勝手に噂を流したせいだった。
リヴァイさんが勝手に行動したわけじゃない。ただ「俺の背後に悪魔がいるようだ」というリヴァイさんの前世の知識を借りるなら中二病のような痛い文章が並ぶ手紙のせいである。
それは勝手に誰かに読まれる危険性を考慮したものであり、エレン自身に対する文句でもあると認識していたはず。
しかしその手紙を送った後、彼はあからさまにエレン自身に話しかけるようになった。
モブリットなどがいても構わず「頭がおかしくなったか？」とドン引きされても何も否定せず。その噂を聞いたエルヴィン団長が自身の判断で噂を流したのだ。
これはエルヴィン団長による王政府がどう対応してくるのか見ようとする検証。そしてリヴァイがどう対応するかの観察も含まれていたのだろう。
なんせ何もせず誰にも気づかれず訓練を終えて調査兵団へ来てもらうはずが、なんか悪魔がいるとかそういう話が流れるようになったから、このまま来てもらっても危険因子として見られる可能性が高い。それに何故そんな行動をするのかリヴァイの考えが気になったのだろう。それで遠回しに協力しているようなものか。
このまま先へ進めば確実にリヴァイは人類最強という看板を背負うことなく終わる。

憲兵団が動いている理由は王政府が彼の噂を聞いて「馬鹿げているがまあ少しばかり様子を見るか」といった程度のものだから。
そろそろ次の継承時期だが、ウーリ・レイス王は弱りながらも彼を気にしていた。ケニーにとっての甥にあたる人物なのに、悪魔だのなんだのよくわからない話が流れているからだった。
何があったのだろう。
何かよくわからない事件にでも巻き込まれているのか。
アッカーマンの性を使わないということはそれなりにケニーが教えなかったからかもしれない。
しかしこのまま放っておいて死ぬわけにはいかない。
死は怖くないが、後悔を残したまま死ぬには惜しい。
それになんだか妙な胸騒ぎがする。だからちょっとだけ会ってみよう。ウーリ王としてではなく、ただのケニーの友人として。
そんなフラグを作り出したのだ、リヴァイさんとエルヴィン団長は。
訓練兵として生きているという話を聞いたのもその時であり、「友人の甥だし見てみよう」という軽いノリとこれから先このままだと彼が危険因子として処分されるからそれを取りやめてもらおうとする動き。そしてケニーがリヴァイの噂を聞いて近寄ろうとする未来。
――――つまり、ケニー・アッカーマンに近づき憲兵団入りするフラグが見えたのだ。エルヴィンと手を組んだ状態のままという最悪の未来が。
リヴァイが人類最強を目指すことなく終わると言うのは、原作崩壊ということ。
今いる自分が始祖ユミルと協力することが出来ず、自由を求めて進撃することなく終わるという意味だ。
（……ふざけんなよリヴァイさん）
ほんとアンタのそう言うところだけはムカつく。

俺が導いた調査兵団入りへの未来へ進めばいいはずなのに。何で訓練兵でも構わず変な未来を作り上げてしまうのか。エレンはリヴァイの行動原理が知りたかった。

（いや、俺のせいか……）

正直に言えばエレンは疲れていた。

なんせもうこれを何度繰り返したことかわかりはしないから。

始まりはリヴァイが前世の記憶を思い出したせいだった。

ちょっとだけ話をしようと思って彼に始祖ユミルの力を使おうとした。アルミンやミカサと同じように、自分が死ぬその時まで会っていた記憶を消して今までのお礼とかそういう恥ずかしい遺言を残そうとしていた。

だがその時、リヴァイは前世の記憶を思い出したのだ。

それは過去を繰り返す前――――最初にリヴァイがそれを思い出したのは始祖ユミルと手を組んだ始まりだった。

そこから未来が唐突に変化し自分が生きながらえてしまいエルディア人に平穏すら来ないまま戦争へ突入するような変動が何度も繰り返されてきた。

これはおかしいと思ったエレンが理解する。

リヴァイがなんで急に前世の記憶を思い出したのか。自分が何をしようとして、リヴァイは全てを思い出したのか。

過去を何度も繰り返していくうちに気づいたのだ。

彼が前世を思い出す可能性は、自分が始祖ユミルの力をリヴァイに使おうとしてしまったから。

だからエレンは彼に使う時期を早めて始まりより先に思い出させつつ、未来変動を防ごうとした。

やらないという選択肢はなかった。

もうリヴァイに使ってしまったから、前世の記憶を思い出さない可能性は無いに等しい。

だからきっかけを増やした。
エルヴィン団長がまだ生きている頃に思い出させ過去を変動させたこともあった。まだ彼が兵長と呼ばれていない頃に手を出したこともあった。
そうしていろいろ繰り返していくうちに気づく。
変動させた過去以降は、リヴァイが思い出しているせいで変に修正することが難しくなっていると。
いわゆるバグが増えたような状態だった。エレンが変に動かしたせいで。
それでもエレンは諦めなかった。
常人であればとっくに発狂してもおかしくないほど何百何千と繰り返しても止まらず、自分が望んだ最初の未来へ戻るために。
そうしてようやく掴んだのは、リヴァイがケニーと別れた直後の過去。
それより以降はもう過去を変えることはできない。ケニー・アッカーマンと共にエレンを止めようと足掻く未来しか残されていないようなもの。こう言いたくはないが、エレンはもうこれ以上の過去変動を行えない程度には詰んだ状態だった。

だからエレンはリヴァイにキレる。
これ以上ない未来たる平穏で分かりやすい道を歩ませようとしているのに、何でそれを飛び越えて雑草が生えた明らかにやばいと分かっている獣道を歩もうとするのか理解が出来ない。
とにかくこのままだとウーリ王と接触し、ケニーと再会する未来が早まる。
それだけは阻止しなきゃいけない。だからもう面倒くさいが手を打つことにした。
「……はぁ」
エレンはかなり疲れていた。主にリヴァイが休む暇を与えてくれ

ないせいである。